２０２３年３月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と北見局長からあいさつがあり、議事に入った。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「２０２３年度北海道地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度北海道地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、北海道道「巨大地震・津波　冬に起きたらどうする！？」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、４月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「巨大地震・津波　冬に起きたらどうする！？」
(総合　３月１０日(金)後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　冬に巨大地震が起こった場合の避難計画について、多角的に検討していた。実際に夜間極寒避難所体験に参加した釧路局の記者のコメントには説得力があった。観光地

での夜間の避難においては、観光客が安全な方角を見つけるのは容易でないと理解できた。冬の期間の防災という切り口は北海道民にとって大きなポイントであり、まとめの解説も分かりやすかった。しかし、キーワードとして挙げていた用語をうまく生かすことができておらず、もっと象徴的な使い方をしてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

キーワードへの言及が番組途中からなくなってしまったので、途中でもう一度触れておけば、視聴者の理解の助けになったかもしれなかった。

○　自宅以外で被災したときの行動を考えるうえで、たいへん参考になる番組だった。冬の避難所での温かい食事の重要性をあらためて感じた。番組視聴後には、放送で紹介していたＱＲコードからホームページを閲覧し、非常持ち出し品を自主的に確認してみた。今後も定期的に冬の防災について学んでいきたいと思った。

○　災害時の避難について寒冷地特有の問題と対策を分かりやすく発信する意図が感じられた。専門家によるスタジオ解説やＶＴＲ内での説明によって、全体的に説得力のある番組になっていた。一方で、冬の避難所生活で足りない物品を指摘しただけで終わってしまった印象を受けた。必要とされるすべての荷物を持って災害時の悪路を行くことはできるのかといった問題点を補完する説明も必要だった。

（ＮＨＫ側）

提案するだけでなく、それによって新たに浮かび上がる課題への補完的な説明が必要という指摘はそのとおりであり、今後同様のテーマを扱う際には忘れてはいけないと思う。

○　冬に地震が起こると被害が甚大になるということに焦点を絞り、冬の避難時の備えについて詳しく説明していた。冬の避難所は想像以上に寒さが厳しいことがよく伝わってきた。避難時の服装についてマネキンを使って視覚に訴えており、靴が大事ということが記憶に残った。想定される地震について、スタジオのセットを使った説明があったが、海溝型地震の特徴をもっと詳しく知りたかった。

（ＮＨＫ側）

海溝型地震についての説明は、番組の時間が限られている中ではあるが不足していたと感じる。今後の番組制作の際に生かしていきたい。

○　防災意識の向上を図るにはよい番組だった。実際に避難所に泊まってみるという試みは現実味があってよかった。今回のような番組をきっかけに災害に気をつけなければならないと再認識するので、時期を見た放送でよかったと思う。北海道の話題として親近感があったが、「北海道道」として取り上げる内容だったのかは疑問が残った。

（ＮＨＫ側）

地震というテーマは「北海道道」で取り上げなければならないと考えており、３月に放送するのが視聴者に一番届くタイミングではないかと思っていた。

○　冬季の避難に特化し、現状と課題を扱う今回の番組はタイムリーだと感じた。避難所生活を体験した親子や記者の気付きが共有されることで、視聴者も何が大切なのかを疑似体験のような形で理解できたと思う。自治体の準備や受け入れ態勢が決して万全ではないとあえて明確にしたことは、自分の身は自分で守る自己防衛の必要性を訴えるうえで効果的だったのではないか。視聴者が思わず身の回りを見直したくなるような番組を、これからも根気強く、繰り返し届けてほしい。

○　避難所体験参加者の感想から、ふだんの生活で災害への危機感を持っていてもなお足りない部分があることがわかった。ＶＲ映像を使って函館での災害を想定する事例が紹介されていたが、観光地の災害想定という視点は参考になった。視聴者により興味を持ってもらうためには、興味を引く防災グッズの紹介がもう少しあってもよかったのではないか。また、冬の被災時にもっともケアが必要と考えられる授乳中の母親や高齢者が暖をとるためにはどうすればよいのかといった疑問への解決策を明確に打ち出すことができていれば、危機管理意識向上の重要性を視聴者により強く訴えかけることができたと思う。

○　冒頭に国や道の被害想定を詳しく示しており理解が進んだ。段ボールベッドや食事が重要という説明も分かりやすかった。問題点の提示がある一方、どうすればよいのかという点が分かりにくかった。「避難の落とし穴」についての指摘も、具体的にどうすればよいのかが分からず隔靴そうようだった。また、冬の観光地での避難の在り方として紹介されていたことは一般論といえるようなものだったので、さらに踏み込んだ内容であればよかった。最後に、スタジオゲストの専門家が話していた、避難には二つのフェーズがあり、まずは逃げること、そして避難生活は意外に長く続くというコメントは冬の避難についての重要な指摘だった。

（ＮＨＫ側）

具体的な対策を示すべきではという指摘に関して、ＮＨＫ北海道では地域社会のニーズを調べ、それに応えていくプロジェクトを 2023 年度から始める。そのテーマの一つに「防災」を据え、日常の中に防災を考える習慣を作るという取り組み、ムーブメントを作りたいと考えている。

○　今回の放送は、住民にとって何が必要かに焦点が当てられており、視聴者の関心が高かったのではないか。避難所内の気温が夜は７度台ということに驚いた。ほかにも具体的な情報が示されており、視聴者が避難を疑似体験できたと思う。番組ホームページにも備えの問題についての有益な情報が掲載されていた。災害に関する情報へのニーズは、地域や生活スタイル、使用している言語など住民の事情によりさまざまなので、それぞれのニーズに目を向けた番組作りを続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

一つの番組だけで終わるのではなく、ニュースの企画やウェブ記事、ＮＨＫ北海道で展開している防災のホームページでも情報を分かりやすく整理して発信し、より多くの方が知識を得られるようにしていきたい。

○　東日本大震災が発生した３月１１日を前に、防災意識を喚起する番組を放送することは重要なことだと感じた。この番組は、冬の避難所での低体温症への対処について掘り下げられており、非常に参考になった。段ボールベッドや災害用トイレなどは家庭でも準備が必要だと再認識した。スタジオゲストの専門家が挙げていたキーワードは、避難生活のポイントを分かりやすく押さえていた。自分の身は自分で守るという観点で災害時を想定して備えることが大切だと改めて感じた。分散避難など自治体だけでなく企業と住民が一緒に議論しながら備える必要があるものについては、取り組みがどれくらい進んでいるのか気になった。先進事例の紹介によって地域の企業と住民との連携が生まれたり、強まったりすることもあるのではないか。「防災対策をすれば死者数を８０％減らせる」というキーワードを紹介していたが、もう少し分かりやすく、誰もが親しみやすい形で浸透することで、ふだんから防災意識を持つことにつながってほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

「防災対策進めると死者数８０％減」というキーワードは、防災番組を放送するにあたって重要なことだと考えているので、

今後は詳しく説明することを意識していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月３日(金)の道北・オホーツクスペシャル「自治体広報が伝える　ふるさと自慢スペシャル」(総合 前 1:20～1:44 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)をＮＨＫプラスで見た。自治体の広報担当者が映像撮影やインタビュー、リポートを行っていた。地域の人々とともに番組を制作していることがよく伝わってきて、新鮮さを感じながら好感を持って見ることができた。ほかのエリアで放送されているこのような番組もＮＨＫプラスの配信だけでなく、視聴できればよいと思った。

（ＮＨＫ側）

平日後６：４０から道内の各エリアで放送している番組も、今後ＮＨＫプラスで配信する予定である。

（ＮＨＫ側）

この番組は、自治体の担当者とやり取りをしながら、地域ならではの情報を発信している。引き続き、さまざまな自治体の情報を紹介していきたいと考えている。

○　３月３日(金)のどうみん手作りクイズ１７９Ｑ「第３回」(総合 後 7:30～7:56.30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)と１０日(金)の「第４回」(総合 後 7:57～8:23.30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。冒頭からテンポがよく見やすかった。出演した地域の人々との連携もスムーズだった。特に「第４回」では、スタジオゲストの武田真治さんと番組ＭＣの加藤浩次さんとのやり取りを楽しんで見ることができた。

○　３月３日(金)のどうみん手作りクイズ１７９Ｑ「第３回」と１０日(金)の「第４回」を見た。「第１回」や「第２回」よりも演出がよりわかりやすくなっており、字幕スーパーやイラストをもふんだんに使われていて、丁寧に制作されていると感じた。これまでにクイズを出題した市町村の合計数が分かるような表示があるとよいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

この番組は、クイズのアイデアを出して、出演もしていただく各自治体の方々がいなければ成立しない番組である。ＮＨＫ

の放送を視聴者と一緒に作っているということが提示できているとすれば意味があると思っている。画面の表示については、視認しやすいように工夫を続けていきたい。

○　３月３日(金)のどうみん手作りクイズ１７９Q「第３回」と１０日(金)の「第４回」を見た。「第１回」や「第２回」と比べて、紹介されている市町村の場所が地図で見やすくなっていた。ただ、全国放送で北海道を扱っている番組のように、市町村の名前や場所をもっと丁寧に紹介する努力が必要だと思った。そのほか、手作りクイズは地元の特色ある産業をプレゼンする形式が多いが、もう少し形式に幅があってもよいのではないか。出演する方々による、一般の方ならではというような内容の手作りクイズも見てみたい。

○　３月５日(日)の北海道スペシャル「知床　いのち巡る地より」(総合 後1:05～1:50 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。この番組にはナレーションがなく、最初は慣れない感じもあったが、新鮮さも感じられた。また、知床の自然と、美術家の創作活動や暮らしぶりが美しい映像とカメラワークで捉えられており、とても感動した。

（ＮＨＫ側）

制作者は４５分もの長時間をノーナレーションでよいものかと戸惑いながらも挑戦した。ノーナレーションだからといって沈黙ばかりではなく、知床のいろいろな声や音が聞こえてきたことで、むしろじょう舌な世界を表現できたのかもしれないと思う。

○　３月５日(日)の北海道スペシャル「知床　いのち巡る地より」を見た。ノーナレーションだったが、芸術がテーマだったので、ナレーションによる説明がなければ内容が理解しづらかった。周りの音や出来事が自然に映り込んできて臨場感が出るのはノーナレーションの長所だが、理解の難しい世界については分かりにくくなってしまうと感じた。３月１１日(土)の「ＮＨＫニュース　おはよう北海道　土曜プラス」で放送した、氷下を舞うフリーダイバーを取り上げたリポートではノーナレーションが効果的だった。フリーダイバーの「１本のダイブが人生を凝縮したような感覚がある」という言葉が斬新で、鮮やかな印象を持った。

（ＮＨＫ側）

芸術がテーマの番組では、補足としてのナレーションが必要だったのではないかという指摘はたいへんよく理解できる。一

方で、ナレーションで意味が分かるということは、映像から感じる余白のようなものを失っているという可能性もある。視聴者が自分自身で解釈し、意味付けしていくことによってさらなる想像につながったり、あるいは全く意味が分からなくても衝撃を受けたりするといった効果がノーナレーションの醍醐味だと考える。

○　３月９日(木)の道東スペシャル「語ろう　これからの私たちの“まち”」(総合 後7:30～8:45 帯広単･釧路単)を見た。１月末でデパートが閉店したその後のまちの未来を語り合う生放送で、高校生たちも語り合いの輪に加わっており興味深かった。まちのにぎわいをどう作るかといった、さまざまなテーマに沿って、出演者それぞれの声を聞き合う展開は見応えがあった。高校生ボランティア団体のメンバーが中心街の商店街を訪ねて、店の人と話をしながら、まずは意見を聞き合う関係を作って思いを共有することが、新たなまちづくりのヒントになると気付く様子が印象的だった。帯広局がまちづくりの今後という多くの視聴者が関心を寄せる話題について討論番組を放送する意義は大きく、ＮＨＫも議論に加わり、地域課題の解決にともに取り組む姿勢を具現化した番組だった。

（ＮＨＫ側）

地域のために何ができるかというだけでなく、その先にある「地域とともに」や「地域の一員として」といった志を持てるよう模索を続けていきたい。

○　３月１３日(月)の道東スペシャル「語ろう　これからの私たちの“まち”」(総合 前0:54～2:09 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)の北海道ブロックでの再放送を見た。学生から経営者に一方的に意見するという構成になっていたことに疑問を感じ、その意見の実現可能性も意識した構成にしてほしかった。スタジオの出演者にもう一人、経営者や地域の経済界の方がいればよりよかったのではないかと思う。

○　３月１０日(金)の北海道を愛した画家たち～紋別で暮らし描かれた風景～「村瀬真治」(総合 後 3:55～4:00 旭川単･北見単)を見た。８０歳まで流氷を描き続けた画家の作品について、初期から晩年までの作風の変化を追いながら、ゆったりと見ることができる番組だった。

○　３月１４日(火)のプロ野球２０２３「日本ハム」対「西武」(総合 後 1:30～5:50 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ＮＨＫと民放各局が同時に中継しており、話題性があるといえど

も複数局で放送する必要はないのではないかと感じた。各テレビ局が同時に放送するのであれば、中継内容をすみ分けしておくべきではなかったか。

（ＮＨＫ側）

北海道日本ハムファイターズの本拠地、エスコンフィールド北海道で行われる最初の試合ということで注目度が高く、ＮＨＫが中継を予定していたところ、民放他社も中継があると直前にわかった。視聴者の高い関心に応えられるようＮＨＫ独自の演出で中継したつもりだったが、結果としてそれほど差別化が図られていなかったと感じる。スポーツ中継に限らず、民放と連携や協力すべきところは議論していかなければならないと考えている。

（ＮＨＫ側）

この中継は、通常の同時間帯の約６倍の世帯で視聴され、視聴者の関心の高さをあらためて認識した。一方で、午後３時台は全国放送では大相撲を放送していたが、北海道地方では後３：５４までプロ野球を放送したことに対して視聴者から多くの意見が寄せられた。今回の番組編成や中継における演出は、エスコンフィールド北海道のこけら落としという二度とない出来事の価値を重視した結果だが、視聴者からの意見を参考にしながら今後に生かしていきたい。

○　２月２０日(月)のクローズアップ現代「シリーズ侵攻１年　ウクライナ“真実”を追う記者たちの闘い」を見た。非常に迫力のある映像やリポートが続いた。ウクライナの放送局についての取材では、ウクライナの放送局が非常に冷静に、常にウクライナの政権を監視しようとするマインドを強く持っていることが分かった。これが健全な報道の在り方であり、ＮＨＫが放送する映像としては自らの姿勢を正す意味もあったと思う。

○　２月２１日(火)のクローズアップ現代「シリーズ侵攻１年　ロシア　市民たちの１２か月」を見た。２夜連続放送の２日目はロシアを取材しており、ロシア軍の支援活動をしている人の、ロシア人はこの戦争をどのように認識しているのかを示す言葉を紹介したことには大きな意味があると感じた。一方、キャスターが国家と国民を一緒に非難して戦争は止まるのかというロシアへの問いかけをしていたが、これには承服しかねた。現段階でロシアの侵攻批判にブレーキをかけるようなコメントはふさわし

くないと思った。

○　２月２２日(水)の時論公論「ウクライナ侵攻１年　経済制裁の効果と今後のリスク」を見た。ロシアのウクライナ侵攻から１年を評価する中で使っていた「ポスト冷戦」という言葉の意味するところが曖昧だったのではないか。また、国際秩序の話をするならば、国連の状況にも触れ、国連には何ができるのかというところから論じてほしかった。

○　２月２３日(木)の「ウクライナ　子どもたちの１０００枚の絵」(BS1 後 6:00～7:49)を見た。前編では、十勝出身の画家とウクライナのハルキウにある芸術学校の美術教師が、お互いの戦争体験や子どもたちの描く絵画の表現を通じてウクライナや世界の平和を希求する姿が丁寧に描き出されていた。後編では世界中に取材を広げており、子どもの絵から世界を見ていくという展開に感心し、平和の大切さを随所に感じた。

○　２月２３日(木)の「手話で楽しむみんなのテレビ×ドキュメント７２時間」(Eテレ後 10:30～11:00)を見た。ろう者に内容がよく伝わり、理解しやすくなる「ろう通訳」を行っていた。コメントしている人の微妙なニュアンスが伝わることで、耳が聞こえない人にもより一層番組を楽しんでほしいという番組制作者の意図が伝わってきた。

○　３月２日(木)のあさイチ「愛(め)でたいｎｉｐｐｏｎ　北海道～極寒の大地でホッとな出会い～」(総合 前 8:15～8:55)を見た。函館市内から大沼エリアに至るまで函館局のアナウンサーがニッチなスポットを紹介していた。北海道の個性的な部分として、あえて食や景観ではなく「人」に注目した内容となっており、楽しみながら見ることができた。出演者には若い人が多かったので、若者向けにＮＨＫプラスで配信があることをもっと周知してほしい。

○　３月４日(土)のＭＥＷＥ「１７歳高校生のルーティン」(総合 後 4:13～4:15)を見た。２分ほどの短い放送の中で胸がしめつけられるようなシーンがいくつもあり、印象に残る番組だった。ヤングケアラーの日常を描いており、より鮮明に当事者の生活が想像できた。

○　３月４日(土)のＮＨＫスペシャル「南海トラフ巨大地震　第１部　ドラマ」(総合 前編・後 7:30～8:48、後編・後 10:00～10:54)を見た。番組の冒頭と最後の解説で、南海トラフ地震の概要をイラストやグラフなどで視覚的に分かりやすく整理していた。直接被害が想定されるいくつかの地域ごとにどのようになるかが示されたことで、日

常生活の中で不意に襲ってくる地震の恐怖を改めて認識し、備えが必要だと感じた。

○　３月５日(日)のＮＨＫスペシャル「南海トラフ巨大地震　第２部　“最悪のシナリオ”にどう備えるか」(総合 後 9:00～9:59)を見た。第１部のドラマで想定されていた事態への対処や準備など多角的な提言が盛り込まれていたので、災害の全体像を重層的に把握できた。自治体や個人、企業それぞれが災害に備える必要性をあらためて感じた。政府や自治体ができることには限界があるとはっきり述べていたが、それならば自分の身を自分で守るためにどうすればよいのか方策を示してほしかった。

○　３月１０日(金)のドキュメント７２時間「冬の北海道　村のコンビニで」を見た。初山別村の村に１軒だけしかないコンビニを撮影場所に選んだのは興味深かった。地域のよさや課題がさまざまな角度から浮かび上がっていたと思った。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャル「海辺にあった、町の病院～震災１２年　石巻市雄勝町～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。石巻市雄勝町の病院の関係者に取材した番組だったが、定点観測のように震災のことを毎年見ていくということの大切さを感じた。ノーナレーションという演出手法を取り、病院の看護師や医師、震災で亡くなった人の関係者の言葉をつないでいくことで、震災を風化させない効果があると思った。

○　３月１１日(土)のレギュラー番組への道「ネコが選ぶ！アニマル動画グランプリ」を見た。５日間かけた科学的計測、ゲストや専門家の自由なコメント、アナウンサーの実況などすべてに笑いどころがあり、あっという間に番組を見終わってしまった。

○　３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「震災１２年　復興の地図～“希望の芽”を探して～」を見た。女川や石巻の将来性の高い事例を紹介していたが、紹介の手法として国勢調査のデータを分析して、グラフ化あるいは図にして示すという手法は斬新だと思った。被災地に起きていることは、これから人口が減少する日本全国でも散見される事例だという視点には共感でき、全体的に分かりやすい番組だった。

○　３月１３日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ．選「見えない人の“みる”世界」(総合 前 0:00～0:19.45)をＮＨＫプラスで見た。３人の視覚障害者が世界をどうイメージし、その中でどう生活しているのかを日々のＶＴＲを交えながら語っていた。３人のイメージを提示する際に、３人の言葉が過不足なく組み込まれており、「見えている世界」のイメージも言葉に忠実に再現されていた。同一の空間を見ているにもかかわらず、三者三様な様子が興味深かった。視覚障害者が見る世界を知ることで、視覚

障害を持たない人々が自分自身を知ることができる番組だと思った。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

会議では、まず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２３年度北海道地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、3月の番組編成の説明と放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜「２０２３年度北海道地方向け地域放送番組編集計画(案)」について＞

○　説明の中で触れられていた「健全な民主主義の発展に寄与する報道」について、選挙は民主主義の基本だが、選挙報道は候補者の勝敗が中心となり、民主主義をどう守

り、どう発展させるかというところにつながっていかない。そのような現状がある中で、ＮＨＫは選挙報道においてどのように民主主義に寄与するのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

普段から、放送はもちろんインターネットでも一面的な情報提供ではなく各候補者の主張を公平に伝えることを心がけている。また、多様な考え方をきちんと提示することで、有権者が具体的に考えるきっかけを作ることに寄与したい。

○　「選挙と民主主義」というテーマで言えば、なぜ有権者は投票に行かなくなるのかといった投票率の低さを掘り下げたり、地方議会で議員のなり手不足による定員割れやいわゆる「無風選挙」が増えている根底にはどのようなことがあるのか探った番組も見てみたい。

（ＮＨＫ側）

社会がいびつな形になりつつあるともいえるなか、そこで踏みとどまるためにＮＨＫの果たす役割の大きさを肝に銘じながら、報道の在り方を検証し、改善すべき点があれば改善に努めたい。

○　北海道を４つのエリアに分けての放送が４月から始まり、道東エリア向けの「ほっとニュースぐるっと道東！」については、十勝・釧路３２市町村へのきめ細やかな取材のうえに、１５分、時には２０分の放送があり、地域の情報を知るためのよい番組になっていると感じる。十勝、釧路、根室は地域性も異なるが、これからも地域の課題や魅力などを発信することに尽力してほしい。

（ＮＨＫ側）

エリア向け放送が始まる前には、釧根の方々が十勝の情報を必要としているのかなど、さまざまな意見があった。放送が始まってからは、各市町村で好評な意見をいただいている。引き続き、内容のブラッシュアップを図りながら、地域の人々に親しまれる放送になるよう努めていきたい。

○　芸術・文化についての具体的な記述がなかった。北海道でしか撮ることができない美しい風景も多くあり、各地域の文化や芸術も積極的に取り上げてほしい。

○　基本方針にあるスポーツと同様に、芸術・文化もぜひ取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

芸術・文化、エンターテインメントについては、今年度も「北海道道」を中心に、さまざまなジャンルの番組を放送してきたが、新年度も多様なジャンルを届けることを意識して心がけていきたい。

○　民主主義に資するべきというのは公共放送にとって大きな使命だと思う。政治と生活がつながっているという感覚が希薄になりつつある中、メディアがどのように情報を伝えるかが、有権者がよりよい選択をするために非常に重要である。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは、有権者の具体的な投票行動に結びつくための情報提供を年々増やしている。４月の統一地方選挙でも引き続き、デジタル発信を含めて公平性をしっかりと担保する意識を今まで以上に心がけて報道していく。

○　選挙に関して強い関心を持っている人と、全く持っていない人の温度差が大きいと日々感じている。ＮＨＫには、有権者が関心を持って投票行動に移るような情報提供を期待したい。

（ＮＨＫ側）

選挙にはさまざまなバリアがたくさんあって、有権者が平等に選挙権を行使できていないのではないかという問題意識から、ＮＨＫでは昨年の参議院議員選挙のときに「みんなの選挙プロジェクト」を立ち上げた。最初は障害を持つ方に向けて始まったが、記者が公約を分かりやすくなるように書き直すなど、いろいろなバリアを取り払うと、若者からお年寄りまであらゆる人にとって、選挙への敷居が低くなると思った。同様の取り組みは、４月の統一地方選挙でも行いたいと考えている。

○　諮問された「２０２３年度北海道地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２１日(土)の「ＮＨＫニュース　おはよう北海道　土曜プラス」を見た。リポート「風車で被害・野鳥」で、ワシの専門家が、風力発電機によるバードストライクの原因を解説しながら、調査の必要性とそのデータを建設場所の決定などに生かすことの重要性を解いていた。再生可能エネルギーの発電について功罪両面を明らかにし、課題の解決策も含めてより適切な判断につながる材料を提供する番組制作を今後も求める。

○　１月２７日(金)の北海道道「白銀の大縦走を語る　北海道の稜線６７０キロの旅」(総合 後 7:30～8:13 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。アドベンチャーレースの第一人者である田中陽希さんからのコメントが加わり、この挑戦の難しさが理解しやすかった。番組ＭＣからの素朴な質問や実演が冒険のリアリティーをよく伝えていた。スタジオでの本人の回想は胸に響くものがあり、前人未踏の偉業を伝えるために効果的だった。本人が語ることばのすべてがとても印象的だった。

（ＮＨＫ側）

「白銀の大縦走」という挑戦の困難さや、本人の「強さ」への思いが視聴者に伝わるよう意識して番組を制作した。

○　２月３日(金)の１７９～あなたのマチにおじゃまします～「道南出張編」を見た。江差町、福島町、知内町といった桧山地方を中心とした内容は、それぞれの地方の「こういう場所」というイメージを超えるものだった。番組の司会が「このように本当におもしろい地域の情報があるにも関わらず、よさが十分に伝わっていないのはもったいない」とコメントしていたのが印象的だった。グルメ情報は函館の情報が入っており、バランスを考えた番組構成だと思った。ＮＨＫには都市部と地方をつなげる役割を果たしてもらいたいと日頃から期待している。今回の番組は桧山地方を中心とした内容だったが、あえて函館市のグルメ情報を取り上げたのには函館市中心部の人たちにも道南の少し離れた場所に興味を持ってほしいというねらいがあったのか聞きたい。もう一つ、「１７９」と「１７９Ｑ」の両方で地元の人がレポーター役を務めて

いるのは、地域人材の掘り起こしというねらいがあってのことなのか。

（ＮＨＫ側）

地元の方にクイズのリポーターとして出演してもらっているのは、地域の人々との「共創」を実現していくための一環として行っている。地域の方自身が、伝えるべきことを考え、ＮＨＫの放送を通じて地域の情報を伝達・表現することが、これからの公共放送において求められるようになると考えている。また、函館のグルメ情報については、道南地域の中でのバランスを取った結果だった。

○　２月６日(月)～１０日(金)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見た。「あったかい！胆振」と題して、地域活性化への取り組みをはじめ、地域それぞれに抱える問題や課題、希望を地域の人々の目線で伝えていた。どの回も各地の「あったかい！」情報を楽しく見ることができたが、取材する側とされる側双方の熱い思いが伝わり、共感できたからだと思う。地域にこだわった特集は自分が暮らす地域を見直す契機にもなった。

（ＮＨＫ側）

地域の課題と希望の両方が見えたという意見をいただいて、じっくりと時間をかけて地域のことを伝えることで、いろいろなことが伝わっていくのだと改めて感じた。地域の人々にどのように受け取られているのかを分析して、今後につなげたい。

○　２月１０日(金)の北海道道「後継者がいない…密着!事業承継」を見た。北海道が持続していくために必要な話題を取り上げていた。異業種のノウハウや情報収集に長けた経営者が事業を承継することで想像以上のよい反応が期待できると思った。これからも活力ある北海道経済であるために大切な視点が多くちりばめられた番組だったので、今後も多角的な視点からこの課題を取り上げていってほしい。

○　２月１０日(金)の北海道道「後継者がいない…密着!事業承継」を見た。事業承継をした後の大変さについて、この番組構成では十分に伝わらなかったと感じた。事業承継はタイムリーな話題ではあるが、具体的に進んでいる事例やその事例の課題といったネガティブな側面も見せなければ、番組を見て実際に事業承継したいと思った人が思っていたことと違う現実に直面して驚いてしまうのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

当事者では気付きにくい事業の魅力や価値を発見していく動きの一部を紹介できたが、取材対象の人々の厳しい側面も取り上げられるよう今後も継続的に取材して放送していきたい。

○　２月１０日(金)の北海道道「後継者がいない…密着!事業承継」を見た。今回の番組は、一企業の後継者問題という話だったが、地域全体の問題だと感じた。公的な支援センターの過去の実績が分からず、知りたかった。番組冒頭と後半で「北海道ならではの課題がある」とのコメントがあったが、番組を通してその課題が何かわからなかった。道内の企業の７割が後継者問題を抱えているという話題でも詳しい説明が不足していたと思った。

○　２月１０日(金)の北海道道「後継者がいない…密着!事業承継」を見た。雄武町の事例では、経営者と事業引継ぎを希望する方の面談に緊張感があり、見ていて興味深かった。企業活動に付随している数字で表せないものの中には、経営者の事業への思いも含まれているからこそ、事業承継には難しさがあると感じた。また、「課題先進地である北海道」という紹介がなされていたが、「課題先進地」とはどういう意味なのか番組から読み取れなかった。

○　２月１０日(金)の北海道道「後継者がいない…密着!事業承継」を見た。番組冒頭では北海道における後継者のいない割合が全国４位で高位と示されて納得できた。しかし、その後しばらくは後継者が見つからないことの北海道ならではの理由が示されなかったように思う。雄武町の事例は札幌からの距離が事業承継の足かせになっているわけではなく、協議して引継ぎがうまくいっているので、課題には当てはまらないのではないかと思った。番組が進み、北海道事業承継・引継ぎ支援センターの方の解説でようやく北海道ならではの課題が２つ示された。ただ、北海道では子どもや親族以外に事業を譲りたいというケースが多く、それが北海道の特徴だという説明はふに落ちなかった。もう一つ、北海道は広いからという説明についても、広いなりのメリットもあるということだったので、課題の説明にはなっていないのではないかと思った。さらに言えば、スタジオゲストの解説コメントにあった「大量引退期」ということばが、いつのどの年代を指すのかも分かりにくかった。最後の番組ＭＣのコメントも事業承継への希望は語られていたが、北海道の課題や、その課題を解決するための方策にまで言及してほしかった。

○　２月１４日(火)の「ほっとニュース北海道」を見た。当日の地域の話題、道民にとって必要なニュースがおおむね適切に、それぞれが飽きることのない長さで報じられて

いた。「アポ電」の特集コーナーは、「なるほど」という学びや気を付けたほうがよい新たな知見を得ることができた。北海道のマスコミが取り上げるべき責務があると言える、北方領土にまつわる話題もあった。また、沖縄で行われた北海道日本ハムファイターズの練習試合を伝えるスポーツコーナーもあったが、「2023 年度北海道地方向け地域放送番組編集計画」の中で「道民目線」とうたっているように、道民の地域スポーツ情報のニーズをくみ取っているのではないかと感じた。新年度から「ほっとニュース北海道」がどう変わっていくのか、また「道民目線」がどのように表現されるのか注目していきたい。

（ＮＨＫ側）

「アポ電」については時間多く使って、解説を交えて伝えた。北海道はもちろん全国でどう備えたらいいのかということは大きな関心を呼んでおり、詳しく伝えることとした。また、北方領土の話題もこまめに伝えており、できるだけ機会を捉えて全国への発信も心がけている。スポーツは道民の関心の高さに応えるために、コーナーとしてできるだけ日々伝えるようにしている。新年度は視聴者に一層より寄り添った伝え方ができるよう検討を重ねている。

○　１月２１日(土)のＤｅａｒ にっぽん「この畑から生き直す～北海道・十勝～」を見た。この番組で最も伝えたかったことである、青年の苦悩と現実、彼らに関わろうとする人々の苦悩や現状を理解できた。「北海道道」の放送からは登場する青年が一人に絞られたことで、本人の苦悩や葛藤への深い共感や理解につながった。

（ＮＨＫ側）

「Ｄｅａｒにっぽん」では、「北海道道」の放送よりも主人公ともう一人の青年のけんかの前後のシーンを長く編集することで、丁寧に経緯を伝えるようにした。視聴者に訴えかけるものがあり、地域の課題が動くきっかけになるような番組をこれからも制作していきたい。

○　１月２１日(土)のＤｅａｒ にっぽん「この畑から生き直す～北海道・十勝～」を見た。タイトルにある「畑」の位置づけを理解するのが少し難しいと感じた。青年たちを受け入れている方が、３つの作物が助け合って成長していくという話を主人公の青年に伝えるシーンが印象的だった。１人の青年の葛藤を通して、粘り強く温かい愛情を注いで支えてくれる人のつながりがあれば、人は生き直せるのだということが伝

わってきた。今後もこのように注目されにくい地道な活動を発掘し、社会に訴えかけるような番組制作を期待している。

○　１月２７日(金)の「山と原野とスケッチと～日高山脈と生きた画家　坂本直行～」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後10:00～10:59)を見た。日高山脈に魅せられた主人公の生涯を知ることで、その魅力や価値を再認識できた。地元の児童詩誌の表紙を２２年間、無料で描き続けていたことなど、主人公が地元の人々に広く愛されている理由を余すところなく伝えていた。

（ＮＨＫ側）

担当したディレクターの丁寧な取材により、番組を制作することができた。今後もエリア向け放送で、坂本直行さんに関連する企画を放送していく予定である。

○　２月７日(火)のクローズアップ現代「強盗から“家”をどう守る　進化する“闇名簿”の実態」を見た。番組を家族で視聴する中で、防犯についての会話をすることができた。具体的な防犯対策を取るきっかけとなり、このような番組はとても大切だと思った。

○　２月７日(火)のうたコン「生放送！阿久悠特集」を見た。世代の違う出演者たちの掛け合いを見ることができるのもこの番組の魅力だと感じた。阿久悠さんは非常に多くの歌詞を残しているが、このように昭和の時代などが感じられるような、普遍的な価値を持った歌番組を届けてほしい。

○　２月１１日(土)のＤｅａｒ にっぽん「ギフテッドが見る世界は～東京・渋谷～」を見た。ＩＱ130以上の知能を持つ若者「ギフテッド」を取り上げていた。今回は２人のギフテッドにスポットを当てており、彼らが日々大きな悩みを持って暮らしていることがうかがわれた。勉強ができたとしても、現状では学校に居場所がないことがわかり、学校教育が変わっていかなければいけないと感じた。あるいは、それぞれの個性が生かされる社会になっていかなければならないと思わずにはいられない番組だった。

（ＮＨＫ側）

「ギフテッド」は最近注目されているが、ＩＱが非常に高いからこそ、生きづらさを感じる子どもが多い。また、知能が高くて強い好奇心があり、だからこそ知っていることを繰り返し

学ぶことに耐えられないことで、学校教育から取りこぼされてしまう子どものことを「落ちこぼれ」の逆で「浮きこぼれ」と呼んでいる。そのような問題を「ハートネットＴＶ」などの番組で取り上げることで、そういった子どもたちやその保護者に寄り添う内容を放送している。

○　２月１３日(月)のグレートトラバース３　１５ｍｉｎ.「２７７座目　北海道駒ヶ岳」(BS ﾌﾟﾚﾐｱﾑ 前 11:45～後 0:00)を見た。プロアドベンチャーレーサーの田中陽希さんが 277 番目に選んだ山として駒ヶ岳に登っていた。私たちの普通の登山とは全く違った視点から駒ケ岳を見ることができ、非常に新しい発見になった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と室蘭局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「白銀の大縦走　北海道分水嶺ルート６７０キロ」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、２月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜「白銀の大縦走　北海道分水嶺ルート６７０キロ」
（総合　１２月３０日(金)前7:20～8:19)について＞

○　今回の挑戦は偉業と言っても差し支えないと思う一方、この番組をきっかけに次の挑戦者が現れて事故が起きてしまったらといった心配もあるので、フォローが必要だと思う。全体を通して、今回挑戦した登山家の野村良太さんとＮＨＫの関係性がいまひとつはっきりしなかった。用具が壊れたり、補給物資のトラブルの際にサポートを

受けており、完全な単独行ではなかったと思うが、ＮＨＫがどうサポートしたのかが分かると納得感が得られたと思う。なぜ本人が単独行にこだわったのかを考えたとき、「ただ漠然と強い山屋になりたい」という正直な気持ちには合点がいったが、「プロの山岳ガイドとして生き抜く力と自信が欲しかった」という説明はもう少し掘り下げが必要だったのではないか。映像の多くは野村さん本人が撮影していて、ふだん見られない景色が見られたことには価値があった。番組終盤のスキーを持たずにスノーシューで歩いていたシーンで、スキーはどうしたのかについての説明がほしかった。

（ＮＨＫ側）

　このような登山を扱った番組はリスクが伴うため、最大限の配慮が必要と考えている。今回取り上げた野村さんは、とにかくリスクを適切に見極め、事故を避けながら進む登山家であると判断した。ＮＨＫとの関係性はあくまで取材者と取材対象であり、サポートといえば、ディレクターからカメラの使い方を話した程度だった。また、ＮＨＫは前回の挑戦も追いかけようとしていたが、野村さんが早い段階で挑戦を断念せざるをえなくなり、その時本人が来年も挑戦すると言っていたので引き続き取材させてもらった。挑戦はあくまでも本人の発案で、基本的にＮＨＫはその傍らで出発時やふもとに降りてきたとき、空撮などで撮影させてもらった。

○　圧倒的な臨場感を感じた。本人が撮影した映像が主となっていて、一緒に冒険しているような感覚になった。日記に記した内容も印象的だった。単独行は命の危険があり、安全のために初めから物資をストックしておいたり、時には支援を受けたりして、目標のために安全を優先するという現実的な姿勢が大事だと感じた。壮大な挑戦を成し遂げた人のドキュメンタリーという以上に、若い世代に見てほしいと思うほどに多くの学びがある番組だった。

○　今回、無事に踏破し生還できたことに大変安堵した。６３日間もかん難辛苦を耐え抜いた挑戦にあらためて敬意を表したい。本人の目線で撮られた映像には、単独行へのこだわりが反映されていると推察した。一人の登山家の人柄や生き方に焦点を当て、心情の変化が包み隠さず表現されていたことで、より一層現場の厳しさや現実感が視聴者に伝わったのではないか。番組中盤の沼ノ原や大平原が広がる場面は、苦労に耐えた者だけが味わえる感動の世界のようだった。野村さんが多くの人々に支えられてゴールの襟裳岬にたどり着き、目頭を熱くしながら話す場面に感動した。最後のインタビューからも山に対する真摯な姿勢や誠実さ、支えてくれる人への感謝の気持ちが

伝わってきた。

○　なぜ一人で冬山に登るのかが気になっていたところ、雪が積もっていることで植物を傷つけることなく歩けるとの説明があり、納得しつつも、この挑戦の危険性についての説明と伝え方が少し足りないと思った。番組が進むにつれ、まるで自分でも冬山登山を体感しているような感覚になった。途中、猛烈な風の中で話す姿には悲壮感が漂っていて、見ていて苦しくなった。山に登るのは、やはり強烈な幸せを感じるからではないのかと思わされた。大きな事故がなく、無事に挑戦を終えたことに安堵した。

○　このような果敢な挑戦をする主人公に感心するばかりだった。「危険を伴うわがままな旅だ」と野村さん本人が話していたが、あこがれの登山家の本を頼りに前人未到の偉業にチャレンジする姿は強く心に残った。ＣＧの地図上でルートをたどる演出が分かりやすく、長い旅路を追う助けになった。圧巻の空撮映像など、映像の臨場感が際立っており、実際にはどれほどの迫力なのかと想像力をかき立てられた。真っ青な空と太陽に照らされた雪原に囲まれながら叫ぶ様子も印象深かった。ゴールで本人が涙をぬぐう姿に感激した。壮大な挑戦の一部始終を見ることができ、刺激になった。

（ＮＨＫ側）

空撮できるところは限られているので、携帯電話が通じたときに予定を教えてもらうなどして空撮の用意をし、稜線を歩いている彼の姿を撮影した。

○　本人が撮影した映像には感情がこもっていて見応えがあった。ただ、ナレーションの声質は番組に合っておらず、もう少し重めの声質であれば、視聴者により訴えかけるものがあったのではないかと感じた。撮影した長時間の映像をこの番組の長さに収めること自体が難しいと思ったので、ノーカット版をぜひ見たいと思う。

○　４０キロの装備を担いで６３日間という想像もつかないスケールの冒険だった。踏破ルートがＣＧで立体的に紹介されていて分かりやすかった。ルートを３つに分けたことで全容をよく理解できた。強じんな精神力と体力の持ち主である主人公でさえもさまざまな葛藤があったり、心が折れそうになったりしており、挑戦の難しさが伝わってきた。野村さんの人柄もあってか、サポートを受ける姿を見ると応援したい気持ちが強くなっていった。ゴールの瞬間は、共にゴールしたような気持ちになり、大変感動した。挑戦の間、水はどうしているのだろうといった登山の基本にも興味がわいた。

○　冒険者が行動を起こすまでの思考の流れや覚悟、社会的責任なども余すところなく伝えていた。先輩の山岳ガイドの言葉は野村さんの人柄と実績への信頼ゆえのもので、視聴者はその言葉への納得を土台に彼の挑戦を感情移入しながら見ることができた。彼の挑戦は、人生の醍醐味やひとつの生き方を教えてくれた。好きなことを仕事にしたい若者や、仕事や人生に不満や疑問を持っている人たちにぜひ見てほしいと思った。主人公を取り巻く人々の表情や言葉にも重みがあり、人間ドラマとしても質が高かった。ただ、しっかりとした知識や経験、ガイド同行の大切さを伝える番組もフォローの意味でぜひ制作してほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

先輩がインタビューで語った言葉は、第一線で活躍するような方たちも野村さんの力を認めているということを意味していて、ディレクターが彼の挑戦を追いかけることの根拠となった。ガイドの大切さについては、今後もしっかりと視野に入れて番組を制作していきたい。

○　番組タイトルから縦走の様子が主になると想像し、積雪期の北海道分水嶺単独縦走をじっくり見たいと期待していた。実際は、野村さんの自撮り映像や、日記などでパーソナリティーにもフォーカスすることで非常に見応えがあったが、若手登山家のプロモーションのように感じてしまった。単独行と言っているにもかかわらず、縦走するシーンを捉えた空撮の映像や、途中で歩いてくる野村さんと合流して撮影していたことで、本人以外にも「誰かがいる」という印象を与えてしまっていたからである。行程の厳しさや起こった出来事を包み隠さず見せてくれていた半面、主人公の人となりや実力がよく分からないまま縦走が始まってしまったため、挑戦が無謀なのではないかという印象が拭えず、共感を持てない部分もあったように感じる。見渡した景色に感動するなどすばらしい場面がたくさんあったので、主人公にもう少し心を寄せて見ることができればさらによかった。最終盤で雪がなくなってきたため、分水嶺を離れたことでルートが変わっていったことにもフォローが必要だったのではないか。また、北上ルートを取るというのもあったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

空撮はヘリコプターでの撮影で、風景の美しさも紹介したいというねらいがあったが、ＮＨＫ側の取材の視点が入ることで単独行のイメージを低減させたという指摘は理解できるので、制作者と共有したい。北上ルートではなかったのは、縦走をスタートする１月に日高を北上するのは天候の関係で無理だとい

う判断があったとのことだった。

○　野村さんの言葉やふるまいからは活力が感じられた。挑戦のきっかけの一つになった、北海道の大縦走について書かれた本の「人間の精神力と体力の可能性を広げる」という言葉はとても腑に落ちるものだった。他人とは違う道から幸せを追求する営みは、まさに人間の在り方の幅を広げるのではないかと思った。一方、ＮＨＫと主人公の関係性に対しては割り切れない印象が残った。大きな理由は主人公が取材対象でありながら、自分で撮影し語っているために制作側にも近い存在だったからである。撮影に慣れていない主人公に対して撮影の助言を行うのは制作側の都合として当然だと思うが、その文脈や背景を知らない視聴者の多くは、そういったある種の演出上の指導が入っているとは思わずに番組を見ると思う。

（ＮＨＫ側）

この挑戦が人間の可能性を広げるものだと示し、さらに冬の時期だけに現れる分水嶺ルートの、今まで誰も見たことのない風景を視聴者に届けたいというのが制作者としてのねらいだった。主人公とディレクターの関係性に関しては、野村さんはもともと自らの挑戦の一部始終をカメラに収めるつもりでおり、本人の意思でディレクターにアドバイスを求めたとのことだった。

○　舞台となった北海道分水嶺ルートには驚いた。番組や番組ホームページの記事からは、このルートの難易度の高さ、２か月間の連続踏破が常識破りの挑戦であることを理解した。また、一人の若者が荒削りの野心、持ち前の強じんな精神力、アクシデントへの柔軟な機転でもって成功を遂げ、この上ない達成感や幸福感を手にした物語に感動した。あえてリスクを冒して単独行に挑戦するところに見応えがあったと思う。彼の日記の言葉は、限界に挑み祝福された人間の心からの言葉だと感じた。番組を見終えて、柔軟で潔く正直な主人公の人柄に対し好感を持ったが、反対に素直さや柔軟さが偉業の価値をやや控えめに伝えてしまっている印象を受けたので、この挑戦の困難さをもっと補足する情報があれば、さらに視聴者に感動を与えられたかもしれないと思った。

（ＮＨＫ側）

撮影については、カメラを頭に装着しての撮影と、日々の活動をカメラを置いて撮影するという方法を取り、基本的には野村さん本人が撮り続けた。本人が撮影した映像を主軸としたこ

とが、ある種の臨場感と、一緒にゴールした感覚につながったのではないか。本人の若さや人柄を含めての撮影依頼だった。実際の挑戦は非常に価値のあることなので、もう少し補足が必要なのではないかという指摘は受け止めたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月９日(月)のほっかいどうが「“イッキ見”ＳＰ」(総合 前 8:15～10:50 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。番組構成は視聴者の意表をつくもので、スタジオのゲストと一緒に考えたり、ゲストの感想に共感したりしながら、ひと味違う楽しみ方ができた。テレビ番組の意義や意味を制作者と視聴者の双方が見つめ直す機会にもなったのではないか。

○　１月９日(月)のほっかいどうが「“イッキ見”ＳＰ」を見た。それぞれの番組は、ディレクターの情熱が感じられ興味深かった。中でも「隻眼の老猟師」は、猟師が捕獲したヒグマにとどめを刺すシーンがあり、生と死を扱った衝撃的な内容だった。番組をスタジオで実際に見ているゲスト３名が神妙になっていく様子がその衝撃の度合いを物語っていた。若手ディレクターが自分の感覚・信念・興味を起点に情熱を注いで番組を制作することは、ディレクターとしてのこれからにきっと役立つと思う。

（ＮＨＫ側）

この特集番組の基になったそれぞれの番組は、１５分という短尺の動画のような位置づけで取材と撮影、制作をするという発想から作られた。ディレクター自身も答えを探しながら制作に取り組み始めた番組でも、視聴者の皆さんが番組を見て、いろいろな読み解きをされ、受け入れられる時代だと感じた。

○　１月９日(月)のほっかいどうが「“イッキ見”ＳＰ」を見た。番組で使われていた「ディープ」という言葉は結局どういうことで、それをＮＨＫが取り上げることの意味は何かと考えながら番組を見た。あえて公共の電波を使って「ディープなもの」を見せるというのは、見ている側の自分と違う世界を通して、自明化していた物の見方や感じ方、生き方などを少しでも揺さぶるような何かを提示することではないかと思う。その点から言えば、「いろいろと、推してます」はそれまでの理解を覆してくれる内容であり、インタビューを受けていた人たちの言葉からは新しい感情や感受性の在り方のようなものが切り開かれつつあるという印象を受けた。

○　１月１３日(金)の３０ＤＡＹＳ「枝幸町　展望台の物語」(総合 後 7:30～7:55)を見た。地域にディープな人脈を持つローカルフレンズの方のもとにディレクターが１か月滞在し、地域の宝を見つけるコーナー「ローカルフレンズ滞在記」を「ほっとニュース北海道」で放送しているが、枝幸町のローカルフレンズの方は展望台でカフェを営んでおり、訪れる人々との交流の様子が、町の魅力とあわせてとても魅力的に伝えられていた。サケが大漁で船上に１万５千本も積んでいる場面など迫力のある映像もあって、枝幸町の魅力を知ることができるよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

２年目のディレクターが制作を担当した。ローカルフレンズの方や地域の方々には、取材でお世話になっているのはもちろんだが、制作者の人間性も育てられている。

○　毎週月～木曜に放送している「北のことばお兄さん」(総合 前 5:59～6:00 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。言葉を大切にするＮＨＫらしい番組であり、言葉の使い方を分かりやすく説明している。１分間の短い番組だが、出演しているアナウンサーの服装や撮影場所、構成が凝っている。新作を放送するスケジュール、番組で取り扱う言葉がどのように決まるのかを知りたい。今後も有意義な番組を期待している。

（ＮＨＫ側）

もともと言葉の知識が豊富なアナウンサーの知識のコンテンツ化をねらって番組を始めた。毎月６本を新しく制作しており、それを月曜から木曜に放送している。取り扱う言葉は、出演しているアナウンサーの知識と、ＮＨＫ放送文化研究所のデータを参照しながら、その時期に合ったものを選んでいる。

○　１２月２５日(日)のＴｈｅ　Ｃｏｖｅｒ‘ｓ「クリスマスＦｅｓ．ｉｎ北海道」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:50～前 0:30)を見た。映像がきれいなうえに、１２月２５日の放送日によく合ったクリスマスに関する曲や、北海道の名曲がいくつも出てきて、楽しめる内容だった。

○　１２月３０日(金)の「このドキュメンタリーがヤバい！２０２２」(総合 前 10:05～11:43)を見た。その中で取り上げられていた、ＮＨＫスペシャル「北の海　よみがえる絶景」は、番組を見る前のタイトルからの想像とは異なり、科学的根拠に基づき北海道でまれに見られる景色とストーリーを紹介していた。特に、白い渦を背景に乳

白色に浮かび上がる白い海を上空から写した映像は大変美しかった。ホッケの漁獲量確保に苦悩しながら、環境保全の必要性を勉強する漁業者の姿も印象的だった。ＳＤＧｓの重要性が叫ばれる昨今、自然に寄り添いながら仕事を進めていくことが大切だと改めて感じた。カメラマンをはじめとする撮影チームの連携も印象深かった。極寒の中、長期間待ち続けて撮影を成功させたクルーの姿勢に敬意を表したい。

（ＮＨＫ側）

ニシンのシーン全般は「北海道道」で撮影した映像が基になっている。このほか、ホッケのシーンなど、札幌局で撮りためた映像は「ＮＨＫスペシャル」などの全国放送に展開している。

○　１２月３０日(金)のドキュメント７２時間「年末スペシャル２０２２」で視聴者投票１位となった「“どろんこパーク”　雨を走る子どもたち」(総合 後 6:05～6:47)を見た。この番組放送後のスタジオトークでは、番組に出演した男の子の母親からの手紙が紹介されていたが、子どもがその子らしく生き生きと育ち、学ぶ場所が全国各地にできてほしいという願いがつづられており、今の日本が全力で取り組むべき課題ではないかと感じた。この番組を通じて、多くの人々が勇気づけられ、変わるための第一歩を踏み出すことができたのではないかと感動した。

○　１２月３１日(土)の「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」(総合 後 7:20～11:45)を見た。ビデオリサーチの関東地区の世帯視聴率が第２部は35.3%とのことで、低いと言われているようだが、今の時代で驚異的な数字なのではないかと思った。この水準を保ちながら、音楽番組としての魅力をさらに磨き上げることに注力するとともに、勝敗が大きな意味を持たなくなって形骸化している「歌合戦」の看板を外すことも検討してはどうかと思った。ジェンダーフリーの観点からもそのような時期に来ているのではないか。

○　１月３日(火)の「北の果て一人生きる　浜下福蔵９２歳」(総合 後 6:05～6:48)を見た。ひとえに、主人公の姿とその言葉が非常によかった。礼文島の北端の小さな集落にずっと一人で住んでいる理由を彼なりの言葉で説明していた。集落の歴史の上に生きているという実感を胸に抱きながら住んでいることがよくわかった。高齢を理由に船に乗ることを辞める心情を語る場面では、独り暮らしよりも船を降りることのほうが寂しいのだと伝わってきた。詩からは花の強さへのあこがれが伝わってきて、強さというものを自分の人生に重ね合わせて考える人なのだと思った。番組の構成も春から夏、秋、冬と季節が移ろっていく様が、まるで主人公の長い人生を表しているよ

うな展開になっていると感じられた。

○　１月８日(日)のＮＨＫスペシャル　超・進化論（３）「すべては微生物から始まった～見えないスーパーパワー～」(総合 後 9:15～10:04)を見た。これからの地球に生きる将来の世代の人々に大いに発見や刺激を与えてくれる番組だと感じた。自然環境への興味の有無にかかわらず、多くの人が視聴して感想を言い合ってほしいと思った。このシリーズで、１月７日放送の「生きもの“超・進化論”ワールド～キッズ＆ティーンズ特別編～」は特に子ども向けに制作されており、学校の理科や生物の時間にぜひ教材として自由に使えればよいと思った。

○　１月９日(月)から放送している「【夜ドラ】ワタシってサバサバしてるから」を毎回見ている。主演は北見市出身の方で、オフィスコメディーを演じる姿から、彼女の魅力がよく伝わってくる。

○　１月９日(月)のワイルドライフ「北海道　霧の岬にラッコが集う」を見た。ラッコが毛皮目当ての乱獲で激減したという事実に驚いた。そのラッコが１０年程前から霧達布に現れ始め、毎年のように集るようになった理由を、ラッコの親子の暮らしを追うことで明らかにしていくという見せ方は説得力があった。最終的には人との共存が今後の大きな課題ということもよく伝わってくる番組だった。

○　１月１０日(火)のクイズ！丸をつけるだけ「第２弾」(総合 後 7:57～8:42)を見た。先月に北海道ブロックで放送した「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ」と比較しながら見た。タイトルコールからクイズが出題されるまでの番組内容の分かりやすさと、流れるような進行が見やすく、自分も参加できるのではないかと思えるような演出だった。また、番組キャラクターは控えめながらも役割を的確にこなしていて好感が持てた。ＱＲコードで誘導して、視聴者も番組に参加できる仕掛けになっていることも大変評価でき、満足度の高い番組だった。

○　１月１４日(土)のレギュラー番組への道　おかえり音楽室「Ａｗｉｃｈ」を見た。ラッパーのＡｗｉｃｈさんが卒業した高校の音楽室で歌うという企画で、懐かしさを感じた。とてもシンプルかつ一般的な番組の構成でありながら、幅広い世代の視聴者が楽しめる番組となっていた。

○　「キャッチ！世界のトップニュース」を継続して見ている。中でも、毎週金曜に放送しているコーナー「＠ｎｙｃ」は、マイケル・マカティアさんがニューヨークの最新情報を伝えており、毎回内容がとてもユニークで、ニューヨーカーの暮らしぶりを

身近に感じることができる。いつも新たな発見をくれるコーナーであり、スペシャル版などの通常より長い時間での放送も期待したい。

○　字幕や手話通訳といった情報保障について、ニュースは生放送であるということと、短時間で多くの情報を伝えるためにほとんどの場合、字幕が追いつかないという問題がある。聴覚障害の当事者は、実際に字幕が追いつかない状態になった場合、データ放送のニュースを読んでいるそうである。もしデータ放送がさらに充実したものになると、生放送のニュースを見るよりもむしろ合理的なのではないかとさえ思った。データ放送はどのように制作しているのか、また現状や今後について知りたい。

（ＮＨＫ側）

データ放送で伝えている放送の内容は、ニュース、気象情報、積雪の情報など多岐にわたる。放送の帯域が限られている一方で、特に高齢者層によく利用されている実態がある。字幕を補う手段としてデータ放送を活用しているということは初めて聞いたが、そういった工夫を視聴者に強いているということでもあるので、字幕をどうやって生放送に追いつかせるかという課題に今後向き合っていかなければならない。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２１日(水)、札幌グランドホテルにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、１７９「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ　第１回・第２回」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜１７９「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ　第１回・第２回」
（総合　１２月９日(金)、１６日(金) 後7:30～7:57 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　「北海道スタジアム」と「ローカルフレンズ滞在記」の中間に位置する地域応援型で温かみのある番組だと感じた。親子で見ても、観光に携わるような人たちが見ても参考になる番組だった。出演者もバラエティー豊かで、地域性が出ていたので、見ていて飽きなかった。一方、５分前後の長さで紹介される地域・舞台が目まぐるしく移るので、切れ目が分かりにくかった。スタジオのゲストは立ち位置が分かりづらかっ

たのか、やりにくそうに見え、視聴者側も戸惑ったのではないか。ゲストの内輪でのトークがあり、視聴者が置き去りにされているようにも感じた。出演者をどのように選出したのか知りたいと思った。今後も、まち同士が相互にＰＲし合う中で、新たな展開が生まれることに期待したい。浜頓別のハクチョウにえさとして食パンを与えていたが、ハクチョウの健康を害するということで今問題になっているので気がかりだった。

（ＮＨＫ側）

この番組は、2021 年度に放送した「北海道スタジアム」で培った 179 市町村のネットワークを最大限に活用するために始まった。地域の方々には、「クイズを作ってみませんか」というＮＨＫのお願いに応えて出演いただいた。スタジオの出演者は、「北海道スタジアム」に出演していた加藤浩次さんをはじめ、北海道にゆかりのある方から人選した。

○　あるまちの本当にニッチな魅力にスポットを当てていて、飽きずに視聴できた。何よりもそれぞれの地元の出演者が個性的だった。特に浜頓別のお坊さんのスタジオライブはインパクトがあり、クオリティも高かった。全体として、道内各局がこれまでの取材を通じて構築してきたネットワークが番組制作に活かされていたのではないか。「ほっとニュース北海道」のキャッチフレーズである「超ローカル宣言」も想起させられた。

○　番組のねらいは地域振興とエンターテインメントの両方だったと思うが、どちらの点でも中途半端だと感じた。クイズ形式の番組では、芸人やタレントがクイズにわざと間違えて笑いを取ることがあるが、それをねらったにしてはややレベルが低かった。例えば、天塩の高校生に関するクイズの解答は笑えず意味の分からないものだった。地域の人々がテレビに出演し、地域を紹介することには意義があると思う。一方で、あえて 179 すべての市町村を紹介するのではなく、内容の充実に注力すべきだと思う。

（ＮＨＫ側）

今回は時期などを勘案して実現可能なものを選んでクイズにした。次回以降も応募してくださる方々と一緒にクイズを作っていきたい。いただいた意見を基に内容のブラッシュアップを図る。まちの紹介以外のクイズの是非や、それぞれのまちへの時間配分についても検討したい。179 すべての市町村に住む方たちにクイズを出していただきたいと考えている。

○　期待とは違う部分もあったが、全体としては比較的楽しく視聴できた。番組の制作者側が、「手作り」という点に忠実だったのかもしれないと考えた。従来のクイズ番組の型の範疇で番組を作ることもできたと思うが、あえてそうしなかったところを評価したい。「手作り」というアプローチがよかったのか、ほかにも新しさを出す切り口があったのではないかという議論もあると思うが、この番組を手作りクイズとして作ったスタッフは北海道が好きで、視聴者の北海道愛を信じていると解釈した。第２回は、第１回よりもトリビアと手作り感が適度に融合している出題が多かった印象だった。今回の反省点を次回に活かした番組制作を期待したい。

○　公開収録という形式がよかった。また、番組公式ＶＴｕｂｅｒ「北空すずら」の機転の利いた進行がとてもよかった。クイズ形式での紹介は、そのまちの特徴を知るよいきっかけになっていた。ゲストの解答者が由仁町の百足競争に「出たい」と本気で言っていたように、それぞれのまちの知られざる秘密を紹介していってほしい。愛別町のシンキングタイムで流れた、森町の高校生が作った音楽については、何が手作りなのか詳しく説明があればよかった。今はインターネットによる発信力の高い地域が多くあるが、テレビを通じても地域に関する新たな知識が得られるとあらためて分かった。

○　今回は道民の「手作り」クイズの番組ということで、リラックスした気持ちで視聴した。番組のタイトルもシンプルで分かりやすく、好奇心をかき立てられた。ＮＨＫらしい地域応援番組だったが、１２月２日放送の「１７９～あなたのマチにおじゃまします～」との違いやつながりが分かりにくかった。番組で紹介されていた石狩灯台のお兄さんの名前や取り組みの詳細を紹介していなかったことも気になった。「ＮＨＫニュース　おはよう北海道」や「ほっとニュース北海道」などさまざまな番組を駆使しながら、地域に住む方々の取り組みを紹介できれば、地域のさらなる魅力発信につながっていくのではないか。

（ＮＨＫ側）

この番組は、ツイッターやインスタグラムなどＳＮＳによる発信にも力を入れたが、そういったものが届かない視聴者への発信も工夫や努力が必要と感じている。「１７９～あなたのマチにおじゃまします～」は、道内各地を訪れ、地域の人々から地域の知られざる情報を得ていく番組で、「北海道スタジアム」の情報やネットワークを活かしている。「どうみん手作りクイズ１７９Ｑ」は札幌局のスタジオをベースに、各市町村の方々から

のクイズを集めて出題する番組である。つまり、番組二本立てのプロジェクトが「１７９」であり、「どうみん手作りクイズ１７９Q」というクイズ番組と「あなたのマチにおじゃまします」という視聴型番組の２つの番組があるという建付けになっている。

○　クイズの内容は手作り感があってよかったが、率直に言えば、スタジオゲストのキャスティングの意図がよく分からなかった。加藤さん以外の２人が、クイズの解答者としては拙く、終始腑に落ちなかった。「どうみん手作りクイズ」と題し、地域の人たちも積極的に参画するスタイルは「北海道スタジアム」から続いていて、温かみを感じるので継続してほしい。

（ＮＨＫ側）

キャスティングについては議論を深めていきたい。クイズの解答ＶＴＲから、もう一段階深みに入っていくような情報や納得感を得られることが重要だとも制作チームと話している。いただいた意見を基にクオリティの向上を目指して検討していきたい。

○　番組冒頭からＶＴｕｂｅｒ「北空すずら」のキャラクターにひかれた。昨年度の「北海道スタジアム」には179市町村の人々が一堂に会するというおもしろさがあったが、この番組はそこからさらに掘り下げた内容になっていた。クイズ形式を取ることで、出演している地域の人々の表情や、地域の個性がしっかりと見えて親近感がわいた。第２回はクイズの内容がより見やすく、興味を引く構成になっていた。ＳＮＳでの発信が当たり前の時代だからこそ、手作り感あふれるコスチューム、せりふ回しなどが新鮮に見えた。「ローカルフレンズ滞在記」にも通じていると感じた。今後もＮＨＫがより地域密着型で地域の中に入り込み、地域の人々と連携しながら地域づくりに取り組むような楽しい番組企画を期待している。

○　クイズ形式としながら、地元の活動や魅力をプレゼンしてもらう趣旨の番組と受け止めた。番組内容に手作りクイズの形式がよく合っていた。出題者の方々が活き活きしており、スタジオゲストとの掛け合いも自然に盛り上がっていた。次回以降の放送にも期待したい。その上で、あるまちが出題者になっているときに、それがどこなのかわかりにくかった。ＮＨＫプラスでの配信を考えると、道民以外も視聴者になりうるので場所の明示が必要ではないか。また、スタジオの出演者があえて間違った解答をすることで笑いを誘おうとする場面があり、露骨すぎるきらいがあった。ともすれ

ば、あなたのまちに関する話題に特段興味はないし、クイズをまじめに考える気もないというふうに見えてしまうことが危惧されるので、特に今回の内容にはあまり適さないと感じた。

（ＮＨＫ側）

どのまちから出題しているのかがわかる地図はぜひ取り入れたい。ＶＴＲ本編でも場所を明確に伝えるようにしたい。

○　地域の独自性や主体性に重きを置いて、北海道全体を眺めてみるという番組の構成ではないかと推測しながら視聴した。手作り感あふれるクイズ番組にしては、ＭＣの個性が強過ぎたのではないか。そのほかのゲストは、道民にとって親近感があるものの、クイズの解答者としては疑問が残った。そのほか、地域の方々が手作りしたクイズと解答者の組み合わせに疑問を感じる点があった。番組公式ＶＴｕｂｅｒの「北空すずら」については、若い世代の興味を引くには効果的なのか、多世代を意識して取り入れているのか制作者の意図を聞きたい。江別市や天塩町、寿都町の方々の出題からはご当地感がよく伝わってきた。一方で、わがまちを代表するクイズの問題としてふさわしいかと考えてしまうものもあった。浜頓別のお坊さんのスタジオライブは聴衆との一体感が演出されていた。北海道の地域の人たちが伝えたいことを自ら発信できる番組のトライアルとして見守っていきたい。

（ＮＨＫ側）

「北空すずら」の起用は、まさに若い世代、幅広い世代を意識したものだ。「北海道スタジアム」のころから比較的人気を博しており、「北空すずら」をきっかけに番組を知る視聴者もいるようだ。司会と情報の補足という２つの役割を「北空すずら」が担っている。開発番組なので、とにかくたくさんの意見を伺いながら、より多くの人々に深く楽しんでもらえる番組にしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２５日(金)の北海道道「僕たちは生きていく～十勝・シェアハウスの半年～」を見た。番組を通じて社会で行き場がないと感じる青年たちを受け入れる場所があると知ることは、当事者の青年たちにとっても、社会にとっても救いだと思った。運営する人々が苦悩しながらも若者たちと一緒に成長しようとしている日常も映し出さ

れていた。ささいな出来事や、スタッフを含めた一人ひとりのことばを丁寧に拾い、積み上げていくことで、青年たちに寄り添う人々の心の機微や、若者たち自身が人生に希望を見出そうと苦悩する様子も伝わってきた。ただ、一緒に暮らす若者たちと信頼関係が築けずに失踪してしまう青年が、番組の中で主人公のような扱いだった青年にどなりつけられていた青年だと気がついたとき、失踪の理由が単にハウス内の力関係ではないのかと想像してしまい、違和感があった。その場面を使わなければならない理由があったのか、ほかの場面はなかったのかと思い、心にしこりが残った。全体としては、番組ＭＣの２人のコメントのどちらもうなずけるもので、心に響く懐の深い番組になっていた。それだけに、それぞれの青年のその後が気になり、続編が見たいと思った。

（ＮＨＫ側）

この番組は、「＃ナナメの場」などを継続して制作している６年目の女性ディレクターが担当した。指摘のあったやり取りや思いがぶつかるシーンは、カメラが自然に溶け込まないとなかなか撮れないシーンだった。視聴者は、それぞれの登場人物の思いをそれほど多くの説明がないままに見ることになると思うので、それが誤解やしこりのようなものを残すとすれば、置き場所や間など、さまざま面で伝え方が足りなかったのかもしれない。ただ、制作者はこういったシーンのリアルなことばをそのまま活かすことで別の効果を期待していることもある。

（ＮＨＫ側）

担当した帯広局のディレクターは、取材にかなりの時間をかけながら、まずは生きづらいという心の悩みを持っている若者との関係作りに時間を割いており、その延長で今回の番組が制作された。取材は継続して行っており、今後も何らかの形で放送したいと考えている。

○　１２月２日(金)の北海道道「おひとりさまもいいけれど～北海道道人生会議」を見た。とても身近な話題で、自分の将来についても考えさせられた。ただ、中継で登場した出演者は横並びに座って話をしたほうがよかったのではないか。「ほしの里」のような施設の存在は知っていたが、初めて実際に暮らす人から暮らしぶりを聞くことができるよい機会だった。運営側の話も聞くことができればさらによかった。ゲストとＭＣの鈴井貴之さんの会話は本音で語り合っているように感じた。自身や両親についても忌憚のない意見を述べており好感が持てた。今後も「北海道道」らしい「人生

会議」を取り上げることを続けてほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

中継の出演者が後ろで話していたのは、スナックという場を演出するためだったが、やはり横に並んで話したほうがよかったと感じた。人生のあり方は人それぞれで、多様な人生の選択肢を提示することが番組の責務だと思っているので、ゲストとＭＣが展開されているＶＴＲとはちょっと違う意見を持っていて、それをぶつけ合うことができたのはよかった。

○　１２月２日(金)の北海道道「おひとりさまもいいけれど～北海道道人生会議」を見た。自分自身に置き換えながら番組を見たが、それぞれの入居者がどういったきっかけで入居したのか、入居後の生活はどうなのか、家族とはどんな関係を築いているのか、といったことが気になった。番組後半で、介護保険法にふれながら施設の位置づけが紹介されていたが、よく分からなかった。また、ほかの類似施設はどのようなものがあるのかも知りたかった。今回はさまざまな選択肢の一つを紹介するというのが番組の趣旨だったと思うが、視聴者としては、費用面などの現実的な話も聞きたかった。

○　１２月２日(金)の北海道道「おひとりさまもいいけれど～北海道道人生会議」を見た。老人ホーム的なシェアハウスの事例を通して、新たな老後の過ごし方を考えるというような内容だった。この事例は、超高齢化社会と、家族の形の多様化という文脈が交差したところにある事例だと思う。そういった新たな生き方の選択肢を見出し、光を当てるのは大変意義深いことだと思う。「人生会議」という副題にふさわしく、入居者行きつけのスナックを借り、トークの時間を比較的長めに取っていた。さらに、トークの内容は、入居者それぞれが本音で話しているように感じられ、好ましく思った。「シェアハウス」ということばが繰り返し出てきたが、そうであれば運営側の思いや課題を聞くのが通例だと思うが、それがなく、事情を知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

この施設は、有料老人ホームの中の、健康型と介護付き有料老人ホームの中間に位置づけられる住宅型有料老人ホームであり、一般に言われている「シェアハウス」という位置づけである。番組をトーク重視にしたことと関係するが、自分自身がどのような人生を選び取るのか、作っていくのかということが制作者の一番の関心事だった。ゆえに、運営側への言及やインタ

ビューは内容に含めなかった。ただ、指摘のとおり、運営側の意見があってもよかったと思うので、制作チームと議論していきたい。

○　１２月２日(金)の１７９～あなたのマチにおじゃまします～「道東・十勝出張編」(総合 後 7:57～8:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。地元十勝で暮らす人間にとっては、おおむね目新しい情報はなく、おもしろさに欠けるというのが率直な感想だった。全体的に内容が表面的で、少し残念な印象だった。

○　函館局開局９０周年記念「見ささるスペシャル」と題された、２週間にわたるさまざまな番組を見た。１２月３日(土)、４日(日)の「函館プレミアムシネマ」(総合 ２日は前 0:25～2:59、３日は前 0:25～2:20 函館単)では、道南を舞台にした映画が放送されていた。また、１２月１１日(日)の「ありがとう道南！みんなで夢を語ろうＳＰ」(総合 後 1:05～3:00 函館単)では、地域の方々が数多く出演していた。また、１２月１２日(月)～１５日(木)、１９日(月)の「ほっとニュース函館」内の「道南アーカイブスペシャルウイーク」を見た。この放送は道南地域のみの放送だったが、それだけではもったいないと感じるほど充実した内容だった。１２日は、昭和初期までサケ・マス漁で経済の発展を支えた北洋漁業のエピソードが紹介された。１３日は、函館観光のランドマークである五稜郭タワーの歴史が紹介されており、地域のシンボルは地域の人々の心の支えや誇りになっていると感じた。１４日と１５日の「福島町横綱物語」からは、それぞれの地域に深い歴史があると実感できた。また、当時の映像に色付けしたカラー映像は、地域の様子を彷彿とさせるもので印象的だった。１９日の青函トンネル完成までのエピソードでは、道南を経て全道につながる歴史の紹介に感動した。時代の流れが速くなっていると感じる昨今だからこそ、このような歴史を時間をかけてしっかり見直し、地域の人たちと共有することが大切だと思った。

（ＮＨＫ側）

古いコンテンツを使った「道南アーカイブス」は、不定期に放送しており、日頃から好評をいただいている。今回は、さらに魅力的なものとすべく、５本シリーズで放送した。ＮＨＫが所有する古い映像は、地域の映像財産といえる。それを有効活用して、年配の方には昔を懐かしんでもらい、若い方にはあらためて地元の歴史を知ってもらう機会になったのではないか。一部をカラーにした工夫は、コーナーを作ったニュース編集の担当者が中心となり、２０代から６０代までの職員が一丸となって制作した。

○　１２月１６日(金)の北海道スペシャル「証言ドキュメント“小樽運河は守れなかった”」(総合 後7:57～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。番組では、背景や関係者の思いがあらためて語られていた。地域経済の活性化と歴史的景観の保存という、相反するそれぞれの考え方がよく伝わってきた。関係者のコメントを積み重ねながら、視聴者に判断を任せるような構成に好感を持った。全体を通じて、当時の市民運動の熱量のすさまじさがあらためてよくわかった。それぞれの登場人物の描き方も印象的で記憶に残った。

（ＮＨＫ側）

６年目の男性ディレクターが制作した。現在では、小樽運河は一般の観光客に美しい風景として見られているが、その歴史の裏にあるものを見つめることで、そのまちを愛した人たちの思いがもう一度よみがえるように取材した。

○　１２月１６日(金)の北海道スペシャル「証言ドキュメント“小樽運河は守れなかった”」を見た。非常に幅広く取材し、時間をかけて制作されたとわかる力作だった。当時の市議会の様子を記録した映像などは、史料価値が高いと思った。三部に整理された構成も分かりやすかったが、反対運動が起こったきっかけと、行政が態度を軟化させた理由の詳しい説明があれば、より分かりやすかった。さらに、それぞれの立場の現状に対する評価の裏側にまで踏み込んでいればよりおもしろかったと思う。そのほか、当時は運動に関わっていなかった市民が今どう思っているのか知りたかった。

（ＮＨＫ側）

タイトルを含めて、当時の関係者がやや敗北感のようなものを感じていることや、物事が決まっていく難しさをあらためて発掘した番組となった。

○　１２月１６日(金)の北海道スペシャル「証言ドキュメント“小樽運河は守れなかった”」を見た。とても良質な番組だった。当時の運河保存派と埋め立て推進派の双方の代表的立場の人物を番組の流れに即して適切に取り上げていた。第２部で語られた数人の若者の働きかけや運動によって、最終的には２日間のフェスティバルで１０万人を動員したというエピソードには、カタルシスがあった。一方、埋め立て推進派の人物のことばからも急速に斜陽化するわがまちをどうするべきか考えていたことが伝わってきた。市民活動の高まりを受けて矢面に立つ当時の小樽市長へのことばも興味深かった。最も印象に残ったのは、小樽市長が保存派の人物に、涙しながら運河を

残したいという本心を語ったというエピソードで市長の苦境も読み取れた。問題の本質はどこにあるのかと視聴者も考えさせられるものだが、この番組はあくまでも答えを示すことはなく、当事者のことばや事実を積み重ねて、誘導を極力排除しており好感が持てた。難点を挙げると、運河保存運動にしらけていた人々がなぜ変わったのか、また２日間で１０万人を動員した「ポートフェスティバルｉｎおたる」はいつ行われたのか、その描写がなかったのがとても残念だった。今回も制作する側は分かっているが、視聴者には共有されていなかったり、共有していると思い込んで飛ばしていたりすると感じた。

（ＮＨＫ側）

１０万人を動員した「ポートフェスティバルｉｎおたる」は、運河が実際に埋め立てられる８年前の 1978 年に開催された。運河保存派が、運河がここにあることには意味があると呼びかけたことで、１０万人規模まで膨らんだということなので、ＳＮＳもない時代にどうやってそれほど多くの人々が集まったのかをもう少し詳しく伝えられたように思う。

○　１２月５日(月)のエマージェンシーコール～緊急通報指令室～「埼玉」(総合 後10:00～10:45)を見た。大変興味深く身につまされるところがあった。電話で指示されながら高齢の母親の心臓マッサージをするシーンは切迫感がよく伝わってきた。同時に、自分が当事者となったときに備えようという気持ちになった。

○　１２月５日(月)のワイルドライフ「アラスカ悠久の自然　星野道夫が見たトナカイ大集結」を見た。１２月１８日(日)の「ダーウィンが来た！」などでも写真家の星野さんを取り上げていたが、それぞれの番組の特色や視聴者層に合わせて伝え方が工夫されており、見ていて飽きることがなかった。一つのテーマからいくつもの番組を作り込んでいく方法には、ＮＨＫらしさが感じられた。星野さんはこれまでもさまざまな形で紹介されてきたが、人の自然への向き合い方を過去から問いかける彼の特集は今だからこそ必要だと感じた。

○　１２月６日(火)のクローズアップ現代「きこえますか？子どもの心のＳＯＳ　コロナ禍のメンタルヘルス」を見た。孤立感や孤独感を抱える子どもたちの、とてもリアルな現状を伝えていた。子ども自身にも説明のつかない発達上の危機が、今の多くの子どもたちの生活を脅かしていると感じている。コロナ禍で浮かび上がってきた子どもたちの発達上の課題について、この番組がようやく気づきを与えてくれたのではないかと思った。番組最後の医師のコメントは、子どもへの共感力があまりにも鈍い社

会の中で犠牲になっている子どもたちの叫びを代弁しているようにも聞こえた。引き続き掘り下げるような番組を期待している。

○　１２月２０日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ＹＯＳＨＩＫＩスペシャル」(総合 後 7:30～8:42)を見た。スケジュールの確保が難しいと言われるＹＯＳＨＩＫＩさんに「1200 日密着」というのは驚きで、内容も非常に興味深かった。撮影開始の時期には少し距離感があったこともわかり、密着ドキュメンタリーのおもしろさを感じた。スーパースターの姿をこのようにおさめた映像は今後貴重な資料になるのではないかと思う。番組は密着取材することでプロの仕事を伝え、その裏側も見せるという意図があったと思うが、長期の密着取材というある種、最も高いハードルに挑戦して、実際にそれをやり遂げたことに感動した。年末の紅白歌合戦にもつながる編成になっていたのではないか。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１６日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と帯広局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「赤いオーロラ～幻の夜空がよみがえる～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「赤いオーロラ～幻の夜空がよみがえる～」
（総合　１１月１１(金) 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　心に刺さるキーワードやドラマ仕立ての構成が非常に印象的だった。中でも赤いオーロラを見た方々のエピソードが心に深く残った。自然現象としてのオーロラの仕組みの紹介も大変勉強になる内容だった。道南でまちづくりに関わる私にとって、自然現象は町の未来から地域の人たちの人間関係に至るまで、広くつながっていくものであるということを実感している。このオーロラの写真を撮った星好きの青年の活動

をきっかけに、オーロラの研究や地域活動としての勉強会が行われ、さらには銀河の森天文台が建設されたというストーリーに感動した。

○　ドラマから番組が始まり、何が始まったのか分からずに番組を見始めた。本題の前にドラマでワクワク感を出そうとしたと思うが、ドラマは内容が中途半端に感じられ、演技もあまりよくなかったという印象だった。その後の構成は非常に見応えがあった。オーロラのおかげで人生が変わったという結末への番組の流れはすてきだった。ただ、「北海道道」は北海道のどのような話題でも扱う番組だと思うが、今回の場合はドラマの演出が必要だったのか疑問に感じた。オーロラというテーマは非常に興味深いものであり、もっとオーロラそのものを掘り下げたほうがよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

ドラマ仕立ての演出については賛否両論あることは想定しており、今回は番組制作者の強いこだわりで、冒頭はドラマから始める演出とした。番組モニターの評価では、ドラマで始まったことについての好意的な評価が比較的多くなっている。

○　タイトルからはなぜ今オーロラを取り上げるのかが分からなかったが、去年発見された国内最古の赤いオーロラの写真が、論文として発表されたことが紹介されて納得した。太陽フレアとオーロラが密接に関係していることも番組ＭＣの鈴井貴之さんの説明でよく理解できたが、太陽フレアについては専門家の話があってもよかったのではないかと思った。３人きょうだいが語った 1958 年のオーロラの思い出は、その１日の様子がよく分かり感動した。1989 年に撮影されたオーロラの写真が陸別町の運命まで変えてしまったというエピソードには、銀河の森天文台の建設チームについてもっと掘り下げて紹介してほしかった。

（ＮＨＫ側）

太陽フレアの話題は、検討を重ねる中で別の機会にしっかりと取り上げることとした。視聴者の関心には、陸別町の銀河の森天文台のホームページを紹介したり、ＮＨＫのＷＥＢ記事で詳細を伝えたりすることで応えられたのではないか。

○　写真などで記録を残すことの大切さをしみじみ感じた番組だった。陸別町の歴史と、オーロラの写真を撮影したことによって自身の人生を変えた津田浩之さんのエピソードからは、好きなことを黙々と続ける姿勢と、そのための時間や労力を惜しまないこと、そして運や直感も大切にするという学びがあった。番組後半の鈴井さんの解

説は、オーロラの壮大さを視聴者が理解する助けになっていた。オーロラが現れる仕組みを知ることで、物事に対する理解や興味がさらに膨らみ、それをきっかけにして次世代を担う天体好きの少年少女が増えるかもしれないと思った。オーロラのスケールの大きさが印象的であり、自然や宇宙のすばらしさに心酔することができる機会も大切だとあらためて感じた。

○　導入部分のドラマ仕立ての演出や「プロジェクトＸ」を思い起こさせる選曲はチャレンジングな演出だと思った。特に冒頭のドラマは気になって視聴を続けるきっかけになった。全体の内容としては、想像していたものとは少し異なる印象を受けた。「赤いオーロラ～幻の夜空がよみがえる～」というタイトルからは、低緯度オーロラを主役にしてオーロラのことを追求する内容かと思っていたが、低緯度オーロラ自体はむしろ脇役で、実際にオーロラを見たり、それに関わった人や地域が主役の内容だった。期待したものとのギャップが残念な印象につながった。今回の内容であれば、サブタイトルに「記憶」や「人々」といった言葉を使って、オーロラをめぐる人々の物語であることを明確に伝えたほうがふさわしかったと思う。また、1958 年に旧静内町で撮影された赤いオーロラの国内最古の写真がなぜ貴重なのかが分からなかった。赤いオーロラはいつ見られる確率が高いのか、それは何月何日ごろかという情報が得られなかったのも残念であり、番組を見た視聴者の興味を大切にしてほしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

タイトルについては、科学的な内容を期待した視聴者が多かったかもしれない。番組担当者が一番届けたかったのは、オーロラという自然現象に人々が心を奪われたり、町が変わったりしていくことだったので、町や人を意識したタイトルにするべきだった。

○　冒頭のドラマ仕立ての演出に驚いた。低緯度オーロラについては、番組から新たに学ぶところが多かった。低緯度オーロラが見られる仕組みを説明したのが鈴井さんだったのは意外だったが、説明のタイミングは効果的だったと思う。オーロラに関わる、さまざまな人のエピソードが紹介されていて、これだけ多くの方を取材したことに感心した。赤いオーロラが陸別町の歴史と、それに関わる人々の人生をも変えてしまったというエピソードは興味深かった。３０年も前にすでに始まっていた陸別町の取り組みは、短期的な成果を求めるものではなく、ふるさとの誇りを作るための取り組みのように思え、現在でもよい学びになるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

取材対象は、1958 年のオーロラを研究している名古屋大学と京都大学、岐阜の基礎研究所のプロジェクトの関係者を起点に人づてで取材を広げていっており、オーロラ研究の皆さんの調査が基になっている。

○　オーロラが北海道で見られるというのは意外だと感じた。ドラマ仕立てのスタートは新鮮で、番組を視聴する前の日常の感覚から少し離れて、宇宙への窓を開ける心の準備が整うような、よい始まりだった。６０年以上も前に赤いオーロラを実際に目撃した人たちの話から、予期せず不意に現れた強烈な景色がもつ力をイメージできた。古い写真や貴重な映像とともに語られた当時の心境はどのエピソードもとても心に残った。また、この番組は生放送だったと思うが、その表示がなかったのが気になった。リアルタイムの放送には特別感があると思うので、「生放送」や「ライブ」ということを強調する表示があってもよかったのではないか。

○　「赤いオーロラ～幻に夜空はよみがえる～」というタイトルは関心を引くうえでは非常に魅力的だったが、番組が始まってから１２分くらい経過してからオーロラの解説があり、謎が解けるまで長かったのではないかと感じた。鈴井さんもオーロラの仕組みを力説していたが、太陽フレアの大規模な爆発による大量のプラズマと、低緯度の北海道でオーロラが見られることとの関係など、腑に落ちないところがあり隔靴そうように感じた。タイトルが高い期待感を持たせてくれただけに、しっかりとした説明で視聴者を納得させるところまで何とかたどり着いてほしかった。北海道ではどのくらいの周期でオーロラを見ることができるのか、次はいつごろ見られるのかについての説明があれば、北海道のみんなで夜空を見上げてオーロラを探すということにつながるのではないか。番組制作の趣旨も分からないではないが、自然現象にまつわる科学的な話題なので、知識があまりない視聴者でも理解しやすい説明を意識してほしかった。

（ＮＨＫ側）

番組が始まってから１２分というのは、番組の中間に位置付けられるが、オーロラの仕組みについて早く理解したうえで、ヒューマンストーリーを届けるという構成も考えられる。制作に関わったメンバーで議論し、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　視聴前は科学番組かと思ったが、オーロラを巡る人々の体験や記憶が主題だと理解した。それぞれの登場人物の人生の中に赤いオーロラが位置づけられていて、それを

一人ひとりが語るというのはすてきなことだと感じた。冒頭のドラマ仕立ての演出については、強烈に感情を揺さぶるような主題ではないだけに、少し過剰に感じられた。構成に関しては、低緯度オーロラがいつ、どこで見られるのかといった、番組を見ていたら誰もが抱くであろう疑問が解消されておらず、視聴者側としては放り出されたような印象を受けた。

（ＮＨＫ側）

北海道でのオーロラ観測が現在どのような状況で、今後観測できるかどうかを知りたい視聴者にとっては、必ずしもその期待に応えられていなかったかもしれない。現在の研究では、北海道における低緯度オーロラは結果として３０年おきに出現しており、次のピークは 2025 年と言われているので、例えばこのような情報は番組内でしっかり伝えてもよかった。

○　「北海道道」ではあまり見られないドラマ演出が、神秘的なオーロラの情報を伝えるためにとても効果的だったのではないかと感じた。どのエピソードからも、６０年の歳月を経ても鮮明に思い出すことができるほど、当時見たオーロラにインパクトがあったことがうかがわれた。鈴井さんのオーロラの説明は、文字スーパーの画面に掲出される時間が短かったり、視聴者からの投稿メッセージの表示に気を取られたりして集中することができなかった。耳から入る情報だけでなく、文字情報も増やしてほしかった。陸別町の銀河の森天文台の話題では、赤いオーロラの写真を撮影した星好きの青年が今では３代目館長として活躍中というエピソードがとても魅力的だった。番組全体を通して、オーロラへの関心がより高まった。

（ＮＨＫ側）

視聴者からいただいた投稿メッセージをはじめとして、どのような文字情報をどのように画面に表示するのかはもう少し検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

帯広局も低緯度オーロラや陸別町の取り組みの情報収集や取材を続けながら、機会があればぜひ陸別でのオーロラ撮影にも挑戦してみたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２１日(金)の北海道道「知床・観光船沈没事故　それぞれの半年」を見た。事故から何を学ぶべきかをさまざまな立場や視点から、切り込みにくい部分にも十分に気をつかいながら伝えていた。事故が起きるまでの経緯を洗い直すことで、視聴者に事故の記憶を留め、さらには危機感を新たにさせる番組だった。遺族や今も帰りを待っている人々の様子が強く心に残り、事故当時の悲惨さと理不尽さを思い出させる番組だった。遺族のやりどころない思いは私たちの想像の域を超えるものであり、だからこそこういう番組が必要であり重要だと思う。羅臼町の捜索ボランティアグループの代表の言葉からは、最後の１人まで見つけてあげたいという気持ちがかなわない無念さを表していた。観光事業者が運航の安全体制を見直して、信頼を一から積み重ねる努力をしていることも伝わってきた。知床のような場所は自然の保全を啓発する重要な役割を果たすが、それは安全あってこその話だと思う。安全管理が当たり前になって、事故が繰り返されないために、この事故について伝え続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

キーマンである捜索ボランティアグループの代表が行ってきたことが警察も動かしたという意味で、この番組で最も語るべき人物だと考えている。

○　１０月２１日(金)の北海道道「知床・観光船沈没事故　それぞれの半年」を見た。事故から半年が経ち、運航会社の利益優先のずさんな管理体制だけでなく、国や検査機関などの監督・管理体制の問題点も幾重に露呈し、リスクへの備えがなかったことにがく然とさせられた。そのような状況下でも、番組で紹介されていた二つの事項に希望を見いだせた気がした。一つは、羅臼町の捜索ボランティアの存在である。ヒグマの生息エリアでの捜索には危険が伴うが、現地に精通している自分たちが行けばよいと歩いて捜索する姿に心を打たれた。冬が来る前に持ち物一つだけでも家族の元に返してあげたいという思いは、胸に迫るものがあった。もう一つは、深刻な打撃を受けている知床の小型観光船事業者の取り組みだ。事業者のコメントからは、今回のような悲惨な事故を二度と起こさないと誓い、一から信頼を取り戻す決意を感じた。この事故が忘れ去られないように報道を続けてほしい。

○　１０月２８日(金)の北海道道「没後１００年・知里幸恵とアイヌ語のいま」を見た。番組冒頭でゲストの出演者同士がリモートでやり取りする場面で、アイヌ語を使って「聞こえますか」、「元気ですか」というやり取りをしていたが、アイヌ語という言語が生き生きと使われている場面を目の当たりにできたことは貴重なシーンだった。やはり、その土地の言葉がそのままに話されていることを意味が分からなくても経験す

ることは大事だと思った。アイヌ語を話し言葉だけではなく書き言葉でも伝えていくために、そのままローマ字で表記するのではなく、実際のアイヌ語に近い形での表記を独自に開発したことは、語り部である祖母をはじめとした家族のもとでアイヌ語を耳にし、旭川の女子職業学校へ通っていた知里幸恵だからこそ成し遂げられた功績であり、アイヌ文化に対する功績の大きさがよく分かった。番組の締めとして、「この番組をきっかけとして、もっとアイヌのことを知らなければならない」というまとめがあったが、その段階はもう過ぎており、既に知っているうえでそこから発展させる時期にきているのではないかと感じる。番組でも紹介していたように、アイヌを巡る歴史には、同化政策を導入して土地を奪った事実があり、和人の立場から述べることになるが、私たちがこの土地で生きていくことに正当性があるのかが問われていると思う。世界各地で先住民族との共存が課題になっているという現実があり、知里幸恵の文化的な功績は北海道に住む私たちにその課題を考える機会を与えてくれる。現代に生きる私たちの世代から少しずつ解決していかなければならないものだと思うので、どうやって北海道に暮らしていけばよいのかを引き続き問い続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組は旭川局が制作した番組である。どのように北海道で生きていくのかという問いかけは、私も非常に重く受け止めた。今、北海道に住んでいる人たちだけの話ではなく、日本社会全体で考えていかなければならない重要なテーマだと思う。今後も考えるだけではなく、番組を制作して放送することを通して、今起きていることを正確に伝えていくことに尽きる。

○　１０月２８日(金)の北海道道「没後１００年・知里幸恵とアイヌ語のいま」を見た。アイヌ語という言葉だけでなく、アイヌ文化そのものが今どのように発信されているのかを扱った番組であり、非常に勉強になった。番組の背景として、知里幸恵の没後100 年の節目ということはあるが、ある種のアイヌブームのような、アイヌ文化への一般的な関心の高まりがあると思う。こうしたことは無関心よりはよいと思うが、危惧すべき点もあると思っている。多数派が少数派に関心を持つということについては、「文化の盗用」という言葉があるように、多数派による新たな収奪や暴力に至る可能性があったり、多数派が少数派の文化に勝手に意味付けをして、よかれと思ってやったことであっても結果として「目新しいコンテンツとして消費する」ということになってしまうことが、さまざまな場面で起きていると感じる。そのような背景を考慮しながら見ると、この番組は歴史的背景をしっかり解説し、専門家が必要なことを述べ、そのうえで当事者が主体的に語るという、軽薄にブームに便乗したものではなく、きちんとした番組の構成になっていた。生きたアイヌ語で会話している場面は最も印

象的だった。ただし、さまざまな側面に配慮して制作していた分、知里幸恵その人について伝える分量がやや減ったのではないかという気がした。別の機会に、知里幸恵について焦点を当てた内容も見てみたい。

（ＮＨＫ側）

目新しいコンテンツとして消費してしまうという指摘は大変重要だと思う。コンテンツとしてある種、表層的に理解して楽しんで、しばらくすれば忘れてしまうということは、おそらく歴史上繰り返されてきたと思う。それをもう一段掘り下げて、自分たちのものとして心の中に留めておいたり、行動に移したりすることを放送を通じてやっていかなければならないと強く感じた。また、知里幸恵についての言及が少なかったと指摘があったが、この番組は、歴史をたどりながら、アイヌの言葉や文化が今どうなっているのかを問いかけ、将来を考えることに主眼をおいて制作した。

○　１０月３０日(日)の「ＮＨＫのど自慢予選会ｉｎ帯広市～帯広市１４０年・市制施行９０年記念～」(総合 後 1:05～1:50 帯広単･釧路単)を見た。予選出場者 180 組をすべて順番に紹介したところに好感が持て、９月２５日に放送した本選よりも見応えがあったのではないかと感じられる内容だった。「ＮＨＫのど自慢」の知名度や、全国各地でこれだけの熱量で繰り広げられ、世代を超えて愛されていることを改めて実感した。

（ＮＨＫ側）

今回の「ＮＨＫのど自慢」は、１５年ぶりの帯広市での開催ということもあり、非常に多くの関心を寄せていただいた。予選会の放送は、日曜の「ＮＨＫのど自慢」の後に放送することで、のど自慢ファンに見ていただきたいと考え、１０月３０日(日)後 1:05 から放送した。事前の周知に関しては、「ほっとニュースぐるっと道東！」内での告知や公共メディア通信、新聞広告で行ったが､届いていなかった面もあったかもしれない。今後、何らかの形でこの予選会を道東エリアの皆さまに見ていただく機会も検討したいと思う。

○　１１月４日(金)の北海道道「激震…農業・酪農の最前線で何が」(総合 後 7:30～8:18.30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。日本の食料供給基地として、豊富な資源を生かして農

業を営む農家の苦悩、現状に衝撃を受けた。酪農家に関しては、生乳は飲用向けと加工向けで価格の差があることや、北海道は全国でも圧倒的に加工向けが多く、価格が抑えられていることが経営困難に拍車をかけているという現状がよく分かった。酪農家と畜産農家の関係は密接だが、飼料高騰の影響で子牛の取引価格が下落しており、八雲町の酪農家が３万円ほどの経費をかけて育てた子牛が1,000円でしか売れないということに本当に心が痛んだ。北海道の農地は火山灰が多いために肥料を入れないと作物が収穫しづらい土地だということも帯広畜産大学教授の解説から知ることができた。これからもこういった番組を通じて、道民一人ひとりが食料事情について考えていくことができたらよいと思う。

（ＮＨＫ側）

肥料の価格高騰の影響は誰もがある程度は知っているが、深く取材していくと、生乳が飲用向けと加工向けで価格に差があることや北海道の土壌が実は痩せているなど、意外な発見が多くあった。

○　１１月４日(金)の北海道道「激震…農業・酪農の最前線で何が」を見た。冒頭から子牛が500円でも売れないという事実が伝えられており、衝撃を受けた。番組は、前半に酪農、後半に農業とテーマを分け、最後には未来への展望を描くための取り組みを紹介していて、見やすい構成だった。加えて、最新のデータや資料が豊富に提示されていて、この２、３年でいかに急激な変化が起きているかがつぶさに見て取れた。酪農ファーム社長の「今年の支払いは何とかなったとしても、来年はどうなるか」といった声は本当に切実で、「行政が介入しなければ守れない」という専門家の意見はもっともだと感じ、行政側の声も聞きたいと思った。番組では、釧路港をはじめ、中国の肥料工場や貿易会社への取材、そして過去のロシア地下鉱山の映像なども紹介されており、問題をより多面的に捉えることができて、理解が深まった。そして、スタジオゲストの専門家の意見も消費者目線で語られており、番組を見た後に北海道の酪農や農業に対する危機感が格段に上がった。

（ＮＨＫ側）

番組担当者の一人は、中国での生活の経験を活かし、知人を通して深い情報取材を行い、それを番組に生かしていた。

○　１１月１４日(月)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見た。医療的ケア児の保護者が中心となって支援施設を運営するＮＰＯ法人が主催して、都内で医療的ケア児を育てる写真家の作品を札幌市で展示しているという内容だった。その中で、

特別支援学校に通っているはずなのに保護者の付き添いが半ば強制されていたという体験や、特別支援学校のスクールバスにさえ乗れないという理不尽を、時にはユーモアあふれるコメントを添えた作品として発表していると紹介されていて、私自身の過去の体験とも重ねながら、共感できる場面が非常に多かった。医療的ケア児支援法が制定され、一見すると環境がよくなったと捉える向きも多いかもしれないが、実情では課題がまだまだであるということを知ることができた。単に、写真展が開催されたことや医療的ケア児について取材するだけにとどまらず、その大本にある本質やまだ明らかになっていない課題にまで触れようとする取材姿勢はすばらしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

この企画を取材・制作したのは若手のアナウンサーである。小さな写真展をきっかけに、背景にある実態まで描き切るのは取材者の姿勢が問われるが、きちんと深めて伝えることができたと思う。取材しただけで知った気にならず、謙虚に現実と向き合うことが大切だと思う。今回は描き切れなかった格差の点など、まだまだ解決しなければならない問題があるので、今後も伝え続けていきたい。

○　１０月１日(土)まで放送していた「【連続テレビ小説】ちむどんどん」を第１回から最終回までとスピンオフドラマを見た。このドラマに一番抵抗を感じたのは、登場人物たちの価値観や倫理観との相違である。周囲から愛され、誰よりも肯定され、人柄満点とまで評される登場人物を見ていると、自分の倫理観や価値観、正義感は間違っているのかもしれないと思い、非常にストレスを感じた。

○　１０月２９日(土)のブラタモリ「登別温泉～なぜ登別温泉は“いい湯だな”？～」を見た。登別温泉にあるそれぞれの温泉の泉質や成り立ちの解説がとても興味深かった。地元の人も視聴者もタモリさんと一緒にのんびりとおおらかにぶらぶら散歩しながら学ぶことができる気さくな番組であり、いつも楽しく見ている。

○　１１月３日(木)の街角ピアノ「旭川」(BS1 後 7:00～7:45)を見た。この番組のシリーズは海外の駅や空港のピアノを取り上げた頃から見ている。本当にいろいろな背景のある人がピアノを訪れて演奏しているが、その人のバックグラウンドが曲と相まって、とてもよい相乗効果を生んでおり、胸を打たれる。今回は「アイム・フォレスト…フォレスト・ガンプ」を弾いた人が特に心に残ったが、いろいろな人が思い入れのある曲を奏でるひとときの切り取りが非常に美しい。当たり前の日常を過ごしている、人それぞれの生活にピアノがあるのだと感慨深くなる。演奏がつたなくても、間違えても、

楽しんで弾いている人の姿がとてもよく、音楽というのはこのようにみんなの日常にあって、誰もが気楽に自分のやり方で楽しんでいいのだと思わされる。旭川のまちや付近の施設の紹介を適度に取り入れているのもよく、旭川駅に行ってみたい気持ちになった。

○　１１月３日(木)の街角ピアノ「旭川」を見た。この番組の魅力は、演奏はもとより、弾き手にまつわる物語にあると思う。子どもから大人まで世代を超えて音楽に魅せられた人たちのそれぞれのピアノへの向き合い方が興味深く、見入ってしまう。定年後に保育士の資格を取得し、毎日保育所で働いている年配の男性の「保育所ではふつうは子どもの前で先生が弾くが、子どもに弾かせている。子どもは天才だと思っているので、僕にも弾けるのだから自由に弾いて楽しんでもらっている」というコメントは特に印象的だった。旭川駅や周辺の自然、観光の情報などもとても魅力的に伝えており、心が和む番組だった。

○　１１月６日(日)の【特集ドラマ】「定年オヤジ改造計画」(総合 後 4:00～5:59)を見た。郷ひろみさんと妻役の伊藤蘭さんのせりふや行動には定年後の夫婦の関係がよく投影されており、ドラマでありながら楽しみつつ考えさせられることの多い番組だった。

○　１１月６日(日)のＮＨＫスペシャル　超・進化論（１）「植物からのメッセージ～地球を彩る驚異の世界～」を見た。人間からは地球上で最も無口で無感情に見える存在である植物が、何よりもたくさん物語を持っていたことに驚いた。常識では、競争と考えられていた植物や昆虫、生き物たちの関わりが、実はそれぞれの生存のための互助的な関係だったのだと感じた。一方で、人間は地球から搾取するばかりの孤独な存在だとしみじみ感じさせられた。すばらしい映像と分析で視聴者の心をつかんだ後に、人類の抱える問題や課題にもきちんと触れることで、教訓や警鐘がより際立っていた。

○　１１月８日(火)の世界ふれあい街歩き「“世界一暮らしやすい街”バンクーバー～カナダ～」を見た。今回はバンクーバーのまちづくりに注目しており、芸術を通して、まちを作っていくのはすてきなことだと感じたが、それを初めから終わりまで同じようなテーマで見ることができて、とても興味深く感じた。人の目線で適度に揺れ動くカメラワークや、心地よい音楽とともに進行していく演出は、その場にいるかのような気分になり、かつそこで暮らす人々の息遣いが聞こえてくるようで、楽しく見ることができた。ナレーションの問いかけに対してまちの人たちが多くを語るわけではなく、インタビューの中で少しずつそれに対する答えを与えてくれており、視聴者に寄

り添った番組作りが心地よい。また、番組のテーマ音楽もすばらしい。

○　１１月１２日(土)のレギュラー番組への道　明鏡止水～武のＫＡＭＩＷＡＺＡ～「四の段　武の原点！？少林拳」を見た。この回では、少林寺拳法の考え方、身体の作り方、沖縄空手の強さなどを紹介しており、非常に見応えがある番組の作りだった。マニアックだが今の時代に合った内容だと感じた。このようにニッチでかつファンがたくさんいるコンテンツというのは非常におもしろいと思った。こういった番組を手間をかけて制作して地上波で放送することにＮＨＫらしさを感じた。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１９日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長と釧路局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「密着２５００キロ　サンマの海で何が」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「密着２５００キロ　サンマの海で何が」
（総合　１０月７日(金) 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　非常にタイムリーな話題で、サンマについては年々不漁が続いていたり、外国船との争奪戦が起きているという事態のほかに、何か新しいことが知れるかもしれないと期待して番組を見た。サンマは日本近海で獲れているとばかり思っていたが、漁場が大変遠いことに驚いた。ロシアによる拿捕の危険性や多額の費用がかかるなどの多く

のリスクがあっても「獲れればサンマは夢がある」という乗組員のことばが印象的だった。一方で、どうすればサンマが元のように獲れるようになるのか、消費者が間接的にでもできることがないのかなどが気になったので、専門家の見解をもっと詳しく聞きたかった。

○　サンマ不漁の直接的な影響を受けている漁業者たちの深刻な現状がよく伝わってきた。また、東京海洋大学准教授のコメントにあったように、漁業者だけでなく想像以上に多くの人々に不漁の影響が及んでいるのではないかと思う。乗組員のことばや表情からはやりがいが伝わってくる一方で、大きな不安を抱いているという複雑な心境も感じた。そのような本音を話してしまうところまで関係性を構築したディレクターの取材の丁寧さが感じ取れた。出漁してからサンマの大群に初めて出会って緊張感が走る様子や大漁で笑顔がはじける様子などから、漁業のやりがいについてもよく伝わってきた。サンマがどのような旅を経て食卓に上っているのかを見せることで、一口一口が大切に思えるだろうと感じた。漁業でも農業でも私たちの手元に届くまでの経緯や背景を伝える番組は、一つ一つの事や物に付加価値をつけ、フードロス問題や環境破壊の解決行動を精神的な部分で支えてくれると思うので、これからもこのような番組を積極的に作り続けてほしい。

○　考えさせられることが多い番組だった。海の資源を地球規模で保護していくのは難題だが、視聴者一人一人が漁をする人たちの苦労や海の資源について考える時間になったのではないか。しけの中の取材は大変な苦労があったと思うが、長期にわたる乗船撮影の映像はとても貴重なものだった。特に、船上で乗組員たちが大量のサンマを人力でより分ける映像には頭が下がる思いだった。さらに、乗組員それぞれに違う未来や思いがあることにも触れており、第一次産業で働く若い人たちの将来も考えさせられた。遠くまで燃料代をかけて漁に出なければならない苦悩と、大漁のときの慌ただしい緊張感と喜びがうまくまとめられていた。

○　厚岸に居住している身として、釧路や根室のどの地域も同じようにサンマの不漁による大きな影響を受けていることを実感している。深刻な問題として地域の実情や漁業の現状を伝えたことは非常に意義深いと感じた。しけの中の漁の緊張感や臨場感がよく伝わってきた。サンマが生息する場所や年代別・月別の生息地の変化を図を使うことで分かりやすく紹介していた。また、サンマ漁の方法について、船首にカメラを固定して撮影した映像や図解などで丁寧に紹介していた。漁場が日本近海から離れている原因として、えさとなるプランクトンが年々減少して成長が遅れ、回遊の時期の遅れにつながっているからだという説明があった。海流の変化や海水温の変化も原因の一つと聞いたことがあるが、この点には触れられていなかったのが気になった。北

太平洋の公海に多くの外国船がいる映像があったが、その中に日本船はいなかったのかも知りたかった。この番組がサンマ漁に関わる地域あるいは水産業の現状をより一層理解してもらうきっかけになるとよいと思った。

○　とにかく取材力が高く、非常におもしろい内容だった。漁船が出港してから帰港するまでの期間、ディレクターが同じ船に乗り込んで寝食をともにした成果が表れていたのではないかと思った。番組構成もいつものスタジオから始まるのではなく、映像を中心とした骨太のドキュメンタリーで描かれて、よい意味で「北海道道」離れしており、今回の内容によく合っていた。サンマ漁の説明も、光を使って魚群を漁船の網がある側へ誘導するという方法を画面右下に対応する図を表示することで視覚的にも分かりやすく理解を促していた。一方で、試験的に許可されたイワシ漁に出ている船が苦戦していることを紹介していた場面で、サンマ漁の船と同じ設備でイワシを光で誘導していたが、「イワシも光に集まる習性がある」という説明が明言されておらず、視聴者の理解度を過信し過ぎではないかと感じた。イワシも光に集まる習性だということ、その光の色や加減によるコントロールが非常に難しいということをきちんと明示すべきだったと思った。

（ＮＨＫ側）

イワシも光に反応するということだが、光をつけると海面に上がってくるものの、サンマ漁の設備でイワシ漁をしようとしているため、現場では苦労していたということだった。その苦労の説明を加えたほうがよかったと思う。

○　これまでの「北海道道」と比較しても非常に見応えがあり、取材の労力はもちろん、映像の撮れ高もすごかったのではないかという印象だった。ディレクターが撮影していた漁業関係者と相当な関係を築いていることが見える内容だった。ただ、サンマ漁に出港せずイワシ漁を続けている船頭の「来月からはサンマ漁に行く」という話で最後は終わっていたのが中途半端に感じられて気になった。撮れ高があったと思うので、編集の難しさもあったと思うが、編集の甘さが感じられた。非常に丁寧な説明がされていたので、内容をうまくまとめて着地させることも必要だが、よりよい編集方法がほかになかったか、今後に向けて検証してほしい。

（ＮＨＫ側）

取材先とは、ディレクターが寝食をともにする中で強い信頼関係を築くことができた。ディレクターは取材に行く際は撮れ高を見据えて臨むが、今回はどれだけの映像が撮れるか見えな

い中で、まず乗船して撮影してみるという取材だった。

○　サンマが不漁だということは認識していたが、遠洋漁業を行っているとは思っていなかった。乗組員のさまざまな背景を丁寧に取材していて、サンマ漁に懸ける思いを知ることができた。なかなか知ることのできない船内での生活も詳しく伝えられていた。サンマとイワシそれぞれの漁の詳細や種の違いによる漁の難しさ、サンマの大きく減った漁獲量の推移が非常に分かりやすく紹介されていた。しかし、イワシ漁の船からサンマ漁の船に切り替わる場面で、船上の設備も酷似していたためにどちらの船だったのか一瞬見失ってしまい、もっと分かりやすい場面展開があるとよかったのではないかと思った。「サンマの海で何が」という番組タイトルだが、サンマ不漁の原因はよく分からないというのが結論なのか、その意図を知りたい。

（ＮＨＫ側）
取材する中で、サンマ不漁の原因は、海洋環境の大きな変化と乱獲だと考えている。

○　番組タイトルから、サンマ漁について詳しく分かるのではないかと期待して見た。漁業をなりわいとする方々の生き様がとても美しく描かれており、遠洋漁業という仕事の厳しさも話には聞いていたが、実際に映像で見ると臨場感や緊張感がより伝わってきた。新鮮なサンマが食べられる裏には、漁業の厳しさ、漁に関わる人々の情熱や思いがあるのだと実感した。一番印象に残ったのは、ディレクターの「なぜ危険を冒してまでサンマ漁に転職したのか」という質問に対し、乗組員が「サンマは獲れれば夢がある」と言っていたシーンで、非常に格好よいと思った。サンマの漁獲量がかなり減っているという最近の状況を見ると、働く方々の生活の厳しさも身近に感じた。ＮＨＫの漁業に対するメッセージ、視聴者へ伝えたい思いは何なのかを考えながら番組を視聴した。

○　サンマ漁の映像は大変貴重なものだった。不漁の原因は乱獲だと聞いたことがあったが、この番組を見るとそれが一目瞭然で、北太平洋の公海の漁場に 100 隻近くもの台湾や中国、韓国の船が集まっていたのには驚いた。さすがにこれだけの数の漁船が獲ったらサンマは減り、値段は高騰してしまうと理解できた。漁業関係者に対してお金の話を聞くのは難しいと考えていたが、しっかりと取材できていたことに感心した。しっかりとした取材のおかげでよい番組になっていた。サンマ漁における国際的な協議がうまくいっていないと知っていたが、なぜ資源管理がうまくいっていないのかをもっと詳しく知りたかった。クロマグロが参考になるという紹介があったが、サンマの場合はどうすれば国際協調が成り立つのかを掘り下げられればよりよかったので

はないか。この話題は「北海道道」以外の報道番組やドキュメンタリーとして放送してもらいたい。また、獲れたサンマが消費地までどのように運ばれてどのように売られているかというところまでを追跡した番組も見てみたいと思った。全国に向けた情報発信もしてほしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

クロマグロは高級魚であり、欧米が先導して漁獲規制を行い、さらには2014年に絶滅危惧種に指定されたこともあり、一気に国際協調できた一方で、サンマは値段も安く、漁獲規制に消極的な国が多いため、現状ではなかなかうまく協議ができていない。

○　遠洋漁業といえばマグロやカツオというイメージだったが、今やサンマも1000キロ以上沖に出ないと漁場にたどり着けないとは知らなかった。映像も非常に見応えがあった。番組の大部分はサンマ漁を行う夜の漁船の映像で、常に船のエンジン音が聞こえており、非日常的に感じられた。番組後半ではその騒音や外国船の赤い光の映像の直後に、港のつまり陸の静かな落ち着いた秋空の映像が出てきて、その対比が魅力的に感じられた。乗組員とディレクターのやり取りの中で、乗組員のコメントを補足するようにディレクターが的を射た問いかけをすることで視聴者の理解を助けており、番組としての丁寧さを感じた。東京海洋大学准教授のコメントで「漁業者だけの問題ではなく、広く議論する必要がある」とあったが、その意味をもっと具体的に知りたかった。

○　サンマ漁の現状に関心を持って見た。水産資源は無尽蔵ではないということを率直に感じた。サンマは北太平洋のプランクトンの減少が成長を遅らせて、日本近海に近付かなくなっている原因になっているとのことだったが、プランクトンが減ってしまった理由は解明できていないのか気になった。東京海洋大学准教授のコメントとして、日本がリードして漁獲規制を強める必要があり、資源回復のために一定期間漁を休んだ場合の国内補償制度の問題を上げていたが、大きな課題に思えた。根室や釧路の漁獲実績がある漁船の乗組員の横顔に迫るシーンからはサンマ漁の現状がよく伝わってきた。ロシアのチェックポイントについて、当初ロシアの主張する排他的経済水域を避けて遠回りする必要があるかもしれないとのことだったが、今回の漁では拿捕されて強制連行されるかもしれないリスクがどういう事情で回避され、遠回りする必要がなくなったのかが理解できず、説明が足りないのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ロシアが主張する排他的経済水域は通れるが、ウクライナなどの現在の国際情勢の中で、もしかしたら何か理由をつけて今までとは違うことが行われて、臨時検査があるかもしれない、排他的経済水域を通れず迂回しないといけないかもしれないと考えていたとのことだった。一方で、迂回すると燃料代も跳ね上がってしまうので、今なら通過できるというタイミングで漁に出る判断をしたとのことだった。このタイミングでの取材・放送となったのも、航路をどうするかということや迂回すると高騰している燃料代がさらにかかるということなどを明らかにしたかったからである。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１４日(金)の「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見た。室蘭局の防災イベントの様子を紹介していたが、実際に会場を訪れると、親子連れが途切れなく来場しており、番組で取り上げた成果が出ていたのではないかと思った。会場では防災に関する謎解きをしたり、ＡＲ浸水体験で津波や洪水を疑似体験できたりと期待以上の経験ができた。防災や行動基準についての知識が少ない子どもたちにとって、遊びながら怖さを知ることができるのはとてもよいことである。身近な場所で防災に関するイベントが行われることは防災意識の醸成につながり、繰り返しの刺激も大切なことではないかと感じた。ＮＨＫを訪れること自体も貴重な経験になると思った。

○　１０月１４日(金)の北海道道「クロマグロ　大集結の謎に迫る！」を見た。水中ドローンを駆使した映像はすばらしく、クロマグロの大群はイルカによく似ていて、思わず声が出るような圧巻の映像で迫力満点だった。海底地形や海流などの影響による栄養豊富な海域と、資源管理により、クロマグロの資源量を底上げしているという壮大なからくりが分かって心が躍った。

○　１０月１４日(金)の北海道道「クロマグロ　大集結の謎に迫る！」を見た。クロマグロの海中の様子を映した映像は非常にダイナミックだった。クロマグロの資源量がＶ字回復できていることは、研究者が特殊なカメラを使って海中で計測したクロマグロの大きさからも解明されていて、分かりやすかった。漁師の生活が補償されれば水産資源を回復できるということが分かったが、国などからの補償があったのかなど、具体的な説明があるとよかったのではないか。

○　１０月１４日(金)の北海道道「クロマグロ　大集結の謎に迫る！」を見た。クロマグロの生態や松前沖にこれほど集結する理由など、科学番組のような内容になっていた。スタジオの函館局の向井一弘アナウンサーが画面右上に表示したＱＲコードを紹介する際に、「今の話はとても重要なので、もっと詳しく知りたい方は画面右上のＱＲコードでご覧になってください」と紹介していたのがとても魅力的だった。しかし、いざＱＲコードを読み込んでみると、番組の予告や概要はあるものの、クロマグロの資源管理については放送以上に詳しい情報がなかったので、情報量をもっと充実しておいてほしかった。

（ＮＨＫ側）

ＱＲコードで誘導した先のホームページは、以前だと番組で紹介した図などを掲載していたが、最近ではインタビューを記事にするなど、ボリュームのあるものを掲載するようになってきている。今回の指摘は今後に生かしていきたい。

○　１０月１２日（水）の「ほっとニュース北海道」で、「ブレイキン」について紹介する企画を見た。その後、１０月１６日(日)の「ブレイキン北海道・東北ブロック選手権 2022」(総合 後 1:05～1:50 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。会場に設営されたセットやマット、ＤＪブースなどのクオリティー、ジュニア部門の選手たちの動きなど驚かされることが多くあり、大会の運営や番組を制作した方たちに感謝を伝えたい。ブレイキンは 2024 年のパリオリンピックの新競技で、日本選手のメダルが期待されることも考えると、もっと北海道でも盛り上げられるとよいと思った。今後も継続的に取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

ブレイキンはまだ認知度が低い新しい競技なので、どのように伝えるか検討を重ねた。「ほっとニュース北海道」の番組内ということでコンパクトに要点を伝える中で、昼は家庭裁判所で裁判に関わる仕事をしており、夜はブレイキンの選手という方に出演いただき、ブレイキンの魅力を語り実際に技も披露していただいた。ブレイキンへの関心は全国的にも高まっていると言われているので、パリオリンピックに向けてどのような取り上げ方ができるのかを引き続き考えていきたい。

○　１０月１６日(日)の「ブレイキン北海道・東北ブロック選手権 2022」を見た。ブレイキンは初めて見たが、音楽に合わせて即興で繰り出されるダンスでとても楽しく、

初心者の視点から自分ならジャッジできるかなどと思いながら見た。今回の勝ち上がった選手たちの２月の全日本選手権での活躍に注目したい。

（ＮＨＫ側）

札幌局のスペースを多くの皆さんに使っていただきたい、皆さんが使う会館を目指していきたいという思いから、ブレイキン北海道・東北ブロック選手権は１０月２日に札幌局１階のＴ－１スタジオで開催・番組収録を行った。当日は、若い人や若い家族が来ていた。今後もＮＨＫの会館施設にはこういう使い方があるのではないかなど意見や提言を頂きたい。

○　１０月１８日(火)のほっとフォーラム道北オホーツク「鉄道を考える」(総合 前0:25～1:14 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を「ＮＨＫプラス」で見た。鉄道 150 周年という節目に、これからの地域の在り方にまで踏み込んだ番組で、本当に意義深いものがあった。それぞれの話題に対する各パネリストのコメントがちょうどよい長さで、視聴者を飽きさせないテンポのよさがあった。鉄道に対するノスタルジー的な話題についても、各パネリストの鉄道好きな一面などの人となりが見える工夫がなされていた。パネリストのコメントに対してテロップが非常に分かりやすく表示されており、字幕と同じような効果があると思った。

○　１０月８日(土)の「ＮＨＫニュース　おはよう北海道　土曜プラス」を見た。９月３０日に運転を終える札幌－函館間の特急列車のラストランに同乗取材していた。関係者はもちろん、最後に感謝の思いを伝える車掌のアナウンスなどに密着して伝えており、万感の思いになる企画だった。また、１０月３日から１６日まで「ＮＨＫ発！鉄道 150 年」として、鉄道開通から 150 年の節目に合わせ、鉄道関連の番組を集中的に放送していた。新作だけでなく過去の番組や、明治から昭和にかけての貴重なアーカイブス映像を放送しておりＮＨＫならではだと思った。１０月１０日(月)放送の蒸気機関車の歴史について紹介していた、アーカイブス映像でよみがえる　にっぽんの鉄道「蒸気機関車」、１０月１５日(土)放送の鉄道博物館のお宝フィルムを紹介する「鉄道博物館　お宝フィルムが語る　知られざるニッポン」、１０月８日(土)～１５日(土)放送の驚き！ニッポンの底力「鉄道王国物語４～６」など、見応えがある番組の数々だった。お笑いコンビの中川家が司会の「鉄オタ選手権」、「中井精也のてつたび！」、「六角精児の呑み鉄本線・日本旅」も楽しみながら見た。明治から昭和にかけて活躍した蒸気機関車のアーカイブス映像は非常に迫力があり、Ｄ５１機関車の生みの親である鉄道技術者の島秀雄さんの自叙伝の映像なども大変貴重で感動した。北海道の鉄路を守るということを考える特集番組などもぜひ放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

１０月１８日(火)から２０日(木)まで「ＮＨＫニュース　おはよう北海道」では、道北・オホーツクエリアで制作したシリーズ企画「廃線紀行」を放送した。今後も北海道にとっての鉄道の意義を深く考えながら報道を続けていきたい。

○　「ほっとニュース北海道」で放送しているコーナー「ローカルフレンズ滞在記」が2022年度グッドデザイン賞のグッドデザイン・ベスト100を受賞した。この企画はＮＨＫの今までのイメージを大きく覆すものだとあらためて感じた。その地域の目線で、リアルでタイムリーに紹介するという姿勢に親近感を覚える。「観光」ということばの語源が「国の光を見る」と言われているように、ＮＨＫの地域に根差した放送を通じて、引き続き、北海道という地域自体の光を見せてほしい。

○　「ローカルフレンズ滞在記」が2022年度グッドデザイン賞のグッドデザイン・ベスト100を受賞した。この企画の「目指すのは番組づくりではなく地域づくり」というフレーズが、まさにＮＨＫが新たに取り組もうとしているミッションなのだと感じた。「テレビっぽさからの脱却と、地域の日常を丁寧に描く覚悟」、「地域で活動する人々の背中を押し続ける存在でありたい」ということばに非常に共感するとともに、頼もしく思った。社会的なインパクトについて、アンケート調査を行い、しっかりとデータを取っていることにも感心した。

（ＮＨＫ側）

放送をいろいろな方に使っていただきたいと発想を転換した。その象徴の一つが「ローカルフレンズ滞在記」だと考えており、2022年度グッドデザイン賞のグッドデザイン・ベスト100の受賞は出演いただいた皆さんの受賞だと考えている。

○　１０月８日(土)～１０日(月)にはこだてみらい館で開催されていた函館局開局90周年の「見ささるＦｅｓ．～なんか、見ささる。ＮＨＫのコンテンツと最新技術～」を見に行った。地域の子どもたちが一生懸命に描いた土偶の塗り絵が会場の壁一面に貼られていたほか、会場の至るところにＮＨＫの放送技術を駆使した、子どもたちが遊べるさまざまな演出があった。地域の人々と直接関わることができる企画があるのは本当に喜ばしいことだと思う。たくさんの家族連れが会場いっぱいに集まり、楽しげな様子だったことが印象的だった。

○　９月２１日(水)のクローズアップ現代「謎のヒグマ“ＯＳＯ１８”を追え！」を見た。ＯＳＯ１８による被害が 2019 年からの４年間でこれほどまでに拡大していることに驚いた。ＯＳＯ１８は東京２３区に匹敵するほどの広域を移動して被害を拡大させながらも、人間の裏をかいて今年まで姿すら確認できなかったとのことで、姿を見せない野生動物と人間の攻防から、ヒグマのしたたかさや生存本能の強さがひしひしと伝わってきた。一方、札幌などの都市圏でヒグマとの遭遇が多発している背景には、人間を怖がらない新世代のクマの出現があるということで、本来の性質と新しい性質のいずれのクマでも人との間にあつれきが生まれるという現実は悲しく痛ましく思えた。人もクマもともに生きられる環境を整えていくことが急務ではないかと強く感じ、命に直結しているという点で最優先課題が見えているのであれば、より迅速に解決策の実現に向けて動いてほしい。１頭のヒグマから見えてくる自然界と人間とのいびつな関わり、それが生む変化を恐怖とともにじわじわと伝えている番組だった。

○　１０月１日(土)まで放送していた「【連続テレビ小説】ちむどんどん」について、６月の放送の頃は「『ありがとう』と『ごめんなさい』を大きな声で言えるところが暢子の一番よいところだ」というせりふに感動させられていたが、登場人物のキャラクター設定やストーリー展開などに我慢が必要なところもあった。最終回は最後の１０分ほどで一気に４０年が経過するという終わり方に驚いた。このドラマについては、残念ながら視聴者の喜ぶ顔がなかなかイメージできないまま終わってしまったように感じた。

○　１０月６日(木)の魔改造の夜「特別版　ワンちゃん２５ｍ走」(総合 後 7:57～8:42)を見た。エンジニアたちが楽しみながら改造している様子や頑張り、改造したマシンの手作り感が伝わってきた。勝利したことにとても喜ぶ様子にエンジニアのプライドを感じた。

○　１０月１０日(月)のエマージェンシーコール～緊急通報指令室～「東京」(総合 後 9:30～10:00)を見た。「２５歳の息子が大量の薬を飲んで倒れている」という母親からの通報が印象的で、指令室のオペレーターは電話での指導で心臓マッサージをさせたいのだが、母親は動転してしまっており、緊迫感が伝わってきた。「２歳の子どもが泡を吹いて倒れている」という両親からの通報では処置の方法が伝わり、通話中に子どもが意識を回復して事なきを得て、見ていてほっとした。このような映像が実際に見られるのは非常に貴重で、万が一のときの対処のしかたが分かるという意味でも意義深いと思った。一方で、救急とは関係ないかもしれないような通報もあり、何とかならないものかと思いながら見ていた。こうした救急の現場は社会の状況の一断面だが、そこから社会全体が見えるというイメージを持った。ナレーションなしで現場

の声だけで伝える演出だったが、テーマによく合っており、映像の力がはっきり出ていて見やすく、関心を持って視聴できた。冬の札幌での救急についても見てみたいと思った。

（ＮＨＫ側）

道内各局において、防災・減災の在り方について日頃から議論を深めているが、冬の大雪などの起きている事態にふさわしい対応をとり、ふさわしい報道をすることが私たちに求められている。この番組についての意見や指摘も受け止めながら、何が本当に役に立つのかをこれからも議論していきたい。

○　１０月１５日(土)の超多様性トークショー！なれそめ「超ポジティブに義足で歩む彼＆ほれ込んだ彼女」を見た。カップルのなれそめから人生を語ってもらうという番組コンセプトはとてもおもしろいと感じた。今回はパラスポーツのシッティングバレー選手とその彼女が出演していて、二人の明るい人柄もあって楽しんで見ることができた。番組の流れもよく、二人の出会いから始まり、エピソードが話されていくにつれて、彼のパーソナリティーが徐々に見えてきて、彼女が彼に好感を抱いていくのを視聴者が追体験できたのではないか。また、ゲストのアンジェリーナ１／３さんの「チョキがめっちゃキレイ」ということばに感銘を受けた。彼は中指が欠損していて指が４本で、中指が欠損しているからこそチョキを美しく作ることができるとダイレクトに言ってのけたアンジェリーナ１／３さんの感性、物の見え方はすばらしいと思った。番組に出演したカップルは年の差、同性愛、プロゲーマー同士、発達障害と実に多種多様だったが、出演はカップルであることが前提であり、性的マイノリティーの中には誰にも信頼感情を抱かない、誰にも性的欲求を抱かないというタイプもあるはずなので、カップルにならない指向を持つ人も出演して初めて「超多様性」と言えるのではないか。ＮＨＫでは、アセクシュアル・アロマンティックといった性的指向をテーマにした「【よるドラ】恋せぬふたり」も放送していたが、このような性的指向の方で、かつまるっきり一人が寂しくない、普通でもないという方はそもそもカップルにならないのではないかと思われ、この番組はそのような多様性を持つ人たちをナチュラルに排除してしまわないかと危惧された。

○　「テレビ体操」と「みんなの体操」に感謝申し上げたい。どちらも足の不自由な人のために座ったまま体操ができる配慮があり、朝、昼、午後に３回放送しており継続しやすい配慮がされている。ピアノの生演奏に合わせて体を動かすのは気分がよい。番組冒頭で体操指導者、ピアノ演奏者、アシスタントの名前を紹介してから始めるのも続けていると親しみがわいてよい。８月１６日(火)、１７日(水)の「夜のテレビ体

操」（総合 後 10:55～11:00）も見たが、ぜひ定時化してほしいと思った。阿佐ヶ谷姉妹のやりとりに気持ちが和み、アシスタントの矢作あかりさんがこの番組では話をしていることに感動した。美しい夜景のセットとスローテンポの生演奏もすべてが心地よかった。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２１日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、空席となっている副委員長の互選を行い選出した。続いて、札幌局長から２０２１年１２月２６日(日)に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」に関するＢＰＯ意見についての報告、札幌局長と旭川局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、２０２２年度後半期の国内放送番組の編成についてメディア総局・メディア編成センター編成部長から説明があり、２０２３年度の番組改定についての意見を伺った。

続いて、北海道道「そして、この町で生きる～胆振東部地震から４年～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
副委員長	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
委　　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　　ルカ	（小説家）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「そして、この町で生きる～胆振東部地震から４年～」
（総合　９月２日(金) 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　厚真町に対して、被災地とひと言でくくるとネガティブであったり、応援しなけれ

ばいけないというように感じられるが、実際は世間が感じているイメージと異なり、ベンチャー企業を立ち上げた成田智哉さんをはじめ、いろいろな人が厚真町に行っておもしろいことをやろうとしていたり、元気で前向きな方が多い印象を持っており、番組もこのような印象が伝わってくる内容になっていた。事実とイメージには違うところもある中で、このように取材して番組として取り上げることは厚真町の人たちにとって非常に有意義で、北海道全体から見ても意義のある番組だったと思う。また、ＮＨＫの放送には宣伝や広告はないが、放送で取り上げられたことで厚真町のよさが広まる効果があったという点も非常によかった。

○　胆振東部地震について継続的に取り上げ、被害の記憶を風化させず、いま一度自らの防災意識を確認するための番組作りを進めていることに公共放送の役割があると感じた。番組全般を通して、大きな被害を受けながらも前を向く人たちという、一貫して未来志向なイメージを受けた。ハスカップ農家のＳＮＳでのライブ配信やあつま元気クラブの取り組み、中高生たちの居場所づくり、新たな移住者の起業など、番組で取り上げられた人たちの活動を通じて、復興とは何かと改めて考えるきっかけになるとともに、加速する人口減少にあらがいながらも持続性のある地域づくりを目指すという、地方創生のヒントのようなものが数多く盛り込まれていたように感じた。ハスカップ農家の山口善紀さんの「復興とは元に戻すことではない。未来につながったり、さらに先に進めていかなければ本当の復興にならない」ということばは心に刺さるものだった。厚真町は本当に大きな被害があり、尊い命がたくさん失われた悲劇の町という見方もあるかもしれないが、「地震の町」では終わらせたくないという強い意志のもと、小さい町だからこそできる取り組みを数多くの町の人たちが実践している姿に元気をもらった。「可能性を信じてチャレンジしていく」、「北海道はチャレンジできる場所で、それは失敗もできるということである。失敗してもやったことがなかったから仕方ない、もう一度頑張ろうと言える場所である」など、本当にヒントになるキーワードがたくさんあり多くの学びを得られた。内容を盛り込み過ぎている印象があるが、厚真町で活躍する３人のキーパーソンの話は時間を拡大するなどしてもっと聞きたかった。

（ＮＨＫ側）

「北海道道」では、２０２０年９月１１日放送の「胆振東部地震から２年～いま　そしてこれから～」や２０２１年９月１７日放送の「停電の中で、あの時…～胆振東部地震　営業したコンビニ～」をはじめ、地震や津波については、継続して被害想定などの新しい情報や今起きていることをしっかり伝えていきたいと取り組んでいる。この番組は、地震から４年という中

で、何を今取り上げるべきなのかということを議論し取材を重ねる中で、まちづくりや地域のコミュニケーションづくりということが非常に活発であり、それが興味深く感じられたのでテーマとして設定することにした。まちづくりや地域のコミュニケーションづくりという前向きで未来志向のテーマ設定をしたものの、まだ気持ちの整理がついていない方やある種の喪失感にさいなまれている方も大勢いらして、制作者は非常に悩みながら制作した。震災５年に向けて、前向きなテーマとともに忘れてはいけないある種の喪失感や苦しみに心を砕きながら、番組作りを続けていきたい。

○　地元におけるさまざまな防災意識の高まりを年々感じる中で、被災地がどのように復興しているのか、厚真町の取り組みを詳しく知ることができる大変よい番組だった。前向きな気持ちで頑張っている人たちがいて、それを支える行政との距離が近いというのは、人口が 4,400 人の小さい町であったり、地震が起きたことで気持ちを強くさせられたからなのかと自分の地域にも置き換えながら見た。厚真町の生産量日本一のハスカップ栽培の歴史や取り組み、ハスカップ農家の山口さんが栽培農家を 100 軒以上に広めて意識を高めてきたという熱意、自信や誇りが分かりやすく紹介されていて、「地震の町」では終わらせたくないという強い思い、小さい町だからこそ頑張りを見つけて認めてもらいやすい、といったさまざまなキーワードが番組から伝わり、未来への可能性を感じた。震災後にベンチャー企業を立ち上げた成田さんの取り組みも非常に興味深く、厚真町は高齢者と若者の接点が多い中で「ビジネスは課題を解決して人々の笑顔を作るのが使命」と答えていたのが印象的だった。番組ＭＣの鈴井貴之さんの「北海道はチャレンジできる場所で、それは失敗もできるということだ」ということばには背中を押された人も多いと思う。あつま元気クラブを立ち上げた村上朋子さん、中高生のための勉強会を立ち上げた上道和恵さんの取り組みなどからも全体的に厚真町が復興に向かう明るい可能性が感じられ、見ていてとても安心感があった。復興に懸ける思いは人それぞれで、復興を後押しする支援や応援もさまざまな形があるが、住んでいる人たちの熱意や思いを発信することで共感と理解を得られるのだと感じた。厚真町の人たちが気軽に立ち寄れる場所として紹介されていた、コミュニティスペース「イチカラ」に集まる地元の人たちの声や心の変化なども知りたかった。

○　「そして、この町で生きる」というシンプルな番組タイトルとは逆に、胆振東部地震でこれまでの人生を奪われて、その後にどのように生きていくか葛藤して努力する人たちの思いをよく映し出しており、道民それぞれが胆振東部地震での苦しみや悲しみを思い出しながら番組を見たのではないか。また、厚真町の土砂崩れの映像からも

当時の恐怖や悲惨さが思い出されたが、やがて来ると言われる大地震や年々大規模になっている台風被害などへの姿勢を正す機会にもなったと思う。厚真町の人たちが互いに支え合う姿や、特産品のハスカップ栽培を再び推進していく取り組みを丁寧に追うことで、自分たちの生活や人生を取り戻そうとして、さらには震災前の生活を超えようと頑張る気持ちや、「地震の町」では終わらせたくないという思いがことばや表情から伝わってくるとともに、いつか予測のつかない大地震、大災害に見舞われたとしても、自分も超えられると誰もが勇気づけられたのではないか。教育的な立場から見ると、ハスカップ農家の山口さんの「被災当初は心の中では挫折感でいっぱいだったが、周りの応援や支援を感じると、前向きで強くなったり、いつか恩返ししないといけないと思った」ということばは非常に重く、挫折や被害は前の自分よりも強くなるための礎となって、さらに強い自分になるための土壌にできるということを若者たちにも伝えてくれると思った。「同じ境遇にある人と力を合わせると立ち上がりやすい」、「他者の役に立つことで自分も救われる」、「元に戻るよりもっとよい未来を目指す」といった人生の指針としてのメッセージ性が強く、自然災害が起きた後に、その先を照らす光になってくれるような番組だった。

○　胆振東部地震から４年の復興や被災地について、震災を取り上げた番組としてはオーソドックスな内容だったが、訴える力や訴える要素を数多く盛り込み、うまくまとめた番組となっていた。土砂崩れの山肌に緑が戻り始めていたり、仮設住宅が建てられていた場所が住民たちの憩いの公園に戻っている様子がさりげなく紹介されており、震災後の復旧が一段落して復興に移行していったということが伝わってきた。「地震の町」では終わらせたくないとのことだったが、厚真町は震災前からさまざまな魅力がある町で、中でもハスカップは町の個性として非常に大きな要素である。ハスカップ農家の山口さんが語っていた、子どもの頃に母親から「苦い木を探せ」と言われて、苦い実のなる木を選別してなくしたことで、おいしいハスカップの木が育つようになったという、ハスカップを特産品として広げていった当初のエピソードは、町の個性を紹介するうえでおもしろいと思った。田舎で暮らすことの価値という将来の希望について語り合っていたり、「小さい町だからこそ頑張りを見つけて認めてもらいやすい」ということばがあったが、これは北海道で過疎などの問題を抱える町村にとって共通の課題であり、厚真町の取り組みがほかの町村の参考にもなると思った。厚真町の今後の取り組みとともに、それに負けないほかの町村の取り組みも紹介していくと、震災の復興に広がりが生まれたり、震災の残したものという視点から北海道全体を見ていく展開もできておもしろいのではないかと思った。

○　番組冒頭でＭＣの鈴井さんが心に刺さるフレーズとして、「地震の町」では終わらせたくないと語っていた。これが番組のテーマや切り口であり、タイトルに「そして、

この町で生きる」とあるように、大きな災害が起こった町の現状と前を向いていく姿をとらえた番組だと受け止めた。災害は一般的に犠牲者の多さでその大きさが測られる傾向があるように感じており、胆振東部地震は北海道全域が停電し、ある意味で道民全員が被害を受けたにもかかわらず、全国的にはあまりフォーカスされていなかった。震災当時を振り返り、被災者の今を伝え続けることは地域局としての責務であり、意義のある番組だったと考える。しかし気になった点として、ハスカップ農家の山口さんがハスカップの品種改良について、母親が子どもたちの舌で苦い実のなる木を探させたことが選抜の肝であり、「徹底的に畑から苦いのを出したからうちのハスカップはきっとおいしいと思う」と語っていた表現について、もう少し補足して説明するべきだったと感じた。「出す」ということばは、目指す性質を持った品種をかけ合わせていくという品種改良の一般的なイメージと結びつかないので、視聴者にその意味を少し考えさせてしまう。山口さんは苦い実のなる木を選別して畑から排除して、畑の中をすべて甘くておいしい実のなる木だけにして品種改良したのだと思う。番組では考えれば分かるという想定で済まされているが、その考える一手間を視聴者に強いる必要はないように感じる。例えば、字幕で「出した（伐採し、甘くておいしい木だけを残した)」や「甘いのを残した」というようにはっきり補足したほうが視聴者には分かりやすく、考える手間も与えなかったと思う。もし制作者が、そこで考える一手間を要する視聴者はいないという認識だったとすれば、もっと広い視点で番組制作に当たってほしい。なぜなら、私が実際にそうだったように、制作者が即座に理解できることでも立ち止まって考えざるを得ない視聴者はたしかに存在するからである。それぞれの視聴者の立場に立った番組制作が、受信料で成り立っているＮＨＫには必要なのではないか。「日頃から視聴者目線を心がけて」、「視聴者の皆さんに届くように」と耳にするが、このことばは表面上だけなのかと感じてしまう。特に今回の番組は視聴者が好みで選ぶといったものではなく、取材テーマに公共性があり幅広い層の視聴者に見られる可能性が高い番組なので、一部の視聴者を意識せずに切り捨てているように感じ取れてしまうのは非常に残念であり、意識を改善していってほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

番組制作や取材において、伝え手側の独りよがりや、上から目線になりがちだということはさまざまな場面で指摘を受けることがあり、今後も戒めとして肝に銘じて取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

内容を補足した字幕を入れるなど、視聴者に丁寧に伝わりやすく、分かりやすくという基本的な意識を番組制作に関わる全

員で心がけていきたい。

○　厚真町の取り組みを例に、ハスカップのような魅力的な特産品を生み出すこと、高齢者をはじめ町民に居場所と活躍の機会を作ること、地域の困りごとを地域で解決するための方法、高齢者と若者との世代を超えた交流の場の必要性などが、つながりを持たせながら紹介されており、大変勉強になった。これら数々の挑戦は、「地震の町」で終わらせたくないという強い意志に支えられた復興の取り組みだが、災害に見舞われていなくても同じような課題を抱えている町や村は多くある。厚真町の取り組みはほかの町や村も見習うべきものがたくさんあるように感じられ、自分の住む町ではどのようになっているかと考えながら見た。そして、日本各地の町や村が知恵を出し合って実践することで、地方の活性化や地域創生への可能性が生まれ、大都市や中央に集中しているヒト・モノ・カネの格差の解消につながり、日本の社会構造の問題を解決できるというようなヒントがこの２５分間に詰まっていたと思う。

○　「そして、この町で生きる」というタイトルから受けた印象と違い、ビジネスチャンスや起業といった、新たな可能性を積極的に開いていこうという内容で、震災の被害という背景は重大で深刻だが、前向きな印象を受けた番組だった。取り上げた人たちは震災が極めて重要なきっかけとなっているが、その取り組んでいるテーマや課題は、農業が主力産業だが特産品がないことや高齢化と後継者不足、新型コロナウイルスによる打撃、公共交通機関のぜい弱さなど、すべてが地方都市の現状と課題に当てはまるものだ。そのため番組自体が、被災地固有の問題を取り上げた番組という枠を超えて、非常に一般性のあるテーマを扱ったものになっていると感じた。地方都市で活動することについて、大変だけど頑張っているということよりも、その活動特有の具体的な魅力や、厚真町だからこそ得られる価値が積極的に語られていたことが印象的だった。番組ＭＣの鈴井さんの「都会ではなく田舎で暮らすことの価値は何か」という問いに対して、ハスカップ農家の山口さんが「小さい町だからこそ頑張りが見つけられ、認められやすい」と答えていた。仕事の価値を他者に認めてもらうことは誰しもが持つ本質的な欲求であるが、大都市の大組織の中で働いていると、誰のために、誰に向かって仕事をしているのかが往々にして分かりにくくなる。田舎ではやりがいや人から認めてもらえる仕事がしやすいということで、地方や都市という枠を超えた新しい働き方の模索にもつながるのではないかと感じた。また、規模が小さく目立たないかもしれないが、あつま元気クラブや中高生のための勉強会などの活動や立ち上げた人たちのことばも非常によく、あつま元気クラブの村上さんの「きょうも頑張った」という運動が終わった瞬間の元気のよいひと言は心に残った。「地震後に町に移住する若い世代も徐々に増えている」というナレーションがあったが、地方都市に若い世代が移住するというのは興味深く、貴重なことであり、その理由を紹介してもよ

かったと思う。

○　地域プレーヤーの一人として感慨深く番組を見た。震災によって大変な苦境に立たされながらも、皆で協力し、一人一人が“自分に出来ること”を模索しながら、この４年間でしっかりと復興につなげた地域の人たちの底力に深く感動を覚えた。ハスカップ農家の山口さんの「復興とは元に戻すことではない。未来につながったり、さらに先に進めていかなければ本当の復興にならない」ということばは心に深く残った。あつま元気クラブで体操を教える村上さんの「きょうも頑張った」というひと言からは、何気ない日常の積み重ねが未来へとつながる一歩になるという励ましを受けたように感じた。また、中高生のための勉強会を取り上げていたことも大変興味深く、町の子どもたちにしっかりと希望を持って未来をつくり上げてほしいというメッセージが、「花は咲く」の音楽も相まって非常によく伝わってきた。復興ということばは震災にとどまらず、コロナ禍、人口減少や地域衰退といった重要な課題が含まれる中で、厚真町でベンチャー企業を立ち上げた成田さんは地域プレーヤーとして地域活動に取り組むモデルであり、その活動からは地域に対する愛情が感じられた。厚真町まちづくり推進課の人が「公助だけでは地域は成り立たない」と話していたように、公助や共助ということばは地域活動に携わる中でよく耳にする。以前は公助の役割の大きさが重要視されていたが、この番組を通して改めて地域を支えるのはコミュニティ、つまりは共助であると感じた。ＮＨＫでは、タテの関係の親や先生、ヨコの関係の友だちには話しにくいことを打ち明けることができるナナメの関係を目指す番組「＃ナナメの場」も放送しており、公助から共助へというメッセージを発信しているのではないかと感じているが、これからの時代に必要な「課題を解決するためのコミュニティの育成」というメッセージを受け止めた番組だった。

○　胆振東部地震から４年の厚真町の歩みを振り返り、住民の底力や小さな町の可能性に触れることができる内容だった。町の主力産業は農業だが特産品がないという中で、ハスカップ農家の山口さんが、母親から受け継いでこつこつと育ててきたハスカップをリンゴ並みの糖度に品質改良するという信念や粘り強さに感嘆した。町の特産品にするために 100 軒以上の農家にハスカップを広めて、生産量が日本一になるまでの道のりは本当に地道で尊いものであり、このようなバイタリティーの持ち主だからこそ、地震後も立ち止まることなく、「復興とは元に戻すことではない。未来につながったり、さらに先に進めていかなければ本当の復興にならない」という発想で歩んで来たのだと感じた。あつま元気クラブを立ち上げた社会福祉協議会元職員の村上さんや、中高生のための勉強会を立ち上げ、子どもの居場所作りに取り組む上道さんなど、課題意識を持って主体的に活動している町の人たちの存在に強く引かれた。中でも、地震後に移住してきてベンチャー企業を立ち上げた成田さんの活躍は、コミュニティス

ペース「イチカラ」の存在価値と相まって非常に印象的だった。地域の課題解決を目的とした新たなビジネスモデルを作るために、他の世代の住民や行政と一緒に取り組む様子を私自身の活動と比較しながら関心を持って見た。困りごとを地域で解決するために住民同士で助け合う会員制の仕組みというのはあるが、厚真町のように、より小さな規模の顔が見える関係性の中で有機的につながり助け合う仕組みというのは、独自の工夫があるのではないかと感じた。行政との関係においても、厚真町まちづくり推進課の方の「公助だけでは地域は成り立たない」ということばがあったように、住民の課題解決のためのパートナーシップがうまく機能していると感じた。成田さんが「ビジネスとは課題を解決して人々の笑顔を作ってお金をいただく仕事」と言っていたが、都会にはないまちづくりの可能性を感じて挑戦している姿は、町の人たちだけでなく、北海道の多くの人たちを勇気づけたのではないかと思った。番組後半の対談で、ハスカップ農家の山口さんの「ハスカップ部会は高齢だがやる気はぶっちぎり」、成田さんの「顔が見える関係性の中で高齢者と若者の接点が多く、お互いの得意分野を役割分担して、一緒に楽しく暮らそう」という話があった。お互いを尊重し合いながら、面倒なことも楽しみながら協力し合うという目的は簡単ではないが、そこにチャレンジする若くてバイタリティーのある人材がいて、そのような人材を地域が支えていけるかという点に大いに関心を持ちながら、興味深く見ることができた。田舎で暮らすことの価値として、チャレンジできる土壌があるということが挙げられていたが、北海道の小さな町には顔が見える関係性があり、まちづくりへの住民参加が活発という点で、共通の魅力があるのではないかと共感した。今後もさまざまな復興の形を取り上げることを期待したい。

＜放送番組一般について＞

○　ＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について、デモとは、参加者の自発的な意思に基づいて参加するものだと重々認識していると思うが、それが「お金をもらって動員されている」となれば、デモの根底が崩れる、つまり民主主義の根底が崩れるものである。それが、字幕にある「実はお金をもらって動員されていると打ち明けた」ということが事実であれば、非常にニュース性が高いのではないかと思う。しかし、本当にＮＨＫやＢＰＯの調査結果にあるような、“初歩的なミス”というようなものなのかというのがふに落ちない点である。この字幕を出したことに意図的なもの、恣意性はなかったのかということが、今回の問題の本質だと考える。意図がなかったということを証明するのは非常に難しいが、この番組の制作担当者が「意図はなかった」と言っているからというだけで意図がなかったと判断しているのだとしたら、十分な調査を行ったとは言えないのではないか。また、その点が

疑われているという認識をＮＨＫが持っているのかというのも気になっており、認識できていないのであれば、ＮＨＫの組織としての体質的な改善に取り組むことや、視聴者と同じ目線で物事を考えられるような組織にするためにどうするかということにも踏み込んでほしい。

（ＮＨＫ側）

意図があったのではないかと思うのは当然であり、ご意見、ご指摘を受け止める。ＮＨＫの詳細な調査では、意図があったということはなく、あいまいな情報をもとに、裏付け取材やチェックが十分行われず、誤った内容で放送したというのが実態である。意図がなかったということで、ＢＰＯの意見書にもある「デモや広い意味での社会運動に対する関心が薄かった。民意の重要な発露としての市民の活動に真摯な目線を向けるべきだった」という基本ができていなかったということであり、これはより深刻な事態であると受け止めている。

（ＮＨＫ側）

今回の問題は、お金をもらって五輪反対デモに参加しているということが事実であれば、民主主義が健全に成り立っているところを侮辱する重大な出来事である。北海道の視聴者に放送を届けるに当たっては、慌てて、あるいは時間に追われて十分に取材や制作に時間をかけることなく放送するのではなく、十分な時間をかけて、本当に伝えたいことや伝えるべきことを精査して放送することを心がけており、これからも心がけて取り組んでいきたい。

○　７月２９日(金)の北海道道「電気代高騰…どうなる！？北海道のエネルギー」を見た。番組冒頭で身近なまちの声を取り上げて視聴者に共感を訴え、そこからウクライナ侵攻へと場面を移すことで世界へと視野を広げ、自分の生活から世界へと切れ目なくつながっている問題をふかんして見せていた。その上で、自分たちが進む道を、スタジオゲストの北海道大学准教授の原亮一さんが実態に即したことばで分かりやすく浮き彫りにして解決の糸口を探る内容になっており、スムーズに疑問に答えていくという番組構成が非常に分かりやすい印象を受けた。最近は教育にＳＤＧｓが組み込まれるようになっており、温暖化の解決に向けて、私たち大人も未来の地球のことに無関心ではなく、関心を持って動いているという姿勢を子どもたちに見せていくことが非常に重要だと感じている。再生可能エネルギーは脱炭素と言われ、太陽光発電や

洋上風力発電の便利さや経済的効果が注目されるが、課題として自然界に与えるインパクトがあることにも触れてほしかった。洋上風力発電は景観や騒音への影響が比較的小さいとのことだったが、海底から海面まで海洋環境と生物は切れ目なくつながっており、設置場所によってはその連携を断ち切る可能性があることに配慮しつつ事業を進める必要がある。何かのために何かを犠牲にするのではなくともに成り立つ方法を探ってほしい。再生可能エネルギーは大切だが、前のめりになり過ぎないように客観的課題や問題点についても注意喚起するような番組も放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

再生可能エネルギーの課題というと、費用面が実用化に向けての大きな課題だと思われがちだが、特に北海道はこれから再生可能エネルギーが広がっていく可能性がある中で、自然界への悪影響についても取り上げていきたい。

○　８月２５日(木)の「ほっとニュースぐるっと道東！」を見た。帯広三条高校の高校生たちが取材・制作した、ＮＨＫ杯全国高校放送コンテストのテレビドキュメント部門の優勝作品「Ｓａｙ」を全編放送していた。この作品を取材・制作した高校３年生から「ＡＬＳの母親の生理の介護を同級生の高校生の息子がしていることや、症状の不条理さに母親が涙を流すシーンなどを本当に使わせてもらっていいのか悩んだ。しかし、私にできることはドキュメントとして２人のありのままを伝えること」ということばを聞くことができたのはよかった。放送後のスタジオで、赤松俊理アナウンサーが親の立場から高校生の奮闘をたたえる温かいコメントをしており、このコーナー全体が心温まる内容になっていた。

○　８月２６日(金)の北海道道「探検！北大の“広すぎる研究所”」を見た。北海道大学の静内研究牧場で行われている研究は知らないことも多く、興味深い内容だった。ナレーションや挿入されるアニメーションが軽快で、途中のいろいろなハプニングも含めて科学番組というよりはエンターテインメントの要素が盛り込まれていたのでが、楽しく見ることができた。番組ＭＣの鈴井さん自身が森を所有していることもあり、非常に楽しんでいる様子が伝わってきた。大学の研究や研究所をこのような楽しい雰囲気で取り上げることについては、さまざまな考え方や意見があると思うが、個人的には好感を持った。「おもしろい」ということは重要な要素であり、案内役の北海道大学静内研究牧場長の河合正人准教授が「興味を持っていただく、知っていただく、見ていただくというのが大学の役割である」と言っていたように、国立大学の運営経費は国費も含まれ、北海道の広大な土地を占有しているということからも、その資源を使って何を行っているのかを社会に積極的に公開し、関心を持ってもらう責任

があると考える。社会変化のスピードが非常に速い現代において、どさんこにささを食べてもらうという研究のように、どのように役に立つか分からないが、取りあえずおもしろがって追究する姿勢が求められており、それを伝えることが現代の大学の役目だと考える。その点で、番組の本筋からは外れてしまうが、番組ＭＣの多田萌加さんが増水した小川を渡った際に鈴井さんが「何か趣旨が分からなくなってきた」と楽しそうに言っていたのが実は本質であり、趣旨や目的を忘れて楽しんでしまう姿勢というのが重要なのではないかと思い、それを番組で伝えていたのはよかったと思う。

○　８月２６日(金)の北海道１００年都市ものがたり「札幌・函館・小樽」(総合 後 7:57～8:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)と、９月２日(金)の「旭川・室蘭・釧路」(総合 後 7:57～8:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。「札幌・函館・小樽」は、市となってから 100 年目を迎える各都市の発展の柱となった運河や豊平川や北洋漁業を中心に、始まりから発展、転機、未来への展望という統一した流れを作り、豊富な資料とゆかりの人々の両方でそれぞれのまちの話に命を吹き込む短編仕立てになっており、楽しく見ることができた。過剰な開発や自然資源の利用に頼った発展はしょせん長続きせず、自然資源を大切に活用しようというところに帰っていくという番組構成には安心感を覚えた。函館の漁業者や豊平川の保全に取り組む人々に共通するのは、自然あっての人でありまちであるという自然回帰の視点で、これからの 100 年に光を与えてくれるのは自然との共生だということを改めて感じた。「旭川・室蘭・釧路」では、写真家の小森学さんが３つの都市で撮影しながら、その都市の人たちの話を聞いていた。「人を撮ることで、そこから見えてくる歴史のつながりとこれからの未来のつながりを感じた。まちというのは人の集まりというか、人なのだ」という感想は非常に納得できる大切なことだと思った。二つの番組を通じて、豊富な映像と写真でまちの歴史をひもときながら、この 100 年の光と影、そして次の 100 年を見渡すことができるすばらしい企画だった。いずれのまちもそれぞれに特徴があり、北海道の発展を担ってきたことが分かったが、まちの発展をけん引してきた要素がある時を境にどのように変わって、没落や災いを招くことになったのかという、光と影が転じる世のことわりを見ることもできた。一方で、自分たちのまちの歴史や現在をより広く深く知れば、それは未来を作る礎となることも再確認できた。函館と釧路は「ＡＩ」、札幌は「自然回帰」、旭川は「人」、小樽は「歴史の再発見」と、それぞれに過去から学んで脱却や転換を図る未来を目指していて、人や自然などを中心に捉えて、「新たな 100 年を」というように明るく前向きな印象を受けた。一方で室蘭はあまり未来を感じることができない、もやっとした埋没感を受ける内容であり、地元の住民として不安を感じるとともに考えさせられるものだった。

○　８月２６日(金)と９月２日(金)の「北海道１００年都市ものがたり」を見た。100

年を振り返るという趣旨から、過去の話や映像に頼った演出になるだろうと思っていたが、函館の水産缶詰加工の映像などは昔の様子がよく分かる非常に貴重な映像であり、高い関心を持って見ることができた。函館は北洋漁業の前線基地として栄えた話が中心だったが、なぜ北洋漁業の基地になったのかというところも掘り下げて説明すると、深みが出たのではないか。札幌では、豊平川にサケが再び帰ってくることを目指した「カムバックサーモン運動」のように有名な話もあったが、地元でも知らないような、鴨々川水門や中島公園の池が木材を貯蔵するためのものだったという話は興味深かった。札幌では産業として札幌麦酒（ビール）醸造所を紹介していたが、一転して、小樽は運河をめぐるまちの人たちの運動という、まちづくりに特化した話になっていた。小樽は山と海が非常に近いという特徴があり、北海道でも有数のスキーのまちなので、スキーの歴史も交えると個性がより出たのではないかと感じた。旭川は買物公園を取り上げていたが、昔は「師団通」と呼ばれていたのが「平和通」になったという話はよく知られており、新鮮味が感じられなかったのは残念だった。買物公園は以前と比べて店舗が減り、飲食店ばかりになっているという変貌ぶりなども取り上げてほしかった。室蘭は、戦時中の米軍戦艦が攻撃する映像は室蘭の歴史において印象に残るものだったが、石炭の積出港として栄えたこともあり、かつては先進的なまちだったという姿もあれば、より印象づけることができたのではないかと思った。近年、製紙業などの産業が衰退している釧路について、新しい取り組みとして酪農を取り上げていたが、釧路と酪農がなかなか結び付かない印象があり、釧路自体の将来なのか、釧路周辺も含めて発展していこうとしているのかを明示しながら紹介してほしかった。全体的には、各都市の 100 年間をそれぞれ短時間でよくまとめていて、「札幌・函館・小樽」では案内人として石川啄木を登場させるなどの工夫もあり、おもしろく見ることができた。

○　９月２日(金)の北海道１００年都市ものがたり「旭川・室蘭・釧路」を見た。市制施行 100 年のそれぞれのまちの歴史は非常に興味深いものであり、その一端を知るきっかけとなった。写真家の小森さんが、それぞれの都市の当時を知る年配の人たちを温かい思いとともに撮影していくのもよかった。旭川の買物公園は日本で最初の恒久的歩行者専用道路であり、その挑戦は実験的に行った１２日間だけの歩行者天国がきっかけで始まり、その後の道路交通法の改正にもつながったという、元市役所職員の杉尾昇さんの話は大変興味深かった。まちの皆さんが非常に元気で、熱い思いでまちのことを語っていたのも印象的だった。室蘭の堀田繁雄さんが米軍艦隊の攻撃を受けた生々しい戦争体験を語っていたが、二度と起きてほしくないと思わずにいられない話だった。釧路港の映像からは、大量に水揚げされたり、人があふれていた高度成長期のにぎやかだったころがしのばれて、懐かしい時代にタイムスリップしたように感じられた。また、北海道出身の土田玲央さんがナレーションを務めていたのはふさ

わしい人選だと思い、大変心地よく聞きやすかった。

○　８月２９日(月)の「ほっとニュース函館」を見た。視聴者の身近な疑問・悩みを調査するという新コーナー「道南の声、受信中！」の１回目のテーマは「函館はなぜ塩ラーメンなのか？」として、函館の塩ラーメンのルーツを探るという、函館地域の方々であれば当たり前に感じていることをあえてテーマにした内容だった。長年、函館の塩ラーメンのルーツは名産の昆布だと思っていたが、実は函館に在住した華僑の方々の影響であるということを知ることができた。地域の歴史やルーツを知ることができる番組として勉強になり、いつも興味深く視聴している。このコーナーの今後に期待したい。

○　９月１６日(金)のプロ野球２０２２「オリックス」対「日本ハム」(総合 後 6:00～9:53 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。日本ハムのビジターの試合を中継していたが、札幌局のスタジオに子どもたちを招いて、解説の田中賢介さんが質問に直接答えるなどしながら放送していた。野球少年たちが率直に質問していたり、二画面にしてランナーやコースだけを映すという試みも興味深かった。バットなどの選手の用具を実際に比べながら解説するコーナーはなかなか見ることができない貴重な機会だった。田中さんの解説は的確で端的に要点を話しており、落ち着いて騒がしくないところも非常に好感を持っている。来季は日本ハムのホーム球場が新しくなるが、どのような中継を見せてくれるのか期待している。

（ＮＨＫ側）

放送事業者として、テレビ・ラジオを見聞きして楽しんでもらうことは大事だが、見る・聴く以外のＮＨＫの価値も提供していきたいと考えている。放送局に来てプロ野球を楽しんでもらったり、横に座っている人と語る場を提供することで、ＮＨＫのよさが広く共有されることを意識しており、今回のプロ野球をはじめ、５月に実施したラグビー、１０月に予定しているブレイキンなど、このような体験を広げる活動に取り組んでいきたい。

○　９月１６日(金)の東北ココから「『個』を伸ばす組織とは～全国優勝　仙台育英の育成術～」(総合 後 7:30～7:57 仙台単)を「ＮＨＫプラス」で見た。今年の全国高校野球選手権大会で優勝した、仙台育英高校硬式野球部の須江航監督の人材育成術を取り上げており、仙台育英高校が東北勢として初めて全国制覇したということと、須江監督の優勝インタビューの「青春は密」ということばが非常に印象的だったので、ど

のような育成術なのかに注目して興味深く見た。選手の育成や選考方法は非常に個性的で、緻密なデータを集めたり、選手を５つのタイプに分けて、それぞれの数値を達成することを目標にしていたことが分かった。優勝後の宿舎で、須江監督が離れた場所にいる部員もオンラインでつないで、ベンチ入りしていない部員も含めた全員に対して「優しさは想像力である。みんなが人それぞれのことを思ってくれて想像してくれたからこその日本一だ。言わなくても分かっていると思うが、１８人のメンバーだけで日本一になんて絶対になれなかった」や「次のスタートをきっちり切ってほしい。これが人生のピークになるのはつまらない。でも甲子園というのは達成感が大き過ぎて、そういうことがあるのも事実だ。次への意欲や目標を見失ってはダメで、早く次の目標を見つけよう」と選手をたたえると同時に、次へのスタートについてのことばをかけておりすばらしいと思った。全国制覇の後に目標を失ってバーンアウトしてしまう選手が過去にいたと思うが、指導者のことばによって、選手たちが人生の次の目標をしっかり描くことができれば、今後の高校野球の指導に変化が起きるのではないかと予感させる番組で、ぜひ全国の指導者に見てほしいと思った。

○　７月２２日(金)と９月２日(金)のあさイチ「プレミアムトーク」を見た。７月２２日は夫婦で活動する絵本作家のｔｕｐｅｒａ　ｔｕｐｅｒａの特集で、作品の魅力や絵本にとどまらない創作活動や妻の中川敦子さんの子育てと仕事のはざまで苦悩した経験などを知ることができたのは非常に見応えがあり、ファンにとっては作品への愛着が一層増したのではないかと思う。子どもも大人も生活の中に絵本がある。そのきっかけとなるように、これからも絵本の話題を取り上げて情報発信してほしい。９月２日はコスチューム・アーティストのひびのこづえさんを特集していた。「にほんごであそぼ」でタレントのＫＯＮＩＳＨＩＫＩさんが着ていた非常にインパクトのある衣装がスタジオに飾られており、この衣装を作った人なのかと見入ってしまった。テレビＣＭや劇作家・演出家の野田秀樹さんの舞台、ダンスパフォーマンスなどの衣装を紹介していたが、個性的な衣装によるひびのさんの表現の世界が非常にすてきだと感じた。「あさイチ」の「プレミアムトーク」はタイトルどおりに、たっぷりとプレミアムな情報に触れて豊かな気持ちになることができるので、これからも見たいと思う。

○　８月１２日(金)と１４日(日)のドキュメント７２時間「歴代ベスト１０スペシャル視聴者投票　歴代１０～１位」を見た。300 回以上の放送の中から選ばれた 10 番組を並べてみると、一人一人が異なる人生をその人なりに、楽しんだり、もがいたりしながら歩んでいる姿が映し出されていて、励まされた。作り込まないよさ、「事実は小説よりも奇なり」だと思った。スペシャルな一日よりも、何でもない日常ワンシーンが大切に思えるという趣旨の司会の山田五郎さんの発言も非常に印象的で、今後もぜ

ひ見続けたいと思う番組である。

○　８月１４日(日)の日曜美術館「ウクライナ　子供たちの１０００枚の絵～北海道・巨大じゃがいもアート館～」を見た。世界中の 150 か国の子どもたちの絵がじゃがいものオブジェと一緒に展示されているが、アート館を作った現代美術家の浅野修さんが自身の戦争体験を通じて、平和を願う思いや子どもの絵に優劣をつけることは不可能という考えがベースにあってこのアート空間を作り出しているということが非常に深く理解できた。ロシアによるウクライナ侵攻下にあって、ウクライナの子どもたちの絵をクローズアップして、現地の今の子どもたちの状況や、恐怖や悲しみが表現された絵の紹介などもあって、アート館が世界へとつながる奥行きのある場所に変わっていった。番組を見た後、改めてアート館に足を運んだが、ウクライナの子どもたちの戦争以前の絵と比べて見ることができ一層胸を打った。また、ロシアの子どもたちの絵とも並べられており、深く味わうことができて、こんなにも価値のある活動の拠点になっていたことに驚いた。この番組が、アート館への興味や関心を喚起する役割を担ってくれたと思う。

○　９月２日(金)のドキュメント７２時間「“どろんこパーク”　雨を走る子どもたち」を見た。川崎市にある、プレーパークと呼ばれる遊び場「子ども夢パーク」が舞台で、子どものやりたいことが尊重されて禁止事項がほとんどない施設が、子どもが意欲や自信をつけたり、社会性を育む場として関心を集めているということで、強い関心を持って番組を見た。子どもたちのはじけるような笑顔や好奇心いっぱいの瞳の輝き、思わず巻き込まれる番組ディレクターの姿を見ながら、多くの視聴者が大人や社会の固定観念を見直して、子どもの育つ場所への理解を深めたのではないかと思った。子どもたちが安心して生きる権利、自分を豊かに力づけられる権利などを保障するための施設として注目されており、今後もこのような先駆的な取り組みを取り上げて、発信していってほしい。

○　９月１２日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「駅の音を“見える化”　ユニーク装置に反響」というリポートを見た。駅のアナウンスや電車の音などの環境音をＡＩが識別して、動きのある文字や手話などで情報を表示する装置による実証実験を行っているという内容で、音声認識をはじめとしたテクノロジーが進展しているということで、非常に意義深いことだと思う。この装置を見た聴者が「かわいくて楽しくておもしろくて、立ち止まって見てしまった」、「全国の駅で導入されるとよい」と言っていたが、この技術が耳が不自由な人のためだけのものではないということを表しており、このようなメッセージをきちんと取り上げて紹介する姿勢は本当に大事だと思った。

○　９月１９日(月)の「生中継　エリザベス女王国葬～愛された９６年の生涯～」（総合 後8:15～8:55)を見た。エリザベス女王の国葬という歴史上の大きな出来事、瞬間をリアルタイムで見たが、現地にいる知人がつぶやいているＳＮＳを見ながら、同時に中継番組を見るという貴重な体験にもなり、非常に強い印象を受けた。生中継とＳＮＳの連動は、視聴者がリアルタイムで参加できたり、友人とやり取りしながら番組を視聴するという醍醐味があり、よい体験だと感じた。テレビなどのメディアには生中継に価値があり、ニュース、気象情報、スポーツなどはＳＮＳとの親和性もあるので、このような体験が増えていけばメディアのおもしろさが広がるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

エリザベス女王の国葬については、総合テレビで後 7:00 から 10:00 まで「ＮＨＫニュース７」、「生中継　エリザベス女王国葬～愛された９６年の生涯～」、「ニュースウオッチ９」で生中継を交えながら放送した。ＢＳ１では後 6:00 から、ＢＢＣの番組や専門家による解説などを交えた「イギリス　エリザベス女王　国葬」を放送し、イギリスではどのように伝えられているかという、総合テレビとは違った視点で国葬を伝えたほかＢＳプレミアムでも後 9:00 から映画「英国王のスピーチ」を放送するなど、多角的な伝え方をした。テレビ離れやＮＨＫの番組が届いていないと言われている中で、ＮＨＫのテレビ視聴に戻ってきてもらうために、ＳＮＳを効果的に連動するなどして付加価値を高めることを考えていきたい。

○　９月２０日(火)のハートネットＴＶ「響き合うふたつの言葉　“手話怪談”制作舞台裏」を見た。俳優の白石加代子さんと５人のろう者が怪談という一つの作品を作り上げていたが、音声言語と手話言語が織りなす独特の世界観を大変分かりやすく取り上げており、聞こえる人も聞こえない人も一緒に楽しめる番組になっていた。「ハートネットＴＶ」は障がい者を同情の対象としてではなく、対等な立場として描いており、世間一般の一歩も二歩も先を行っている番組だと感じている。今回の「響き合うふたつの言葉」というタイトルも、手話言語を「言葉」と言い切っており、本来そのように考えるべきものだと思う。「ハートネットＴＶ」はこのような姿勢を変えずに番組制作を続けてほしい。

○　９月１６日(金)の【連続テレビ小説】ちむどんどん（１１５）「にんじんしりしりー

は突然に」を見た。番組冒頭で三郎夫妻とアッラ・フォンターナのオーナーの房子が３人でお酒を酌み交わすシーンがあったが、過去に行き違いがあり、思いを残しながらも一緒になれなかった三郎と房子が、長い年月を経てわだかまりが解けて、再び和やかな時間を過ごせるようになったこと、そして三郎の妻も一緒に３人で笑顔でいられるというのは、年を取ることに楽しみが期待できるというような、朝から心を動かされる内容だった。その後の三郎が寝てしまったシーンでは、３人のやり取りをもう少し見たい気もしたが、酔いが回って寝たふりをしていたのではないか、三郎の心境はどんなものか、居心地がよいような悪いような何を話せばいいのかという気持ちなのかなど、いろいろと想像が広がる場面だった。「ちむどんどん」は沖縄本土復帰５０年の年に放送される番組として、過剰な期待がある中で番組の描き方に物足りなさを感じる部分もある。「にんじんしりしりーは突然に」や「ゆし豆腐のセレナーデ」などのサブタイトルは 1990 年代のラブソングのタイトルを思い起こさせ、隠された意味があるのかと思いながら楽しんだ。

○　９月２５日(日)放送予定の新・ＢＳ日本のうた「熱唱！旅情そそる北海道の名曲！細川・新沼・神野・市川」は、８月２５日に七飯町文化センターで収録した回で、新型コロナウイルスの感染拡大以降、このように地元の会場に多くの観客が集まるイベントはなかなか行われていなかった。全国各地で公開収録を行うことで、地元の人たちに歌手やＢＳ日本のうた楽団によるプロの歌唱や演奏の生の迫力を届けたり、放送でその地域のよさを紹介するという、地域応援の貴重な機会を設けているのは非常にすばらしいことであり、細川たかしさんをはじめとした北海道出身の歌手が出演することも嬉しく感じた。地方に住んでいると、情報や文化芸術に触れる機会は少なく、特に物理的にも身体的にも行動範囲を制限せざるをえない高齢者には、生のプロの演奏に触れる非常に貴重な機会だと思う。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「“開拓写真”北海道の歴史を読み解く」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、８月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	今村　江穂	（認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長）
委　員	伊藤　翔太	（株式会社トリプルワン　代表取締役）
	乾　ルカ	（小説家）
	金山　準	（北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授）
	倉本ひと恵	（オホーツクベーグル　代表）
	笹森　琴絵	（酪農学園大学　農食環境学群特任准教授）
	清水　貴子	（地酒のまるしん商店　店長）
	鍋谷　雪子	（株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役）
	西田　一博	（有限会社厚岸清掃社　代表取締役）
	西村　卓也	（北海道新聞社　論説主幹）
	船山　大介	（特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長）

（主な発言）

＜北海道道「“開拓写真”北海道の歴史を読み解く」
（総合　６月１７日(金) 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　“開拓写真”は、北海道開拓事業という国の重要施策の進捗を明治政府に報告するために、開発を担う国の機関である“開拓使”が撮影したことに始まると知り、大変勉強になった。明治２２年の函館港の写真はにぎわいの様子がとても鮮明で驚いた。まだ未開でこれから作る土地を広く見渡すことができるように、複数の写真をつなげ

る“パノラマ”の手法を用いて北海道の開発を国内や海外に示していたことからも、国の重要事業であったということがよく伝わってきた。番組ＭＣの多田萌加さんが体験する形で写真がどのように撮影されていたのか再現していたが、当時の技術力の高さが分かりやすく示されていた。屋外での作業風景の撮影も再現できると、当時の工夫や苦労がさらに分かってよかったのではないか。また、番組後半でアイヌの人たちの暮らしについて紹介されていたが、開拓によって生活の変化を強いられ、苦労が絶えなかったことも改めて知ることができた。アイヌの人たちがなりわいとしていた、イワシなどを加工して作った“干鰯（ほしか)”の作業場や作業工程が撮影された写真が目を引いた。開拓時代などの過去の写真から読み取れる情報からは、現在の北海道の暮らしや文化との密接なつながりが感じられ、当時の開拓者やアイヌの人たちの積み重ねが現在の繁栄や豊かな生活につながっているのだと思い、過去の写真というものに注目していきたいと思った。

○　開拓写真から北海道の歴史を読み解くというのは新鮮な切り口であり、北海道では“開拓”ということばに強いシンパシーを感じるので、テーマとしても非常によかった。昔の写真の撮影方法と今のデジタルとの違いを分かってはいたが、デジタル技術の発達によって、当時の写真の原板に含まれる細かな情報を読み取れるようになったとのことで、写真に関する技術がどれだけ向上しても昔の素材は非常に価値があると感じた。番組では開拓写真を切り口に歴史をなぞっていたが、写真にまつわる人などをそれぞれ掘り下げてほしかった。また、アイヌの人たちの写真も紹介していたが、なぜそのような写真が撮られたのかなどもふに落ちないままで終わってしまったので、もっと深く聞きたかった。

○　この番組を見て、当時の暮らしや産業の様子を記録に残すということの重要性、歴史が積み重ねられて今があるというつながりとストーリー、北海道開拓の史料を残すための写真技術の発達などが非常に印象に残った。開拓者を増やすＰＲ活動のために撮られた開拓写真では、１枚の写真にいろいろな人たちの作業を凝縮して写しこむために、実際には作業しないような近い距離感で木を切り倒したり、開墾するという不自然さや違和感があるという紹介があったが、人にものを伝えたり、見せ方を工夫するという考え方については時代を経ても変わらない普遍的なものだと思った。そして、写真は北海道の開発を記録し、その意義を広く知らしめるために必要で、国の大きな投資が行われたとのことだったが、開拓の最前線を伝えるという目的を果たす一方で、写真技術の発達などの付随したものをもたらすことで、後の産業や地域を支えることにつながっていると深く感じた。北海道で暮らす人々が何を思い、どのような価値観の中で生きていたかということを知るうえで、非常に参考になる番組であり、今後もこのように地域の歴史や人々の様子を知ることができる番組を積極的に制作してほ

しい。

○　開拓写真とは“北海道開拓時代に撮られた写真”という認識だったので、国の重要政策である開拓使の事業進捗を報告するために撮影されたものだということにはなるほどと思わされた。また、国からの報酬を得て撮影されたものだという背景の紹介は番組として外せない要素だったのではないかと思った。開拓写真は“当時の日本最初のドキュメンタリー写真”と言いながらも、そこには作られたものがあるという、ある意味で告発や啓発であり、私たちは開拓写真が開拓期の事実そのものを写し出していると安直に受け取ってしまいがちになるので、よい教訓になる番組だった。後半のアイヌの人たちが被写体となった観光写真を扱ったパートも見応えがあった。正装する場面ではないのに正装している不自然さや、農作業をしている女性の持つ農具が木製である不自然さなど、作為的な部分を的確に指摘しており、写真師ではない人が撮影した、アイヌの人たちの開拓が本格化する前の自然な姿を写した写真と対比する見せ方もよかった。スタジオゲストの元北海道開拓記念館学芸部長の関秀志さんの「残っている写真だけで北海道の開拓の全体像を捉えることはできない」ということばには学びがあった。開拓写真を例に、一見すると事実を伝えているようでありながら、もしかすると特定の意図によってそれがゆがめられているかもしれないという、ある種、マスメディアの自己批判的なものを内包しているのであれば、番組を制作した価値があるのではないかと思った。当時の撮影技術を実際に再現するのもおもしろかったが、開拓写真を数多く見たり、撮影された場所の当時と現在の比較なども見てみたかった。この番組で開拓写真に興味を持った人が、この後どうしたらより多くの写真に出会えるかという、次への扉が提示されているとよりよかった。

○　幕末から明治の函館をテーマとした当時の写真や資料の展覧会で、来場者が「昔ながらの技術でないと撮れないもののほうが、ぐっとくるものがある」と言っていたように、この番組の背景には、レトロな趣のものが新鮮に感じられるという現在の社会的文脈があると思う。一方、開拓というのは非常にデリケートで難しいテーマで、レトロ趣味という見方だけではなく、アイヌのような先住民にとっては侵略とも言える政治的なテーマをはらんでいるという懸念を持っていた。番組では写真そのもののおもしろさや貴重さだけでなく、後半でアイヌに対する扱いを取り上げるなど、その写真が持つ政治的、社会的な含意といった負の側面にもしっかり触れており非常にバランスが取れていたと感じた。開拓写真が北海道開拓という国の事業を内外に広く知らしめるために撮影された国の事業そのものだったのに対し、アイヌの写真は観光地で販売されていた土産品の“観光写真”という性質が異なるものであるため、開拓写真という大枠からは外れているのではないかと思う。１枚１枚の写真は非常に貴重なものであり、それぞれを深く掘り下げるだけの情報量があると思うと、開拓写真と観

光写真を別の番組として取り上げたほうがよかったのではないかと感じた。あえて開拓写真と観光写真の２部構成にした制作の意図を知りたい。

（ＮＨＫ側）

“開拓”ということば自体がセンシティブなものであり、アイヌとの関係も踏まえたうえで番組制作に臨んだ。今回は開拓写真がテーマであり、北海道開拓の進捗を政府に報告するための国家事業として始まったということを打ち出して番組を進めた。当時の写真撮影を体験するという視聴者を引きつける演出を入れることによって、開拓写真が国家事業であるということを詳しく表現する部分が薄くなってしまった。開拓写真と観光写真は明確に切り分けて考えており、番組後半の観光写真のパートに入ったところで、アイヌについて取り上げる構成とした。

○　日本で写真の撮影が可能になってきた時期と重なるように、北海道の開拓が進められたことから考えると、さまざまな事業工程や街が出来上がっていく様子が克明に記録されているのはかけがえがなく、この貴重な写真をどのように活用し継承できるのかということに関心が高まった。政府の意図を酌んで撮影された写真だけでなく、撮影者の自由意思で写した当時の人々の自然な姿をもっと見たいと思った。アイヌのイメージが作為的にゆがめられていたということが取り上げられていたが、どういう意図があったのかなど、その背景を詳しく知りたかった。

○　冒頭の重厚な作りに非常に好感を持った。また、オープニングで番組内容をダイジェスト的に紹介する手法を効果的に使うことで、視聴者を引きつけることができ、短尺番組に慣れている若年層も視聴しやすいのではないかと思った。当時の撮影方法を再現して丁寧に取り上げており、それが深い理解と興味につながった。また、切り取り方一つで受けるイメージを操作できてしまうという、写真の負の側面を紹介する一方、当時の北海道を知るうえでの貴重な手がかりになっているとも紹介されており、自分に都合のよい情報だけを信じてしまう傾向がある昨今において、学ぶべきことが多い番組だった。

○　国家の一大事業を海外に紹介するために威信をかけて記録した、開拓写真という日本最初のドキュメンタリー写真があることを初めて知り、興味深く見ることができた。写真の中には、アイヌの人々を写した観光写真のように歴史をゆがめて伝えているものがある一方で、北海道を回る測量船でイギリス人との通訳をしていた野口源之助が

撮影した“野口写真”のようにアイヌの人々のありのままの姿を撮影して、本来の文化や歴史、生活を知ることができる写真もあるという指摘は印象深かった。国立民族学博物館名誉教授の大塚和義さんの「写真というのは単なる歴史の記録者よりもより記録している可能性がある」ということばには重みがあった。自分が目にしているものが決してすべてではなく、虚像であったり、目につかない部分やレンズのフレームの外にもまた真実があったりするということを心したいと思わされた。残った写真だけで全体像を判断することはできないが、重要な証拠になるというのも大切なことだと思った。スタジオゲストの関さんの「細部にわたって開拓写真をいろいろな角度から見直すと、北海道の当時の様子がよく分かる」というコメントからも、より真実に近い歴史を学び、探っていくことの難しさやおもしろさを感じた。自分なりに思考して真実に迫ろうとする物事の捉え方や取り組み方は、これからの日本の教育に必要だと感じながら番組を見た。開拓写真のように身近でなかったものを、視聴者がそれぞれの価値観で自分に引き寄せて見るということによって、実は人生を豊かにしたり、歴史や自然などを多角的な視点から捉えるようになるという重要な変化をもたらすのではないかと思った。今後も視野の外に埋もれている大切な物事を、視聴者の目の前に鮮やかに広げて見せてくれるような良質な番組を楽しみにしている。

○　開拓写真をこの番組で初めて知ったが、「北海道道」のコンセプトである「私たちはまだまだ、本当の北海道を知らない！」と今回の番組テーマが合致しているという印象を受けた。開拓写真が“開拓者を増やそう”という政府のＰＲ活動のための写真だという説明は非常に分かりやすく、政策決定者がこれらの写真を使って政策の正当性を政治的にアピールする意味合いが強かったのではないかと感じた。番組で取り上げられた写真がどこに収蔵されているのか知りたかったので、字幕で表示してほしかった。一方、アイヌの人たちの取り上げ方が気になった。開拓によって生活の基盤を失い観光地で働くことを余儀なくされたアイヌの人々を撮影し、道内各地の観光地でお土産として販売されていた観光写真の名前を「原始人類　アイヌ風俗」としているところから、明治政府や当時の人たちのアイヌに対する見方が非常によく分かるような気がした。今のアイヌの人たちの受け止め方が紹介されているとよかったと思った。また、日本のほかの地域でも、このように国内外にその土地をＰＲするような写真があるとしたら、北海道以外からの視点として加えることによって、より疑問に応えることができたのではないか。こうしたおもしろい視点から歴史を掘り下げる番組を今後も続けてほしい。

○　開拓写真を通じて北海道の歴史を読み解くという中で、当時撮影された写真自体に焦点を当てて番組が作られており、興味深く見ることができた。多田さんが明治時代の写真撮影を再現するシーンは大変おもしろく、興味深く見ることができ、当時の湿

板（しっぱん）写真という技法がいかに手間と時間のかかる貴重なものであったかということが理解できた。当時の写真にはパノラマが多いという印象を持っていたが、土地を広く見せることで、まだまだそこには広大な土地があるということを伝えようとする意図があったという説明や、開拓写真が日本最初のドキュメンタリー写真だという説明は非常に分かりやすかった。番組タイトルに「北海道の歴史を読み解く」とあったが、例えば札幌本道の建設の写真を紹介する際に“日本最初の本格的な長距離の馬車道”と解説していたが、どういうルートなのかなどの詳しい説明があると、写真の価値がより一層伝わったのではないか。開拓使や北海道などの時代背景の説明が薄かったために、１枚１枚の写真がそれぞれ点で終わってしまい、線でつながっていなかったように感じた。アイヌの人たちのありのままの生活の様子を写した“野口写真”からは、自分が住んでいる地域に改めて興味を持つことができ、撮影者がどのような思いを持って撮影したのかに思いをはせる機会になった。それぞれの地域にある歴史のうえに今の私たちの生活があると再認識するきっかけとなる番組だった。

○　開拓写真は国の機関である開拓使が事業の進捗を明治政府に報告するために撮影したもので、歴史的役割を担ったものだと初めて知った。また、デジタルカメラの普及によって、当時の撮影技術の高さが見直されていることも興味深かった。写真が撮影された背景を読み解く試みとして、復元された 100 年前の写真館を使用して実際に撮影を再現する様子は大変リアリティーがあり、当時の湿板写真の技術の確かさが視聴者にもよく伝わったのではないか。アイヌの写真について掘り下げていた点も非常によかった。アイヌの人々を撮影して、道内各地の観光地でお土産として販売されていた「原始人類　アイヌ風俗」という観光写真からは、アイヌの人々がいかに虐げられ、政府に従属させられていたのかが分かる歴史的な負の遺産だと感じた。一方で、野口源之助が撮影したアルバムには、開拓が本格化する前のアイヌの日常が写し出されており、その価値の大きさが伝わってきた。こうした背景を考えると、開拓写真だけで北海道の全体像を捉えることはできないと思うが、作為的、意図的な部分を見極め、細部にわたって見直すことで、北海道の歴史が新たに立ち上がってくるのだと共感できた。写真を通じて北海道の歴史を読み解くというテーマを十分に堪能できた番組だった。

（ＮＨＫ側）

写真というものは、見たままを信じるということでは足りていないということと、意図していない部分も写し出しているという、全く逆のことを一つの番組で伝えようとしたところが、難しくもありながら番組に複層的な厚みをもたらすことになったと改めて思った。写真の提供先や所蔵先については、写真を

じっくり見ていただきたいときに文字情報を表示したくないという思いとの兼ね合いが難しいと常々感じているが、番組で取り上げた写真をどこで見ることができるのかなどの問い合わせにはしっかりと答えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月２４日(金)の北海道道「廃村の記憶～鈴井・多田が金山跡で感じたものとは～」(総合 後 7:30～7:49.30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。番組ＭＣの二人が廃村となった鴻之舞を訪ね、鈴井貴之さんが「今は誰もいなくなっている場所だが、かつての住人や暮らしを想像するのは好きだ」と言っていたのは共感できた。旧上藻別駅逓跡所が資料館として運営されていることも初めて知り訪ねてみたいと思った。また、廃村になった滝上町上雄柏出身の方が、現存する当時住んでいた家を訪れて思い出を語るシーンからは、懐かしさと寂しさの入り混じった複雑な気持ちがよく伝わってきた。豊かな自然が残るふるさとが人の住まないまちになってしまうという現実を受け入れていかなければいけないと思ったが、290 もの廃村が身近にあることを知って驚いた。今後は廃校を利用して村の活性化に取り組むといった、北海道の未来に希望が持てる話題も取り上げてほしい。

○　７月１日(金)の北海道道「この先も私の“声”で～母と子の日々～」を見た。難病のＡＬＳを患っている主人公の女性が、母親として二人の子どもへ寄せる深い愛情が丁寧に描かれていたが、文字を打ち込むと自分の声で読み上げることができるソフトによって、声を残すことができた背景の描かれ方が弱いことに違和感を覚えた。「その人の聞き覚えのある声で語りかけられたときに、その声を知っている人にとってはことばの中身以上に意味がある」という支援者のことばは、当事者の家族にとって本当に切実だと感じた。多くの当事者にとって、進行する病気との孤独な闘いはつらく苦しいものであり、誰もが彼女のように周りに多くの支援がある恵まれた環境にはないのではないかと思った。もう一つの声という宝物を手にすることができたのは、決して彼女一人の力ではなし得なかったことであり、家族や支援者を取り上げることがないと単なる美談で終わってしまうと感じた。また、５月２７日(金)の「ほっとニュース北海道」で放送した、ブラインドサッカーに打ち込む帯広の女子高校生のリポートとも合わせて、誰もがその人らしく生きられること、それを体現できるような地域のコミュニティーがあることの大切さを痛切に感じた。社会のはざまで寄る辺ない人を包摂できる受け皿、場所や人のつながりの必要性を一層強く感じた。

○　７月２日(土)の０７５５ＤＤチャンネル「よみがえる『北斗星』　再出発への思い」(総合 前 11:31～11:36 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。引退した寝台特急「北斗星」の客車が北斗市で宿泊施設として再出発していたことに驚いた。思い出の詰まった北斗星に集う人々の笑顔や座席に腰かけていとおしそうに涙ぐむ姿、このように幸せな“余生”を送ることになった北斗星に感動を覚えた。歴史的建造物や文化的価値の高い建物を活用しながら保存していくという動態保存の取り組みが５分という短い時間の中によくまとめられていた。この番組を見て、実際に北斗星に泊まってみたいという視聴者もいると思うので、宿泊に関する情報があるとよかった。続いて、ぐるっと３６０°「＃タウシュベツ橋りょう編」(総合 前 11:36～11:37 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)では、上士幌町の幻の橋の荘厳な景色の映像に目を奪われた。北海道遺産「ピアソン記念館」(総合 前 11:37～11:40 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見たが、北見で育まれた社会貢献活動の歴史に触れることができ勉強になった。絶景！北海道「変わりゆく摩周湖」(総合 前 11:40～11:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)では、かつて世界一を記録した透明度が今では損なわれてしまったという調査結果から、北海道に関する新たな知見を得ることができた。連続して放送したミニ番組からも北海道について深く知ることができ、番組の質の高さの大切さを感じた。

（ＮＨＫ側）

「０７５５ＤＤチャンネル」は放送とウェブコンテンツが連動した実験的な番組であり、ＡＩ音声キャラクターのナレーションで、北海道ならではの自然、風土、文化などを５分間で届けている。北見市のカーリングや釧路市の毛綱建築、栗山町の高校の女子野球など、番組ディレクターだけでなく記者やイベント担当者、技術担当者などさまざまな分野の職員が多彩なラインナップで制作している。今後も短いながらも印象に残る、情報性の高いコンテンツを制作していきたい。北斗星の宿泊施設についての情報は番組ホームページへ追記したい。

○　７月９日(土)のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！選「札幌近郊でサイクリング」と１６日(土)の「支笏湖でファミリーキャンプ」を見た。北海道の魅力を最大限に伝えることができるコンテンツとして、サイクルツーリズムが注目されており、番組でも「北海道はサイクリングを楽しみやすい環境にある」と言っていたが、道が広くてきれいなことや、アクティビティーの動きの大きさと対比して自然の中の静けさが得ることができる美しさを、パノラマで感じることのできる景観が北海道には広がっているからであり、北海道は自然を体感できる充実した地域だと改めて感じた。また、「支笏湖でファミリーキャンプ」の回では、アメリカ人家族が支笏湖畔でキャンプを楽しん

でおり、外国人目線でレジャーを楽しむ様子や支笏湖の自然の美しい映像が紹介されていた。母親が子どもたちに、火山や湖の色の違いについて語っているシーンからは、体験観光には教育的な要素が多分に含まれていることも感じられた。この番組は、海外からの移住者が外国人の目線で北海道の見え方や楽しさを紹介してくれる、とてもよい機会になっていると思う。

（ＮＨＫ側）

日本に暮らす方や、旅行者を含め日本に滞在している方々に北海道の魅力を紹介する番組であり、サイクリング人気を意識して、自転車を取り入れた回も制作している。この番組が北海道の観光事業に携わる方々から評価されるのは、大変喜ばしいことである。

○　７月９日(土)の「室蘭　母恋駅～家族で作る駅弁～」(総合 前 11:31～11:41 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。この便利な時代に海水を煮つめて塩を作るなど、材料にこだわりを持って弁当作りをしていることや、主人のお客さんへの思い、その主人を支える家族の思いなどが番組全体を通して伝わってきた。取材したディレクターやカメラマンの取材対象への愛情やこだわりまで考えさせられるような、生き生きとした番組で気持ちよく見ることができた。

○　７月１５日(金)の北海道道「大泉洋ＳＰ～スターの素顔に“ミスター”鈴井貴之が迫る！」(総合 後 7:30～8:30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。北海道出身で今や大スターと言える大泉洋さんがホームグラウンドである北海道でトークすることで、素顔がかいま見え、非常に好感が持て楽しく視聴することができた。大泉さんが出演しているさまざまな番組について、視聴者やファンが知りたい情報が凝縮されていたと思った。大泉さんが番組最後に語っていた北海道に対する思いは、道民として嬉しく誇らしい気持ちになるものだった。番組ＭＣの鈴井貴之さんは大泉さんと長い付き合いがあり、自然な掛け合いは「北海道道」でしか見ることができないすばらしいトークバラエティーだったと感じた。

○　６月１８日(土)のＤｅａｒにっぽん「僕は最果ての島医者　北海道・礼文島」を見た。礼文島に医師として戻ってきた息子が「礼文島出身の医師として、自分にしかできないことをしたい」と言っていたのが印象的で、穏やかな表情と口調ではあるが、確固たる意志や彼の人としての魅力が伝わってきた。医師親子の絆はこの番組のテーマの一つで、そのやり取りは番組の核心だと思うが、父親が一人一人の患者を丁寧に診察したり、寝たきりの患者の手を携えたりするシーンからは、いかに患者の信頼を

得ているかが伝わり、父親が守ってきた医療とはどんなものかよく紹介されていた。息子が、父親の働いている姿を見て「父親と話をしたときに患者がほっとした顔をしているので、どんな薬にも代えがたい安心感があるのではないか」と、自分の目指す診療の姿を感じ取っているようで印象的だった。漁師をしながら３０年以上かけて桜を植えて育ててきた患者とのやり取りは、まさに離島診療の核心であり、容体が悪化したことにより入院するのが最後の外出の機会になるかもしれないということで、まだ桜は咲いていなかったが、桜の木を患者に見せるために立ち寄ったシーンが丁寧な映像によって描かれていた。この番組を通して、人口減少や高齢化などの地域の課題の中に置かれた離島医療の厳しい状況を感じる一方で、人と人とが触れ合う医療の大切さも改めて感じた。

（ＮＨＫ側）

２０２１年９月２４日(金)に北海道道「礼文島の赤ひげ先生」で放送したときは父親を取り上げたドキュメンタリーだったが、取材を続ける中で、今回は島に戻ってきた息子を主人公として制作した。当初は４月に放送する予定で制作していたが、この患者が育ててきた桜が咲いた映像も取り上げて最後まで伝えたいと考え、６月に変更して放送した。

○　６月２３日(木)の【連続テレビ小説】ちむどんどん（５４）「ポークとたまごと男と女」を見た。仲間由紀恵さんが演じる母親が娘に対して「誰が何と言おうと世界の中の人がみんな敵になっても、私はあなたの味方」と言うシーンや、主人公の暢子が母親に「うちのいいところはどこ？」と聞いたときに「『ありがとう』と『ごめんなさい』を大きな声で言えるところが暢子の一番よいところだ」という会話は非常に感激した。６月２３日は沖縄にとって節目の日の一つである“慰霊の日”で、家族の大切さや頼りがいのある部分、家族の価値などをこの日に描こうとしたのだとすれば大変よく伝わったと思う。

○　６月２６日(日)の「日曜討論」(総合 前9:00～10:15)を見た。討論番組は議論で成り立っていて、議論にはルールがあるべきだが、それを無視した番組を壊すような出演者の発言や行動には疑問を持ち、民主主義という観点から見て危機感を感じた。

○　６月２６日(日)の「ＮＨＫのど自慢」は室蘭市からの生放送だったが、コロナ禍の影響で長い間行動制限がかかり、思い切り楽しむ場所も機会も少ない市民にとって、心躍るイベントだったということが事前の盛り上がりからも感じられた。「ＮＨＫのど自慢」という特別感がありながら気楽に参加できて楽しめる“お祭り”のような番

組があることで、気持ちが明るく前向きになれた方も多かったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

会場に来られた方々が笑顔で帰られていたのを見て、地域局が地域の中で何か活性化のきっかけになるようなことができるのではないかと私たちも勇気づけられた。これからも番組やイベントを室蘭はもとより胆振・日高で展開していくことが大きな役割だと感じた。

○　安倍元首相の銃撃事件の報道について、容疑者の動機について「特定の団体にうらみがあり、安倍元首相がつながりがあると思い込み」というように、「思い込み」という表現を使っていた。「思い込む」ということばには、そうでないことをそうだと思ってしまうというような事実誤認のニュアンスがあると思う。このような重大事件の動機は知りたいと思う人も多く、真偽が明確に分からない状況ではこのような誘導的な表現ではなく、客観的事実を提示して示すことが報道の本来の在り方ではないか。警察の発表にこの表現があったのかもしれないが、事実誤認を招くようなワードを情報源が使っていた場合には、それを伝えるマスメディア側も中立性や客観性を保つための工夫をしてほしい。正しく公正で中立的な情報を広く視聴者のために発信し続けてほしい。

○　安倍元首相の銃撃事件の報道について、「思い込み」ということばを使っていたことが気になった。報道は早ければ早いほど、後に事件の解明が進み、新たな事実が明らかになることで、当初の報道とそごが出てくる難しさがあるのではないかと感じる。

（ＮＨＫ側）

警察の最初の発表で「思い込み」ということばを使っていたが、その後、特定の団体や容疑者の家族の献金についての情報が出てくる中で、「思い込み」ということばは使わないようになっていると認識している。

○　安倍元首相の銃撃事件について、社会的、歴史的に重大な関心事の一部始終を捉えた映像には価値があると思うので、しっかりと保存しておいてほしい。

○　７月１０日(日)の「大谷翔平インタビュー・知られざる４年の真実」(BS1 後 8:00～8:49)を見た。けがや苦悩など華々しい活躍の裏の知られざる話をメディアなどでは語っておらず、それらがかいま見える貴重なインタビューであり、コンテンツとし

て非常に価値があると思った。ＮＨＫの制作力が存分に発揮されている番組だが、放送されていることが知られておらず、引き続き広報に課題があるのではないかと感じた。

○　７月１１日(月)のクローズアップ現代「安倍元首相銃撃　事件の“背景”に何が」を見た。番組では、宗教団体の元信者の献金を巡る証言や、安倍元首相が関連団体に寄せたビデオメッセージを紹介するなど、放送した７月１１日の段階としては踏み込んだ内容だったという印象を受けた。タイトルは「事件の“背景”に何が」と題していたが、事件の背景と動機は分けたほうがよいのではないか。容疑者の個人的な動機やパーソナリティについてはすでに各種メディアで論じられているが、取り調べや医学的診断がなされていない状況では、どうしても根拠の不確かな推測にしかなりえないため、具体的に存在する社会的背景に焦点を当てて報道するべきではないかと思う。この問題は、銃撃事件にとどまらない、政治と宗教の関係など広範囲にわたる大変扱いづらいものだと思うが、続報を期待したい。また、宗教団体が番組に寄せた見解を比較的そのまま取り上げていたという印象を受け、気になったが、続報がなされる際には信頼できる専門家の解説も同時につけることで、団体の言い分を一方的に取り上げないような配慮をしてほしい。

○　７月１３日(水)の笑わない数学「素数」(総合 後 11:00～11:29)を見た。数学とこのＭＣを務めた芸人が合わないのではないかと感じながら見たが、最後に「疲れた。もう無理だ、俺。もう本当に！」と投げ出す場面のように、笑いの要素をもう少し増やすと、数学をテーマにした難解なこのような番組をもっと楽しく見ることができるのではないかと感じた。

○　７月１８日（月）の「今日は一日“ユーミン”三昧」(FM 後 0:15～6:50、7:20～9:15)を聴いた。８時間半にわたって、約 400 曲の中からリスナーからのリクエストで選ばれた“心のユーミンソングＴＯＰ５０”などを楽しく聴くことができた。また、らじる★らじるの聴き逃しで１週間聴くことができるのもよい。

○　「超ギョギョッとサカナ★スター」を見た。各回でテーマとする魚にしっかりとフォーカスしており、教養番組として優れていた。さかなクンが、この魚はこんなところが変わっていておもしろい、こんな素晴らしいところもあると、どの魚に対してもリスペクトを持って紹介しているのも子ども向けの教養番組としてとてもふさわしいと感じた。また、テーマとなった魚をただ勉強するだけでなく、料理をしておいしく食べるところまで取り上げているのも非常によい演出であり、魚の種類が続く限りぜひ番組を続けてほしい。

○　ＮＨＫ参議院選挙２０２２特設サイトは、有権者の判断のよりどころとなるデータが数多く掲載されており、中でも「ボートマッチ」に注目して、自分でも答えてみた。自分と候補者の政策についての考え方の一致度が一目瞭然で分かるため、投票する選択肢を広げながら、政策に対する認識を新たにできたり、選挙への向き合い方が新鮮になるのではないかと感じた。一方、アンケートの質問の意味や内容が分からないから答えることができなかったということもあるので、アンケートの内容に関するガイドがあったり、政策について勉強することができると、新たに問題意識を持つことができてボートマッチの精度も高まると思う。学校の授業などでボートマッチを実際に行うことで、自分の考えを整理したり、分からないことを調べたり、同じ考えの候補者を見つけることで投票への意欲が高まり、若者の投票率アップにつながるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは国政選挙などを中心に、テレビと同時にデジタルでの展開も意識して取り組んでいる。「ボートマッチ」は初めて取り入れたものであり、いただいた意見を含めて今後の改善につなげていきたい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１５日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１３人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から６月１日付で新たに就任した委員の紹介とあいさつがあった。続いて、メディア戦略本部副本部長、函館局長のあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道「再出発して より強く～カーリング女子・フォルティウス～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、７月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委 員 長	今村　江穂	(認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
副委員長	桐生　宇優	(北雄ラッキー(株)　代表取締役社長)
委　　員	伊藤　翔太	(株式会社トリプルワン　代表取締役)
	乾　　ルカ	(小説家)
	金山　準	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル　代表)
	笹森　琴絵	(酪農学園大学　農食環境学群特任准教授)
	清水　貴子	(地酒のまるしん商店　店長)
	鍋谷　雪子	(株式会社Ｎａｂｅｙａ　専務取締役)
	成田　正夫	(元ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	西田　一博	(有限会社厚岸清掃社　代表取締役)
	西村　卓也	(北海道新聞社　論説主幹)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)

(主な発言)

＜北海道道「再出発して より強く～カーリング女子・フォルティウス～」
(総合　６月３日(金) 後7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　スポーツでは勝者が多く取り上げられ、称賛される一方で、敗者が取り上げられる

ことはあまりないが、その栄光の裏側を探るというテーマは非常に興味深かった。こうした放送こそＮＨＫが取り上げるべき、すばらしい内容であり、もっと多くの視聴者に見てもらいたいと感じた。今後も違った角度からスポーツについて見てみたいと思った。スポーツ選手の現役引退後の脚光を浴びた先の課題もあり、サポートする組織や仕組みについても取り上げてほしい。

○　フォルティウスの選手たちの心情がよくわかる構成になっており、試合に負けた直後にスポンサーとの契約が終了になってしまうという厳しい世界だということもよく分かった。そのような状況でも選手たちがチームを存続させようと努力する姿から、カーリングという競技の魅力が伝わってきた。特に、小野寺佳歩選手の「スポーツは結果を求められるものなので、受け入れるだけだった」という潔いコメントが印象的であり、それでも頑張るのは「どこまで行っても先が見えない、フィジカルが強ければいいわけでもなく、頭がよければいいというわけでもないという、要素がたくさんある分、さらに深く掘り下げることができる」というコメントはカーリングの魅力をとてもよく示していた。一方で、カーリングに詳しくない視聴者には、選手が試合を振り返りながら当時の心情を説明する場面などがあると、カーリングの奥深さや魅力がより分かりやすく伝わるのではないかと思った。ほかの競技でも苦労している選手は多くいると思うので、そういった別の競技も取り上げてほしい。

○　オリンピックでの輝かしい活躍など、多くのメディアが取り上げて注目を集めたカーリング女子の笑顔の裏に、どんなスポーツも競技者には厳しい現実と苦悩があるのだということを知る、貴重な機会になった。オリンピック代表決定戦の敗退から２日後にスポンサーから契約終了を通知される厳しさに驚かされ、スポンサー企業に対して非情な印象を受けたが、企業側の考えや事情も番組内で取り上げるとよかったのではないかと思った。選手たちがそれでも現状を受け入れて、再起を懸けて前を向く姿から勇気をもらい、それぞれの個性と強い思いも伝わってきた。世代交代のタイミングや、女性選手ならではの葛藤にも番組を通じて関心を持った。

○　フォルティウスにＮＨＫが半年間も密着取材して、番組として取り上げたことは、非常に驚きとうれしさがあり、興味を持って番組を見ることができた。チーム存続の危機を振り返るシーンで、小野寺選手の「スポーツは結果を求められる」ということばからは彼女たちが置かれている環境の厳しさが分かった。一方で、プライベートの取材映像からは、試合中はいつも厳しい表情の選手たちの笑顔など選手一人一人の魅力を感じることができ、番組として改めて彼女たちが紹介されてよかったと感じた。番組ＭＣの鈴井貴之さんの「フォルティウスには頑張ってもらいたいが、ロコ・ソラーレも頑張ってもらいたいので道民はどのチームを応援すればいいのか」というコメン

トは、多くの視聴者が共感できたと思う。釧路地方ではアイスホッケーのチームが苦労しているという話も聞くので、ほかのスポーツについても取り上げてほしい。

○　以前、「北海道道」でロコ・ソラーレを取り上げた際に、勝利に沸くロコ・ソラーレの選手の奥に映っていたフォルティウスの選手たちの表情が印象的だったので、彼女たちも取り上げてほしいと思っていた。番組タイトルにたがわず、“栄光と挫折”や“光と陰”といった、その後の選手たちに起こっていた知られざる一面が数多く紹介されていて、非常に興味深い内容になっていた。カーリングは特に選手の個性を強調するような取り上げられ方が多いように感じられ、オリンピックや日本選手権などで一躍脚光を浴びるが、それを過ぎると熱が冷めてしまう。その中で、今回のような取り上げ方は新鮮であり、道民として、これからも継続してカーリングを応援したいという気持ちにさせられた。また、女性アスリートのさまざまな葛藤を浮き彫りにしており、各選手の思いがひしひしと伝わってくるインタビューもあり、フォルティウスの新たな目標が多くの視聴者に共感を持って受け入れられたのではないか。常呂町でカーリング指導を行う漁師の方や新しいスポンサー企業として名乗りを上げた方など、選手を支える人たちも描かれており、“北海道全体でカーリングを支えている”ということを意識した視聴者も多かったと思う。

○　まだまだ活躍が期待できるチームでもオリンピックに出場できなければ契約を解除されてしまうほど厳しい現実があることを改めて感じた。選手たちが契約を終了されたときの気持ちを話していたが、淡々と冷静に受け答えする様子からは、結果がすべての厳しい世界で戦ってきたからこその強さだと思った。フォルティウスがその後どういった経緯で存続し、メンバーたちがどんな思いでシーズンを乗り越えていったか、時系列で分かりやすく示されていた。結婚や出産などの人生の大きなターニングポイントでキャリアを中断することが多い女性にとって、復帰して挑戦できる場を作りたいという、船山弓枝選手のチーム存続への思いや、同じような経験を新しいキャリアに活かしているフォルティウスの選手たちの様子は勇気づけられるものだったのではないか。カーリング選手は、カーリングが純粋に好きだからこそ競技を長く続けられているということがよく伝わってきた。特に、スポンサーを探して 100 社以上の企業を訪問する様子からは、好きという強い思いはどんな困難も乗り越える力になると感じた。

○　多くの困難を経験した４人が苦しみながらも見事な再出発を遂げるという、多くの人が共感できるストーリーがあり、その展開の中にスポーツ全般や女性のキャリアなど、普遍性のある問題が複数織り込まれており、非常に見応えのあるドキュメンタリーだった。カーリングというスポーツを取り巻く環境の厳しさがはっきり伝わって

きた。いろいろなスポーツで世界レベルの選手でもスポンサー探しに苦労し、生業を別に持たなければ競技を続けていけないと言われている。オリンピックやワールドカップなどの大きなスポーツイベントのときは盛り上がるが、スポーツとして持続可能な状況の構築に至らないという問題がある中で、オリンピック代表決定戦の敗者に焦点を当てて、半年間追い続けたことはとても意義深いと思った。また、女性のキャリアにおいて、出産や子育てによる中断や休養を経た後でも戻って来られる場を作ったり、そのための環境を整えることは、スポーツに限らず、公共的で意義深い問題であり、フォルティウスの選手たちはそのようなチャレンジをしていると受け止めた。スポンサー契約を終了されたフォルティウスの選手たちに共感できる構成になっていたが、スポンサー側にも考えや苦悩があったと思うので、それを紹介してもよかったのではないかと思った。

○　スポーツという厳しい現場の中で、日々の練習や生活の映像から、選手たちが目標に向かって本当に一生懸命に取り組んでいる姿に非常に共感できた。急にスポンサー契約が終了になるという厳しい現実は、道内企業であるがゆえに取り上げにくい事情もあるかと思うが、それを取り上げて番組としたのはＮＨＫだからこそではないかと思う。フォルティウスの選手たちが新しいスポンサーとともに新たに取り組んでいく様子を今後も継続して取材してほしい。

○　カーリングにあまり詳しくなくても、人生ドラマとして感情移入して見ることができた。埋もれてしまっている人々や情報に光を当てたり、誰もが注目するモノや人ではなく、片隅で光を一生懸命放っているものにスポットライトを当てていくのは、ＮＨＫの真骨頂だと感じた。スポーツに限らず、好きなことでお金をもらえるという幸せな環境は、結果が出せないと一転して夢や仕事、場合によっては人生まで失ってしまう危うさをはらんでおり、華やかさの裏には個々人の努力だけではどうにもならない不安定さがあるという教訓的な内容を示していた。夢の舞台に立っている人たちはその陰で想像もできない苦労や努力をしているという舞台裏を見せてくれて、スポーツ界に潜在する問題について考える機会にもなったのではないか。世の中には多様な人々がいて、それぞれの立場や状況があり、それが常に入れ替わって成立しているということを伝える内容だったとも思った。挫折や絶望を希望で乗り越えてきた、メンバー一人一人の表情とことばが印象的で、４人全員が人として非常に魅力的であり、好きにならずにいられないような番組の作りになっていた。

○　一度競技を離れてもチームを戻って来られる居場所として位置づけることに意義があるという、フォルティウスとして活動を継続すると決意した理由が明らかになっており、彼女たちのその思いを知ることで納得でき、共感とともに応援したいと思っ

た。アスリートに限らず多くの女性が直面するであろう妊娠・出産・育児からの職場復帰、社会復帰という点において、カーリングを通して客観的にアプローチしていたところもよかった。フォルティウスの選手たちが、スポンサー契約が終了になって苦労していることも、取材し過ぎることなく過不足ない取材だったと思う。視聴者がフォルティウスというチームについて、ある程度知識があることを前提にした番組内容だったと思うが、チーム紹介のときに結成当時を振り返るインタビューなどがあればよかったのではないか。

○　オリンピック代表決定戦での敗戦後すぐにスポンサー契約が終了になるという非常に厳しい世界を感じた。スポンサーがフォルティウスの新チームに対して持っていた思いや、選手たちがチームの今後について連日連夜話し合った内容を掘り下げられると、さらに有意義な番組になったのではないか。選手たちがスポンサーを探して 100 社以上を訪問していたが、企業側が求める“地域貢献”にフォルティウスがどのように応えられるのか、また、フォルティウスが目指す結婚や出産でチームを離れても再び戻れる環境作りを企業がどれだけ理解して応援しようとしているのかが伝わらなかったのは残念だが、全体としては、逆境の中でもしっかり前を向いていこうというフォルティウスの意志が見える非常によい番組だった。

○　スポンサー契約の終了というどん底から日本選手権で成績を残して未来を見せていくという構成で、鈴井さんが言っていた「すがすがしい印象」というのはこの番組そのものだったように感じられ、のめり込んで見ることができた。番組を見ていて考えさせられたのはスポンサーが契約を終了するシーンで、経営者の立場としては使ったお金で収益を生まなければ糾弾される中で、今回契約を終了したスポンサー内でも葛藤があっただろうと感じた。また、スポンサーとなる場合も業績が悪化すれば支援を継続できなくなるということを考えさせられた。

○　結果がすべてのスポーツの世界で注目されることの少ない、敗者の物語を興味深く見た。シーズン途中でスポンサー契約が終了となり、活動資金も仕事も突然失った選手たちの衝撃や苦悩の大きさは想像に難くないと思った。“フォルティウス”は“より強く”という意味で、再起を懸けたチームの思いを体現するようなネーミングから応援したい気持ちがかき立てられた。チームの再起を巡る一人一人のエピソードの紹介も印象的であり、船山選手の「スポンサーが替わってもチームを守りたい、長く続けていきたい」という強い思いや、自身の経験から生まれた「結婚、出産を経て休養しても戻れる、環境が変わっても挑戦できる場を作りたい」という思いがチーム全体の新たな目標になったことは、一つのスポーツチームという枠を超え、組織作りにも通じるテーマだと思った。１９歳の小林美奈選手の加入で次の世代にチームを引き継

いでいく準備も始め、持続可能な態勢を整えているところは、カーリングの魅力作りという点で厚みのあるチームに進化していると感じた。世界で活躍する選手たちを輩出する、選手たちの原点である常呂町は、地域の熱意や練習環境の充実が大きいと推察するが、積み上げてきた基盤がさらに強固にシステム化されるための試行錯誤であり、挑戦する姿だと思った。シーズン最後の日本選手権はプレーオフで敗退となったが、吉村紗也香選手の「この舞台にみんなで臨めたことが幸せだった」というコメントとすっきりとしてすがすがしい表情が印象的で、安堵する気持ちになった。逆境にめげずに奮闘する北海道の人の物語を伝えるという「北海道道」らしさがあふれていた。

＜放送番組一般について＞

○　５月１７日(火)～１９日(木)放送の「ＮＨＫニュース　おはよう北海道」を見た。小樽で前向きにポジティブに生きるおじいちゃんを“ポジいちゃん”というユーモアのあるタイトルで紹介するリポートを３日にわたって放送していた。定年退職後に観光ガイドを始めて、小樽の埋もれた歴史を掘り起こして伝えてきた方と小樽の古い街並みの保存活動に取り組む昆布屋の二人に共通するのは、小樽への郷土愛が大変強く、考え方や生きざまがとても楽しかった。彼らの生き方について想像力をかき立てられる奥の深い内容だった。「おはよう北海道」は朝のニュース情報番組でいろいろな世代が視聴していると思うが、今回取り上げられた二人のように好奇心をいつまでも持ち続けて、頑張っている人たちの姿を見て感銘を受けた視聴者は多かったのではないか。

○　５月２０日(金)の北海道発地域ドラマ「春の翼」(総合 後 7:30～8:35 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。宮本信子さんをはじめ、すばらしいキャストが出演していたが、中でも主人公の翼役の中山来未さんは表情が印象的で、最初は不安で自分の殻に閉じこもったような状態から、自分を出せるようになるまでの変化を見事に演じていた。他人との距離の取り方がうまく分からない若者同士が、衝突などを経験しながら理解し合い、それを見守って理解してくれる大人がいるというストーリーが描かれていた。番組ホームページには「人とのつながりが希薄な“今”だからこそ届けたい、ある一冬の心温まる物語」と紹介されていたが、ドラマで描かれているメッセージは、つながりの希薄さとは少し違うのではないかと感じた。今の若者の人間関係はＳＮＳの発展などもあり、希薄というよりは過剰につながっていて、非常に面倒なものになっているという側面もあると思う。そのような中で、どうやって自分らしくいられる居場所を見つけるかが主題だと、このドラマの主旨を受け取った。天売島が舞台だったので、雪を投げ合うクライマックスのシーンも含めて、島の自然をぜいたくに使ったシーン

がもっとあってもよかったと思う。

○　北海道発地域ドラマ「春の翼」を見た。ドラマにおいて、天売島の風景や生き物がちょっとした息抜きになっていた。本当の意味での孤独や隔絶を解決できるのは自分でしかないというメッセージを登場人物一人一人の立場や思いから伝えようとしていたのが、ドラマ全般を通して伝わってきた。全体としては前向きで安心して見ることができたが、一方で、ドラマと現実の若者の間には乖離があるのではないかと思った。老人と若者の世代間ギャップ、若者同士の心の行き違いとわだかまり、世代や地域コミュニティ、社会的立場や家庭など、あらゆる条件下で個々人が感じている孤独、ネット依存、独居老人やへき地医療などの多岐にわたる社会問題に光を当てていたが、それらの問題を網羅しようとし過ぎてダイジェスト版のような印象になってしまい、一つ一つへの感情移入が難しかったのがもったいなかったように感じられた。

○　北海道発地域ドラマ「春の翼」を見た。天売島を舞台としてドラマが作られたことを評価したい。コロナ禍で道内の観光は大打撃を受け、とりわけ離島は厳しかったと思うが、そのような状況からドラマの撮影ができるまでになったことは感慨深かった。島民の皆さんが参加していたシーンから、島全体がこのドラマを歓迎しているという雰囲気が感じられた。一方、ストーリーにはいくつかの問題点があると感じたが、何と言ってもドラマの尺が短かったため、必然的にドラマの中で流れる時間も短く描かざるをえなくなってしまっていた。事件のために人物が都合よく動いているかのような慌ただしさを感じた。同級生に主人公のＳＮＳが見つかってしまうが、書き込みの内容などの限られた情報から、ＳＮＳの身元が特定されてしまうというのは無理があったのではないか。これは天売島の高校に主人公が転入したことにも言えることだが、家でも学校でも居場所がなくて鬱々としていたが、ＳＮＳ上で勧められた転入を即決するという、むしろバイタリティがある印象で矛盾を感じざるをえず、天売島の高校に転入するまでのエピソードをもう少し自然な流れで描くことができるとよかったのではないか。関係が悪いとされていた父親と天売島の高校への転入について、どのようなやり取りがあったかが描かれていないために十分にくみ取ることができなかった。冒頭で転入した経緯について３か月前の回想シーンが描かれていたが、主人公自らのナレーションでの説明もあると分かりやりやすかったのではないか。ラストシーンについても春になる前に終わってしまったので、肩透かしを食ったような印象が残った。ドラマで描かれていた主人公のＳＮＳの使い方について、個人が特定されてしまうような書き込みをしていたり、周囲の悪口を書き込んでいるのは褒められた使い方とは言えず、ネットリテラシーの観点からも、主人公に対して誰も何の言及もしていないことは残念だった。“天売学考証”として、自然写真家の寺沢孝毅さんが参加していたとのことで、もっと野鳥のシーンを見せてほしかった。主人公役の中

山さんは初々しさが感じられ、同級生役の桜井木穂さんも役に合わせたキャラクター感が伝わる演技だった。太鼓の演奏も手にまめを作りながら本当に頑張って様子がかいま見え、好感が持てた。

○　北海道発地域ドラマ「春の翼」を見た。宮本信子さんが演じるハルさんの「人づきあいがうまい人もいれば、下手な人もいる。お互いのことを考えているなら、自分の気持ちを正直に伝えることが大事だ」ということばは、主人公の背中を押す優しいもので印象的だった。天売島の映像は、以前に放送した「ダーウィンが来た！」の素材を使っていたが、「ダーウィンが来た！」では島の魅力をわずかなことばと映像で伝えていたものの、３０分という短い番組ではストーリーを広げられず、物足りなさを感じていた。改めてこのドラマで島の映像を効果的に使っていたと思う。太鼓を練習するシーンでは島民の方が出演していて、地元の人たちとの交流も見ることができ、非常によいドラマだった。

○　５月２２日(日)放送の「知床・観光船沈没事故から１か月」(総合 後 6:05～6:30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ) を見た。１か月間の丁寧な取材の蓄積を番組として紹介していたと感じた。その調べた事実が何を意味するかについてもう少し踏み込むとさらによかったのではないか。この事故の背景には、運航会社のずさんな安全管理体制と国の不十分なチェック体制という２つの大きな論点があるとのことだった。運航会社のずさんな体制が放置されてしまっていた原因を突き詰めていくと運航会社の社長にどうしても行き着いてしまい、なぜこの人物が社長をできたのかなどをもっと掘り下げて、この会社の構造などを明らかにしてほしかった。国のチェック体制については、これまでの経過から問題をことごとく見逃しているということが分かったが、驚くような事実が番組内で明らかになっていたことに関心を持って見ることができた。また、知床観光が今後どうなるかということは誰しもが気になるところではないかと思った。観光業界の経済面での影響はどうなるのか、今後どういう形で秘境の観光をアピールしていくのかも取り上げてほしかった。また、行政のチェックや業者の個別の自助努力だけでは対策として足りないと思うので、観光船を運営している会社同士が同業として何ができるのかといった視点も知りたいと思った。今後も裁判などの動きを含めて長きにわたる取材が必要だと思うが、しっかりと蓄積し受け継いで報道してほしい。

○　「知床・観光船沈没事故から１か月」を見た。捜索に参加している地元の漁民や一般の方の思い、運航会社のずさんな実態を詳細に伝えていた。危険な海で人の命を預かるという、観光船事業が許可事業となっている意義が果たされていないと明らかになった以上、これからこの業界にとって重要なのは、個々の事業者の経営状況を改善して再発を防ぐことのはずだが、番組からはそのあたりが見られなかった。行政や現

場がどう変わったか、変わらないかをさらに追い続けて、行政も利用者も業者も、誰もがこの事故を忘れたり、忘れたふりができないように今後も問題提起や注意喚起を続けてほしいと思う。

○　６月６日(月)～１０日(金)の「ほっとニュース函館」(総合 後6:40～7:00 函館単)は１週間にわたり、「ぐるっと道南　自慢のグルメウィーク」と題した中継シリーズを放送していた。地域放送を充実させるために、放送局がある町だけではなく周辺の市や町にも目を向けてほしいという話をしたことがあったが、今回のような企画で実現したことは非常によかった。また、長万部町やせたな町など、函館から距離があり、なかなか足を運ぶことができないエリアを紹介していたのもよかった。取り上げていたのは、八雲町のトラウトサーモン、今金町の軟白長ネギ、せたな町のブランド豚といった目新しいものばかりで、それぞれの市や町の意外な一面をみることができた。季節ごとに道南エリアのグルメや温泉、観光地を取り上げる企画がシリーズ化されることを期待しており、このような番組を通して道南エリアでの地域の経済循環がさらによくなるきっかけになってほしい。

○　「ほっとニュース函館」内の「ぐるっと道南　自慢のグルメウィーク」と、６月９日(木)の「ほっとニュース北海道」のコーナー「ローカルフレンズ滞在記」の「乙部・桧山編」を見た。一次産業の農業や漁業に着目していたのが印象的だった。今の日本は全国的に“第１次産業から６次産業化”と言われているが、どのように観光につなげていくかが課題になっており、ＮＨＫでこれに関連する話題を全般的に紹介していたことはよかった。長万部町からの中継で釣り名人を紹介していたように、ＮＨＫが地域の人たちを取り上げることで、“ローカルプライド”と言えるような誇りや自信が育ち、そこから自分たちの取り組みや普段の活動にも自信が持てるのではないかと思う。そして、多くの視聴者に見てもらうことで、改めて自分たちの地域のよさを再発見することができると思う。そういった取り組みを引き続き取り上げ、地域を応援するような番組作りを続けるとともに、観光で言われるような“点から線に、線から面に見せていく”情報発信のあり方にこれからも取り組んでほしい。

○　６月１２日(日)の３０ＤＡＹＳ「豊浦に行ってみた」(総合 前8:00～8:25 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。若い人たちを主役にしようしているのがよく伝わってきた。町がこれから活性化していくための夢や希望をどう引き出すかという番組制作の意図がよく見えて、個人が主役であり、併せてその土地柄や町の雰囲気がじかに伝わり、地元の人も本当に喜ぶ番組だと思った。漁師の息子やイチゴ農家を目指す夫婦などの若者たちが、夢を持ち、将来を楽しみに生活している様子もよく伝わってきた。

○　５月２６日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」内の「絵本と向き合う受刑者たち」という特集を見た。山口県にある社会復帰促進センターで、子どもを残して服役している女子受刑者が、絵本を読む練習を重ねて録音してわが子に届けるというプログラムを取り上げていた。“絵本の力”、“受刑者の再犯率の高さ”、“助けを求められない世代の生きづらさ”という三つの視点から深く考えさせられる特集だった。学校や家庭、地域社会で生きるすべを学ぶ機会を失った人たちが、いかに社会で生きていくか、また社会の側がこのような人たちを排除せずに包摂していけるのかという重要な課題だと感じた。受刑者が絵本から家族や人に素直に頼ることが大切なのだと、生き方を学び直している姿に胸を打たれた。“処罰から回復へ”というテーマの下、罪を責めるだけでなく、コミュニケーションや他者への共感力を学び直すような教育的なプログラムの必要性が高まっていると感じた。今後も受刑者や社会に復帰した人を孤立させない地域社会の取り組みなどを広く伝えてほしい

また、絵本に関連した番組で、６月１０日(金)のドキュメント７２時間「絵本専門店　わたしの物語」も見た。出版不況の中で在宅時間の増加や大人からの需要の増加が影響して、絵本の人気は右肩上がりとのことだった。「大切な人と読んだそのときのぬくもりは絵本に宿り続ける」というナレーションが胸に響いた。今後も絵本の魅力を伝える番組を期待したい。

５月２９日(日)のＮＨＫスペシャル　つながれ！チエノワ「＃子育てのもやもや解消」(総合 後 9:00～9:54 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。育児に関する検索ワードの実態から非常にネガティブな子育ての現実が明らかにされていたが、その実態に迫り、どうすればその課題を解決できるかについて、さまざまな角度から知恵を集めるという非常に興味深い番組だった。人に頼ることや助けを求めることを経験していない人たちがどのように子育てをするかは大きな課題だと思う。家事・育児の分担や夫婦でギスギスしてしまうなどの若い人たちの悩みに対して、その若い人たちが知恵を集めてアプリを開発するというアイディアは斬新な印象を受けた。また、コロナ禍の長引くマスク生活が子どもの心身に及ぼす影響は、今の子育て世代や関係者が特に不安視している問題であり、その不安を払拭するような事例が紹介されていてよかった。感情を言語化することの大切さ、親子の触れ合いや愛着が強い絆と健全な脳を作る力になるというコメントは、子育て中の人たちにぜひ伝えたい普遍的なメッセージだと思った。「つらいと吐き出す場所が欲しい」というのも共感でき、子育てを見守る地域の方々に関心を持ってほしい内容が詰まった番組だった。

（ＮＨＫ側）

この番組はまさに子育てで悩んでいて、ふだんなかなかテレビに接触することができない層に向けた番組だった。若い世代や子育て世代、現役世代に番組を見ていただきたいが、その人

たちこそまさに目の前のことに追われて、テレビを見る時間や余裕がないのではないかと思う。ＮＨＫプラスを含めたデジタルなど、ありとあらゆる工夫を凝らして、ＮＨＫのコンテンツに触れていただく機会を作るために、さまざまなトライアルを重ねていきたい。時間と地域という概念を超えるデジタル時代に、番組をはじめとしたＮＨＫが持つコンテンツをむしろ再定義して、より活性化させていくことで、メディアの役割を果たしていくことがこれから大事になってくると考える。

○　６月５日(日)の「トーキング　ウィズ　松尾堂」を聴いた。６月１日の「ミルクの日」や６月の「牛乳月間」に合わせた内容で、昨年は新型コロナの影響もあり、北海道だけでなく全国的に牛乳の廃棄問題が起こった際に、ゲストで俳優の森崎博之さんが消費促進を呼びかけたということだった。番組後半では、ゲストのミルク料理研究家が牛乳を使ったオリジナルレシピを紹介していたが、道民の普段の料理にも生かすことができると感じた。北海道では酪農を取り巻く問題を見聞きすることが多く、最近は牛のえさの国内自給率が非常に低いのが課題とのことだった。「ほっとニュース北海道」で、輸入飼料の価格高騰を受けて、十勝のライ麦を国産飼料として活路を見いだそうとしているという話題を取り上げていたように、酪農関連の話題をこれからも継続して取り上げてほしい。

○　６月９日(木)放送のＳＯＮＧＳ「香取慎吾」を見た。この回の編集や演出からは出演者を大切に扱っている制作者の思いやその音楽のすばらしさが非常に伝わる内容だった。音楽についてもダンスを含めた一つ一つの演出が細かく、緻密なカメラワークなど、リハーサルをかなりの回数重ねていることがうかがえるすばらしい演出だった。「ＮＨＫ紅白歌合戦」を代名詞としているＮＨＫの技術力の高さを感じた。コロナ禍などで才能ある人材が芸能活動を断念せざるをえなかったりする中、これからもメディアに出演する機会をＮＨＫで作ってほしいと感じた。

○　６月１０日(金)放送のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「天才激突！黒澤明ＶＳ勝新太郎」を見た。天才と天才が真剣勝負で映画製作に懸ける迫力がすさまじく、目が離せなかった。勝さんの突然の主役降板について、貴重な映像の数々から当時の様子が生き生きと伝わってきた。勝さんが黒澤監督について話している、はにかんだ、うれしそうな表情が印象的だった。一方で、周りの人たちの証言から二人の相性が心底悪かったということがうかがえた。勝さんがリハーサルで何度も言いかえて黒澤監督をいらだたせた、「出かすも出かさぬも、ほかに仕様がなかった」というセリフがその後の大事件を暗示するように聞こえてきた。一方的な解釈ではなく、「影武者」

の関係者や二人にゆかりのある人たちのそれぞれの視点から丁寧に描かれており、視聴者の想像力がかき立てられるすばらしい構成になっていた。ＮＨＫには昭和の映像がまだまだたくさん眠っていると思うので、当事者の話を聞きながら、当時を振り返る番組をこれからも見たいと思った。

○　「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律（障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法)」が５月２５日に施行され、放送事業者に対しても国などと相互に連携を図りながら協力することが努力義務として求められている。ＮＨＫは東京オリンピック・パラリンピックの放送でさまざまな取り組みを行っていたり、聴覚障害の方からも称賛される、ろう通訳を入れた番組作りを行っている。また、放送技術研究所を中心に自動音声認識字幕の実証実験を行うなど、情報取得のハードルを取り除くべく、さまざまな取り組みが進められていると認識しており、そのような取り組みが北海道などの地域放送でも広がることを期待している。さまざまなジャンルを地元目線で取り上げる「北海道道」のような番組を見たいと言う聴覚障害者は多く、視聴方法の多様化に合わせて、字幕を付与して再放送したり、ＮＨＫプラスで配信するなどにも取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

字幕や手話については、障害のある方だけではなく、高齢社会の日本において、より優しい放送・サービスを届けるうえで避けては通れないものである。これらを充実させていくことは公共放送ＮＨＫとして一番の柱になってくるものであり、これからも伸ばしていくべきだと考える。

○　“ＮＨＫプラス”を初めて利用したが、登録が思ったよりもスムーズで、ページもしっかりと作り込まれて、操作性が非常によく、テレビを見ることができない人にもコンテンツに接触できる環境が整ったと感じた。テレビ離れの中で、“ＮＨＫプラス”からコンテンツに接触してほしい層に届くような媒体でしっかりアピールをするべきだと思う。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、１８日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から５月１日付で新たに就任した委員の紹介とあいさつがあった。続いて、北見局長のあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「２０２１年度北海道地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、北海道道「ＡＩはどこまで創造力を持つか」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委 員 長	今村　江穂	(認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
副委員長	桐生　宇優	(北雄ラッキー(株)　代表取締役社長)
委　　員	伊藤　翔太	(株式会社トリプルワン　代表取締役)
	乾　　ルカ	(小説家)
	金山　準	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル　代表)
	笹森　琴絵	(酪農学園大学　農食環境学群特任准教授)
	成田　正夫	(元ながぬま農業協同組合　代表理事組合長)
	西村　卓也	(北海道新聞社　論説主幹)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)

(主な発言)

＜北海道道「ＡＩはどこまで創造力を持つか」
(総合　５月１３日(金) 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)について＞

○　冒頭で紹介された衝撃的な内容の短編映画のあらすじを考えたのが“フルコト”という脚本生成ＡＩだと聞き、ついに文学や脚本などの創作活動の分野にＡＩが入り込んできたと驚きを感じた。番組ＭＣの鈴井貴之さんがフルコトと共作した脚本から出来上がったアニメは、鈴井さんも「自分の考えていたものをはるかに超えた、ある

いは壊された」と言っていたように、分裂気味だが斬新、未熟だが新鮮というように受け取った。ＡＩとの共同作業を常識にとらわれない新しい創作の形だと思えば、これまでにない創作の道が開ける可能性があるかもしれないと感じた。手塚アニメを学習して新たな作品を生み出す試みからは、ＡＩの進歩を直感的に理解できた。ＡＩの学習方法や発達過程を分析することは、人間の創造性の根源や可能性について知るきっかけになると感じた。ＡＩが人間よりも高い知識を生み出すことが可能になる特異点を示す“シンギュラリティ”後も、クリエイティブな仕事は人間が担い続ける可能性が高いと言われているが、ＡＩがすでに人間の領域、能力を超えている分野もあると言われており、利便性を追求するために自ら生み出したものをきちんとコントロールすることの重要性も痛感しながら、この番組を見た。

○　農業の分野でもロボットが実用化されており、脚本の分野でのＡＩの活用について期待して見た。手塚治虫さんのタッチをＡＩで出すことができると言っていたが、手塚さん本人が描いた作品を大切にしていくことで、ＡＩに振り回されるのではなく人が作るということの大切さも取り上げてほしかった。また、脚本作りの題材に“ゾンビ”などを使っていたが、北海道に関するものにしたり、ＡＩが北海道の経済などの分野ではどのような活躍ができるかなどを取り上げると、視聴者ももっと興味深く見ることができたのではないかと物足りなさを感じた。

○　ＡＩの研究が進んでいるという印象を持つことができた。一方、鈴井さんが最初におおまかなあらすじを入力していたように、ＡＩが全くの無から作りあげることはできないことが分かった。ＡＩは人間が処理し切れない情報量を記憶することができ、情報を入れると一つの単語から関連付けられたおびただしい数の単語を探し出して脚本が出来上がるということはおもしろいが、その先の展開がなかなか見えなかった。ＡＩの脚本にどのような価値があるか、ビジネスなど私たちの生活にどうフィードバックされるかという視点があると、ＡＩや番組への関心がもっと沸いたのではないか。

○　ＡＩに脚本や創作のヒントを生み出させるという試みから、ＡＩ技術もここまで来たのかと驚かされるとともに、未成熟なところも見え隠れしており興味深く見た。ＡＩがはじき出す独特のワードやフレーズへの鈴井さんのリアクションがおもしろく、共感できた。出来上がった脚本は、鈴井さん本人や視聴者が想像していたものとかけ離れていたという印象だったが、ＡＩが作り出した脚本をアニメーションにして、できる限りそのまま届けることでＡＩの創作における現状を知ることができた。ＡＩは一般的になってきたと思われるが、番組で取り上げる際は、用語などの説明があったほうがよかったのではないか。ＡＩを使って手塚治虫さんの“新作”に取り組むプロ

ジェクトを紹介していたが、脚本よりも漫画の方がＡＩとの親和性が高いように感じられた。将来、ＡＩが北海道にどのような可能性をもたらすかについてのコメントがあるとよかったと思う。

○　私たちが今まで想像できなかったようなストーリーをＡＩが作り上げていったプロセスを、鈴井さんが実際にフルコトを使うことで目にすることができ、理解しやすかった。今後、誰もが脚本家になれるかもしれないという夢や希望が持てる話ではないかと思った。出来上がったアニメーションは、鈴井さん自身が戸惑いながらも「想像をはるかに超えたおもしろい体験」「自分の考えていたものをはるかに超えた」と言っていたように、３分で伝え切るには難しいと感じた。今後、ＡＩは素晴らしい脚本を生み出すのに欠かせない相棒になるのではと期待が持てる一方で、著作権や盗作、類似作品への心配や問題が懸念される。それでも、文学や脚本の分野でＡＩと共存していく未来を視聴者に強く訴求していたと思う。これからも「北海道道」で、視聴者が知らないテーマを取り上げ、視聴者に知るきっかけを提供してほしい。

○　番組では、一般的に人間の知性のほうが優位性を持つと言われる創造性やクリエイティビティなどの分野で、どれくらいＡＩにできることがあるのか、発展しているのかを紹介していた。演劇や脚本に長く携わってきた鈴井さんの人選は的確であり、おもしろく見ることができた。フルコトは文学作品やインターネットから膨大な量の文章を学習し、その時代を反映した関連性の高い単語をつなげていくと紹介していたが、番組内で強調されていた“非常識”、“人間には思いつかない”というよりは、多くの人の考えをまねしているように捉えられてしまうのではないかとも感じられ、フルコトのすごさを十分に理解することができなかったような気がして、番組としても何を打ち出したかったのか曖昧だった。また、機械翻訳や自動運転など、ＡＩにできることが広がっていくと、人間の知能にできることは一体何かという問題が浮かび上がってくるので、脚本の分野に限定せず、ＡＩと人間の未来といった、広い視点でのコメントがあるとよかった。北海道との関連性も分かりにくかった。

○　さまざまな分野で活用されているＡＩが、苦手とされる創造性を要求される分野にどう進出しているかというテーマは興味深く、優れた開発者によってＡＩの進出が現実のものになりつつあるという内容でおもしろく見ることができた。映画監督で舞台脚本なども書いている鈴井さんがＡＩと脚本を共作する当事者としてリアクションしており、ＡＩが考える突飛な展開がその筋のプロでもなかなか出てこないレベルだということがよく分かった。一方で、北海道とのつながりが見えず、なぜこのテーマを「北海道道」で取り上げたのかが疑問であった。北海道にこだわらない枠組みの番組で取り上げてもよいテーマだったのではないか。

○　ＡＩやディープラーニングは若い人たちを中心に興味深いテーマであり、番組をおもしろく見ることができたが、北海道とのつながりが見えてこなかった。例えば、お土産の名前をＡＩが考えるといった演出にすると、ＡＩを使った北海道の新しい未来が見えるというような番組になり、おもしろいのではないかと感じた。また、番組のタイトルも抽象的で興味をひかれないのではないかと思う。もう少し視聴者の関心を引くような要素を入れたほうがよかった。何が起こるか分からないという番組の作りは、予想ができず、最後まで見ようと思わせる仕掛けになっており、離脱率も低かったと思う。北海道のポテンシャルや魅力などを改めて知ることで、北海道をより深く知ってもらうという「北海道道」の番組コンセプトを貫く内容で番組を制作し続けてほしい。

○　ＡＩは、大量のデータ分析などのツールという狭い認識を持っていたが、この番組のように脚本を作ったり、漫画を描いたりといった、使う側の人間の発想いかんではさらなる広がりが期待できるということがわかった。ＡＩを使って手塚治虫さんの新作に取り組むプロジェクトは、手塚さんの作品はもちろん、手塚さんの歴史観や世界観などをバックボーンに出来上がっていくと思われるので、ＡＩの未来がどのように発展していくのか、その未来を見せる部分について、スタジオゲストのはこだて未来大学の松原仁特任教授のコメントがあると番組により深みが出たのではないか。

○　ＡＩの苦手な領域だと認識していた、他者への共感力、コミュニケーション力、創造性などにＡＩが接近してきたと複雑な思いで見た。鈴井さんがおおまかなあらすじをログラインに入力したり、物語の感情をネガティブやポジティブに調節する機能などを使い分けながら、実際にフルコトと共同での脚本作りを紹介していた。ＡＩが事前学習を通じて単語同士の相関関係を分析している点などは、ＡＩについてある程度知っている人には理解できる内容になっていた。出来上がった脚本をアニメーションにして紹介した手法も秀逸で、視聴者に最も伝わりやすい表現方法だったのではないか。手塚治虫さんの新作の創作について、息子の眞さんの「手塚治虫自身がＡＩのようなもので、人間の領域ではない。なので、ＡＩにしかできない」ということばから、手塚アニメの再来が実現する日が来るのかなとわくわくするような気持ちになった。しかし、人間の常識を超えたＡＩの発想や異質さをおもしろがるところまではたどり着けなかった印象で、人間が持つ創造性についてスタジオでももう少し掘り下げて考えてみてほしかった。ＡＩの創造力について、松原さんのコメントから将来の可能性が示唆されていたが、どのように進化し、人間の生活にどういう影響を与えていくのかも気になった。番組を通じて、北海道とＡＩとの関連性をあまり見出すことができなかった。

＜放送番組一般について＞

○　４月２９日(金)の緊急特番「知床・観光船遭難事故」(総合 後 7:30～7:55 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を事故が起きた原因の本質をしっかり捉えてほしいと思いながら見た。観光船や釣り船などの地元関係者の証言を基に、事故に至る経緯とずさんな運航実態が整理されており、現場に山積していた潜在的な問題が、いつしか問題と感じられなくなっていた実態や、経営と安全を天秤にかけていた可能性すらあったということが分かった。一方で、地元で長く尽力してきた、ほかの観光船運航会社の社長や船長のじくじたる思いがあることも伝わってきた。利用者や良心的な事業者を守るために、行政は観光船の運航の在り方について根本から見直す必要があると感じた。ただルールを決めるだけでなく、実効性のあるルールとその徹底が重要だということは誰もがわかっていることであり、それを事業者だけでなく行政にも改めて求めたいと、憤りながら番組を見た。なぜこのような事故の犠牲になければならなかったのかを問い続け、社会がどう変わるか、あるいは変わらないかを取材し続けるとともに、自分の命を守るために乗客への注意喚起を促す点に配慮した番組を作ってほしい。

○　知床の海で同じように観光船を運航している会社の社長のインタビューは非常に理解しやすかった。一方、事故発生からわずか一週間での放送ではあるが、１社だけではなく複数の会社のインタビューを取り上げるべきではなかったかと感じた。

○　こういった報道番組は被害者や遺族の心の傷を広げてしまうような面を持ち合わせているが、この番組はそれが一切感じられず、高く評価できると思う。事故の発生から一週間にも関わらず判明したことを時系列でしっかりと伝えていた。ずさんな運航実態も簡潔な文章や表記で示しており非常に分かりやすかった。経営の優先順位を大きく間違え、コンプライアンスが守られていないという点もしっかりと表現されていたが、もっと深掘りすることで同じような会社や経営者が今後出ないようにしなければいけないということを強く伝えてもよかったと思う。過去に道内で起こった別の遭難事故にも触れたことは、当時の事故の教訓を思い起こす役割を果たしていた。アナウンサーの言葉遣い、表情、声のトーンから、高いプロ意識が感じられた。

○　５月７日(土)の北海道スペシャル「ファーブルのバトン～親と子の博物誌　総集編」(総合 前 10:30～11:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。虫や植物など、足元にあるような身近なものまで、図鑑作家の奥山久さんがどのような視点で見ているのか、子どもの頃に戻ったような気持ちでとてもほほえましく、ほのぼのとした気持ちで見ることができた。今はスマートフォンで何でも検索できる時代だが、実際に現地へ行って見て

みるということの大切さに改めて気付かされた。この番組の主人公のように、一生夢中になれることにどうすれば出会い、継続することができるのか、また親から子へどう伝えているのかというコツを知りたいと思った。撮った写真をこれから出版する本で差し替えるという前向きなことばもあり、奥山さんの新たなチャレンジに期待したい。

○　「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」の地域への関心や愛着をかき立てる内容は好印象であり、気象予報士の親しみやすい話しぶりにも好感が持てた。道央、胆振・日高のすべての７０市町村を順番に尋ねて地域の話題を伝えていくコーナー「ななまるマップ」は、地元の人も知らないような情報を取り上げており、興味深く見ることができた。５月１２日(木)の放送では、月形町のコミュニティスペースの運営者が「生まれ育った故郷が疲弊しているのが許せない」と繰り返していたが、そのような状況下でも若者が主体となって、つながりの再構築や地域活性化を試みており、このような試みは新たな交流の場の模索であると同時に新しい働き方の模索にもなっていると感じた。このコミュニティスペースは来月のオープンを目指しているとのことで、実際に訪れてみたり、このような地域の試みを応援していきたいと思った。「ななまるマップ」については、このペースでいくと７０市町村をあっという間に取り上げ終わってしまうのではないかと、それ以降の展開が気になった。５月１３日(金)の放送では白老町のアイヌの衣服文化について、アイヌにルーツがある方が企画した展示を取り上げていたが、別番組と同内容のものが放送されており、説明を入れるなど、見せ方の工夫がほしいと思った。

○　５月１１日(水)の「ほっとニュース北海道」のコーナー「シラベルカ」は、自転車のヘルメットの着用はなぜ定着しないのかというテーマの放送で、着用が努力義務だという新たな知見を得ることができた。北海道でヘルメットの着用が定着しない理由として、積雪で自転車に乗らない時期があるために一年中自転車に乗ることができる地域に比べてコストをかけないのではないかという専門家の見立ては説得力があった。「シラベルカ」の中でも、信号機や北一条通沿いに集中するテレビ局、アナウンサーへの密着などの特に知りたかったことを取り上げている回は印象に残っており内容もよく覚えている。視聴者から投稿を募集するコーナーはだんだん投稿が減り、尻すぼみになっていきがちではないかと思うが、「シラベルカ」は視聴者が長く楽しめて、なるほどと思える知識が得られるコーナーであり続けることを期待している。また、投稿用の公式ＬＩＮＥアカウントもあるが、投稿を受け付けるだけでなく、放送予定の発信などの使い方も検討してほしい。

○　５月１３日(金)の北海道発スポヂカラ！「極寒の地が生んだ銀メダル～カーリング

北海道北見市～」（総合 後 7:57～8:22 北海道ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。ロコ・ソラーレの原点が地元密着、地域密着にあり、それを大事にしていることがよく紹介されており、カーリングと地域の過疎化の関係性、カーリングがつなぐ人間関係がよく表現されていた。一方、かつての常呂町や北見地域の人口や産業、経済状況が、カーリングを通じて現在ではどのように変わったのかも知りたかった。選手の働き口を一つの企業ではなく、複数で支え合っているのは目からうろこの話で、多くの地域の人たちが応援しているということを知ることができた。選手の一人一人の頑張りはもちろん、地域の支援があって、平昌オリンピックの銅メダル、そして北京オリンピックの銀メダルという成果が得られたのだと感じた。

○　常呂町カーリング協会初代会長の小栗祐治さんの足跡とも言える、北見市常呂町がカーリングに力を入れ始めた頃の映像は非常に興味深かった。真冬の夜の氷作りやほうきで掃く映像からはカーリングの歴史が紐解かれており、今後、カーリングを見るときに楽しみ方が変わってくるように感じられた。

○　５月１４日（土）のＷｉｌｄ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ！「白老で山菜採り」を見た。海外の方に向けた番組だが、道民が見ても身近に感じることができるものだった。山登りや山菜採りはアクティビティーであり、食体験という点でも北海道の観光資源として生かせるのではと思っており、この切り口で海外に北海道を紹介したことは非常によかった。

○　５月１５日（日）の「緊急ルポ　根室　ロシアと向き合う人々はいま」（総合 後 6:05～6:30 北海道ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。漁期に入っても陸揚げされたままの船、最後の場面の出漁していく船の後ろ姿から、根室の漁師たちの宙ぶらりんな現状や先行きへの不安が伝わってきた。今もまだ国家間の争いに巻き込まれている根室の漁業者や北方四島返還に関わる人々の表情やことばから、生活やふるさとだけでなく、人生や家族を奪われ続けていると感じさせられた。若い漁師が「子どもは将来、船に乗せたくない」「わざわざ苦労させたくない」と言うのは本音だと思うが、それでも何かしらの希望を見つけ、懸命に生き前に進もうとする姿に胸を打たれた。ウクライナ侵攻の余波がこんなところにもあるのかと驚かされるとともに、国家などの大きな要素が絡み合いぶつかり合った結果を負うのは、それぞれの現地で一生懸命に生きている人々だという現実を、ウクライナの現状を見るのとは違う形で見せられた気がして、やるせない気持ちで見終えた。同時に、現地の人々に光を当てて声を集めることの重要性も感じ、この番組の意義深さを感じた。

○　５月１６日（月）から２０日（金）の「ほっとニュースぐるっと道東！」は、スペシャ

ルウイーク「輝け！未来びと」として、地域で活躍する子どもや若者、それを応援する人たちにスポットを当てて、各地から中継で伝えるという楽しく見ることができる内容だった。１６日(月)は釧路市のライブハウスからの中継で、アイヌにルーツを持ち、道東を中心に活躍する釧路市阿寒町出身の３人の若者が楽曲の演奏を交え、自分たちのそれぞれの言葉でインタビューにも答えていた。１７日(火)は白糠町にある全国初の掘削技術専門学校の話題で、開校の背景には日本が世界有数の地熱保有国にも関わらず、掘削技術者が極端に不足している状況があると知ることができた。講師は長年、地熱掘削に携わってきたプロだが、掘削技術という教育分野は全く未開拓で、教えるには相当な苦労があるのではないかと思った。多くの若い人たちが基礎を身に着けて活躍してほしいというコメントからは掘削技術を継承させていくのだという熱意が感じられた。両日ともに初めて見る話題であり、相当な取材を積み重ね、道東地域で活躍する若者や子どもの今を掘り下げていることが想像できた。

○　ＮＨＫの番組表を見てみると、北海道の各放送局が制作している番組が豊富にあると感じた。しかし、このようなたくさんあるおもしろいコンテンツを知っている人がまだまだ少ないと思うので、番組広報についてはもっとやりようがあるのではないか。

○　５月８日(日)のダーウィンが来た！「世界初撮影！カマキリが鳥を狩る」を見た。石川県の舳倉島で、自分の何倍もの大きさの鳥をしとめるオオカマキリの名ハンターぶりに驚かされるとともに、世界初の貴重な映像ということに感動した。番組後半では、ハリガネムシがカマキリに寄生して水に飛び込むことで森と川の栄養をつないでいるという命の循環や神秘的なメカニズムを伝える、すばらしい情報が満載であり知る喜びと驚きを感じた。このようなＮＨＫならではの優れた科学番組を大切にして、これからも視聴者に届けてほしい。

○　５月１５日(日)の小さな旅「この町に恋して～北海道　東川町～」を見た。放送が始まった昭和５８年の旅のスタイルを考えると、人にスポットを当てた番組作りは非常に挑戦的だったのではと想像されるが、現在もこの「小さな旅」が大切にしてきた価値観が受け入れられてきたのではないかと思う。旅人が地元の人との交流を通じて、その土地の魅力、そして人の魅力を紹介するという、人に会いに行くような旅という雰囲気がこの番組のすごいところだと感じた。今回の放送では「移住」という今日的な切り口で描いていることも印象的であり、番組が進化していると感じた。この番組のように、人にフォーカスし、人が観光資源になると視聴者に知らせてくれる番組をこれからも続けてほしい。

○　沖縄本土復帰５０年の関連番組に注目し、５月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「証

言ドキュメント　“沖縄返還史”」(総合 後9:00～9:59)を見た。日米で録音や録画した大量の資料を時間をかけて検証し、新しい事実を報じる形で歴史を掘り起こすという圧巻の内容だった。約５０年前の沖縄で米軍基地の建設に従事したのがアメリカ軍ではなく自らの農地を接収された地元の農民だったという事実は衝撃的であり非常に心が痛んだ。佐藤栄作元首相の秘書官の「沖縄返還交渉の成功は、大学紛争をまとめたことに原因があると思う」という証言は、佐藤元首相がノーベル平和賞を受賞した陰で日本の大学生の自由な主張を弾圧して日米交渉をまとめていたという驚きの事実があったということがわかる貴重な証言だと思った。外務省の外交官らの「沖縄のアメリカおよび日本における安全保障のために、基地の返還には触れないことで沖縄返還の交渉をしており、もう基地返還の交渉はできなかった」や「基地の全面撤去を主張していると、アメリカと接点が持てない」という証言からは、当時の日本がいかにアメリカに頭が上がらなかったのかよく伝わってきた。佐藤元首相が「沖縄返還を実現する」という政権公約を実現するため、本土復帰交渉では「核抜き・本土並み」というスローガンがないがしろにされていたという、歴史の過程で見過ごすことのできない事実が今回の番組で明らかになったと思う。

○　５月１１日(水)のクローズアップ現代「５０年前の沖縄にタイムトラベル▽本土復帰“歴史への旅”」(総合 後7:30～8:15)は、バーチャルリアリティーで５０年前の沖縄を旅するというおもしろい設定の内容だった。当時はＯＬだったという案内役の女性が「私たちは沖縄戦を生き抜いてきた人たちに育てられたので、戦争はどんなことがあっても肯定するわけにはいかない」ということばが非常に印象的だった。沖縄戦の悲惨さを沖縄の誰もが知っていて、それを次の世代は味わってほしくないということを相当に強く伝えてきたことがよくわかることばだった。

○　「Ｅテレ０６５５」を長年見ているが、朝のあわただしい時間帯でちょっと一息つけるような内容だと感じている。動物が出てくる歌や、ちょっとためになる知識や教養が盛り込まれるなど、高いクオリティーを保ち続けており、ぜひ放送を続けてほしい。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ北海道地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ北海道地方放送番組審議会は、２０日(水)、ＮＨＫ札幌放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。札幌局長と室蘭局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」「ほっとニュース函館」「ほっとニュース道北・オホーツク」「ほっとニュースぐるっと道東！」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	今村　江穂	(認定ＮＰＯ法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち　理事長)
委　員	金山　準	(北海道大学大学院ﾒﾃﾞｨｱ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院　准教授)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル　代表)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有) 良栄・ＰＬＡＮ　代表取締役)
	笹森　琴絵	(酪農学園大学　農食環境学群特任准教授)
	西田　一博	(有限会社厚岸清掃社　代表取締役)
	西村　卓也	(北海道新聞社　論説主幹)
	船山　大介	(特定非営利活動法人　Ｎｏ　Ｌｉｍｉｔｓ　理事長)

(主な発言)

＜「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」
(総合　４月４日(月)～ 後6:40～6:55 札幌単・室蘭単)
「ほっとニュース函館」(総合　４月４日(月)～ 後6:40～6:55 函館単)
「ほっとニュース道北・オホーツク」
(総合　４月４日(月)～ 後6:40～6:55 旭川単・北見単)
「ほっとニュースぐるっと道東！」
(総合　４月４日(月)～ 後6:40～6:55 帯広単・釧路単)について＞

○　「ほっとニュース道北・オホーツク」は、放送時間が拡大したことで、身近な話題をそれぞれの曜日ごとに取り上げられるようになり、見応えがあった。各曜日の企画

やコーナーは、旭川放送局だけでなく、北見放送局のスタジオもつないで伝えており、好印象を持って見ることができた。月曜日の「ふるさと自慢」のコーナーでは当麻町と遠軽町のどちらも知らなかった情報を紹介しており、今後も全自治体が登場するということでますます楽しみである。火曜日の「潜入！旭山動物園」のコーナーは、動物園に行ってもなかなか知ることのできない情報を発信していた。水曜日の「映像紀行」のコーナーは神の子池を取り上げていたが、実際に足を運ぶ機会が少ない人も楽しく見ることができる映像だと思った。木曜日の「進め！地域おこし協力隊」のコーナーでは天塩町の地域おこし協力隊の方が紹介していた動画が非常にすばらしかった。気象情報では気象予報士の説明がわかりやすく、春の花を紹介することで季節の移ろいも感じられた。番組最後の視聴者から募集したお便りを紹介するコーナーはテーマを決めての投稿で今後も楽しみにしたいと思う。

○　「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」は、１週間を通して札幌に話題が集中しないようにという地域的なバランスが取れていたように感じた。４月４日(月)の苫小牧港の東港区に新たな岸壁が整備されるというリポートでは、トラックドライバーの負担軽減につながるという視点から、ドライバーのインタビューなどを紹介していたが、なぜ負担軽減につながるのかという背景についての補足があるとよかった。５日(火)の恵庭市で開かれている絵本の原画展の話題は取材の着眼点がよく、図書館として絵本を作成するというのは興味深い試みだと思った。７日(木)の夕張市の人口が7,000 人を下回ったというニュースでは、人口減少の背景について解説していたが、今後どうしていけばよいのかという点についてもっと詳しく知りたかった。同日に放送した札幌の朝活プロジェクトのリポートでは、リポーターがサウナを実際に体験するなど、さまざまな朝活が札幌で行われていることが分かりやすく伝わった。それぞれ地域の話題を取り上げていたが、もっと掘り下げて伝えていくことで、よりためになる内容になるのではないか。

○　身近な問題や、生活の知恵やヒントがバランスよくちりばめられており、身近な観光や文化などに目を向ける動きを支えてくれる番組になるのではないかと感じた。食べ物や政治、自然保護、教育などの硬軟さまざまな話題が石狩、空知、後志、胆振、日高それぞれの地域ごとに織り交ぜてられており、地域について何かを知ったり考えたりするのに時間配分やボリュームがちょうどよいと思った。また、若者の生活や地域活動に関わる話題も多く、若者にとっても何かを考えたり取り組んだりするきっかけになるとよいと思うが、デジタルなどを活用した情報発信など、若者に見てもらう仕掛けを試行錯誤してほしい。気象情報では海上予報についても詳しく伝えているのが非常によかった。室蘭の情報について、教育や産業、福祉など多彩なジャンルを日替わりで細かく知ることができ、身近な情報を知る機会になっていた。４月５日(火)

の室蘭工業大学の入学式のニュースでは、新型コロナウイルスの感染対策で制限のある状況で新生活に精いっぱい取り組もうとしている学生を見ると、受け入れる側の地域住民も応援したい気持ちになり、学生たちのうれしそうな表情から、安心感や元気を受け取ることができた。室蘭市の小学校ではクラスごとに入学式を行ったというニュースもあったが、子どもたちが感染対策をしながら日常生活で楽しいことは楽しいというように過ごせるのは非常によいことであり、地域住民にとってもこのような話題は安心や共感でき、地域内の連帯感を培うことができる大切な内容なのではないかと感じた。６日(水)には室蘭市沖でホタテ稚貝を出荷するニュースを伝えていたが、地元では赤潮の発生など今後の動きを注目しており、「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」では各地域の現状にさらに踏み込んで、詳細で継続的な報道を期待したい。

○　４月４日(月)の「ほっとニュース道北・オホーツク」のオープニングは、入学式や式の開始のベルが鳴る映像を使い、ワクワク感が伝わる演出で好感が持てた。月曜日の「ふるさと自慢」のコーナーは、各地の話題を自治体の広報担当者が紹介することで親しみが持て、短い時間の中で地域の細かなよさがしっかりと伝わってきた。スタジオで地域の地図を表示しているのもわかりやすかった。火曜日の「潜入！旭山動物園」は動物の映像に癒され、動物園の魅力もよく伝わる新企画だった。水曜日の「映像紀行」は季節に応じた美しい映像で地域の魅力がよく伝わり、今後も非常に期待できる。木曜日の「進め！地域おこし協力隊」は、自治体の委嘱を受けて、まちづくりで活躍する地域おこし協力隊の取り組みに興味が持て、次回も楽しみになる企画だった。気象情報は、珍しい気象現象と結び付けた話題や季節の事物や花の写真などから毎日の情報がリアルに伝わり、楽しく視聴できるように工夫されていた。「ほっとニュース道北・オホーツク」はこのように興味深い企画が多く、放送時間が１５分に伸び、ニュースがカバーする地域も広くなり、見応えを感じた。

○　「ほっとニュースぐるっと道東！」を見た。番組セットは「ほっとニュース北海道」と統一感があり、カラフルなデザインで雰囲気も明るくなってよかった。番組冒頭でその日のニュースを紹介するテロップでは、ニュースの内容や地域によって色を変えたり、場所についても地図を表示するなど、分かりやすい工夫がされていた。ニュースは各地域が同じ時間配分になるように配慮されていたように感じられた。特集はそれぞれの曜日ごとにテーマを深掘りして伝えており、４月７日(木)の「道東推し」のコーナーは「３分センコンＳＨＯＷ」と題して、制限時間３分で釧路、根室、十勝の週末に行きたくなるようなお得な情報を伝えるということで、厚岸町のあさり掘りツアーを取り上げていた。釧路放送局と帯広放送局のホームページは、掲載されているコンテンツは同じ内容のものが多く統一された印象を受けたが、各局独自の企画も継

続して掲載してほしいと思う。

○　北海道は広いので、道外から来た人にとっては全道を対象としたニュースを見ても、自分の生活圏につながっているという実感が沸かないが、「ほっとニュース道央いぶりＤＡＹひだか」を見ると、地域の中で生活しているというイメージが沸いてくる距離感が感じられる。地域のニュースを伝える中で、苫小牧港の新岸壁整備や夕張市の人口減少など、多くの人に関わる公共性が高い話題を取り上げる一方で、親しみやすい軟らかい話題も伝えていた。番組として硬軟取り混ぜて、ニュースを伝えていると思うが、特に軟らかい話題についてどのような基準で取り上げているのか気になった。また、気象情報では、気象予報士が視聴者それぞれの生活スタイルに合わせた呼びかけを挟むことで、地域密着や親しみやすさが増すので非常に好感が持てた。

（ＮＨＫ側）

特に軟らかい話題については、これまで放送で取り上げる機会が少なかった地域をできるだけ数多く取り上げていきたいと考えており、試行錯誤しながら話題選びをしている。

○　「ほっとニュース函館」は、放送時間が１５分に拡大したほか、新型コロナウイルスの状況を詳しく伝えたり、入学式などの季節のニュースを取り上げるなど、地域密着のねらいが伝わり、見応えがあった。ニュース１０分、気象情報５分という時間の配分も見やすくてよかった。食材の魅力を紹介する「市場旬だより」や、道南のさまざまな分野で活躍する人にスポットを当てた「道南フレンズ」などはよい企画だと感じた。函館市の高校生ボクサーの話題のように、若年層を取り上げることで本人や友達、学校関係者が番組を見る機会が増え、若年層への番組の浸透につながると思う。気象情報は、青森の情報や海上予報も引き続き詳しく伝えており、気象予報士も好感が持てる印象でスタジオ外の中継も見てみたいと思った。コーナーとコーナーをつなぐ映像として、函館のクロッカス、木古内町や江差町の町並みなど、その町に住んでいないと目にすることがないような映像を挟む演出がおもしろく、これからも道南のさまざまな地域を紹介してほしい。放送時間が増えたことにより取材の機会も増えるが、取材が増えることによって地域とのつながりも深くなるのではないか。

○　「ほっとニュースぐるっと道東！」の番組名は“道東をぐるっとくまなく取材・発信する”という意味とのことで、よいネーミングであり、期待感を持って見ることができた。１５分の放送時間のうち、５分間の気象情報のほか、曜日ごとに地域の課題をさまざま深掘りして発信するというスタイルは見やすく、翌日また楽しみに見たいと思える仕掛けになっていた。月曜日の「介護・医療　明日へ…」のコーナーでは、

介護現場の課題を取り上げ、視聴者と一緒に解決策を考えていく課題解決型の番組を目指すとのことだったが、今後どのような議論に発展していくのか見守るとともに、地域に根差した解決策を導き出してほしい。火曜日の「道東経済」は、釧路で基幹産業を通じて培われたものづくりの土壌をロケット事業への参入に生かそうとしている企業を取り上げていたが、釧路の産業の盛り返しにつながる夢を抱くことができる内容だった。水曜日の「災害から命を守る」でも視聴者から防災に対する疑問や悩みを募集していたが、双方向のつながりから現実的なアイデアや対策を考えていくということなのかと思った。木曜日の「道東推し」は、厚岸町のあさり掘りツアーを３分間のプレゼンで紹介していたが、実際に体験してみた写真やおすすめの料理情報からワクワク感が伝わり、体験についての問い合わせなどの情報も紹介しており、ぜひ体験したいと思う内容だった。金曜日の「わがまちニュース」は自治体の職員に地元とっておきのニュースを発信してもらうコーナーで、もっともアピールしたい話題を熱意を持って視聴者に直接訴えるという企画はおもしろいと感じた。道東という地域は経済や文化の違いはあるが、地元の話題が丁寧に情報発信されることで親近感や安心感がもたらされ、視聴者に身近な番組としてＮＨＫへの愛着が増すのではないかと期待している。

＜放送番組一般について＞

○　４月５日(火)～７日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう北海道」(総合 前 7:45～8:00 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は、道内各地の魅力を独自の視点で切り取るシリーズとして、「“根室人”が語る愛しの根室」を放送していた。５日は「ソウルフード」、６日は「映画館」、７日は「路地」という一見共通点がなさそうなテーマだが、地元・根室の魅力、昔栄えていた頃の街、現状や課題などを映像で見せるという演出手法によって視聴者の想像力を膨らませており、大変興味深かった。かつて根室は北洋漁業で大変にぎわった街で、その昔の写真と今の映像を示すことによって、閉塞感や衰退した町並みがとても印象的に映る映像だった。また、「おはよう北海道」で取り上げた企画は、「ほっとニュース北海道」など、ほかの時間帯の番組でも放送しているが、朝しかテレビを見られない人や夕方しか見られない人もいると思うので、地域の情報をどんどん発信する機会を増やしてほしい。

○　４月８日（金）の北海道道「札幌が生んだ『令和のヒットメーカー』蔦谷好位置スペシャル」(総合 後 7:33～8:45 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。札幌出身の音楽プロデューサー、蔦谷好位置さんについて、その人となりが非常によく分かり、音楽プロデューサーについても知ることができ、大変勉強になる番組だった。生み出す苦しみより楽しさが

勝っているという蔦谷さんの思いを通して、自身が仕事を楽しんでいることや音楽に対する愛がよく描かれていた。蔦谷さんが札幌で影響を受けたという人たちも紹介していたが、その人柄やコメントは素晴らしかった。視聴者から寄せられるリアルタイムのコメントも非常に多く、視聴者が感動している様子も伝わってくる構成だった。音楽プロデューサーという仕事は縁の下の力持ちで、なかなかスポットライトが当たる仕事ではないと思うが、丁寧な取材と蔦谷さん本人の出演で、音楽プロデューサーの仕事や曲作りの裏側がよく伝わってきた。

○　北海道道「札幌が生んだ『令和のヒットメーカー』蔦谷好位置スペシャル」は、番組内で紹介されたメッセージに「蔦谷さんが北海道出身の人だとは知らなかった」という声がたくさんあり、それくらい知られざる北海道出身の逸材だと思いながら、興味を持って見ることができた。音楽プロデューサーという仕事について取り上げる場面では、作曲や編曲だけでなく、ありとあらゆる音楽シーンに携わっている仕事ぶりが伝わってきた。また、挫折のときの救世主が函館出身のアーティストのＹＵＫＩさんだったというエピソードもとても印象的だった。母校の札幌市立発寒小学校の創立１００周年記念式典のときに子どもたちと触れ合う蔦谷さんの優しいまなざしからも親近感を覚えた。「北海道道」では、登場する人物の物語の中にたびたび包容力のある地域性や自然を含めた土地柄のようなものに気付かされることがあり、人の温かさや豊かな自然を大切にしていきたいと改めて感じることができた。

○　４月１５日(金)の北海道道「リトルダンサー　最東端で踊る」を見た。この春に中学生になった主人公が、２０２４年パリオリンピックで新競技に採用された「ブレイキン」への出場を目指し、父親の指導の下、一生懸命に頑張る姿から勇気をもらった。札幌でレッスンを受けるのではなく、「根室という田舎からブレイクダンサーとして有名になったらかっこいい」というコメントを聞くと、今後の活躍を期待するとともに応援したい気持ちになった。今後も「北海道道」でこういった人たちをぜひ取り上げてほしい。

○　北海道道「リトルダンサー　最東端で踊る」を見た。ブレイキンの選手を目指す主人公が、漁師の一家で愛情深く育てられ、ダンスの練習に励みながら家業の手伝いもして、両親も将来の夢を応援している様子は心温まるものだった。新興の競技への挑戦の機会は地方では環境が整わないために少なくなっているのではないかと思うが、専門家からリモートでアドバイスを受けることができる環境で、思いがあればどこからでも何でもできるという今の時代を感じた。「応援して期待してくれている親のためにも頑張りたいけど、自分のために頑張りたい」という彼のことばは印象的であり、インタビューでの「根室という田舎からブレイクダンサーとして有名になったらかっ

こいい」というコメントからは、地方にいても活躍できるし、地方に住み続けることに誇りを持っていることが伝わってきた。番組を通して、変化する時代とともに、若者の“地方”への価値観が変わりつつあると感じられ、主人公のこれからの活躍を期待したいと思った。

○　４月１５日(金)の「＃ナナメの場　スペシャル」(総合 後 7:57～8:42 北海道ﾌﾞﾛｯｸ)は、社会的課題の解決に向けた取り組みの現状を厳しく示すというのではなく、実際に頑張っている人たちを紹介して応援しようという姿勢が伝わってきて、ＭＣの人選も番組の性格や雰囲気にふさわしいと感じた。番組で取り上げられていた人たちを応援したいという思いが沸いてきたが、放送中に画面の左下に表示される視聴者からのリアルタイムのフィードバックでも“応援！”が一番多かったように、番組の温かい応援の姿勢を同じように受け止めた視聴者が多かったのではないか。ＶＴＲで紹介していた育児で困難を抱えている人たちにとってのつながりの場を提供する事例と、スタジオゲストの活動との関連性がやや分かりにくかったが、方向性が異なるゲストを迎え、いろいろなタイプの活動を交えることで番組の視野を広げたいというねらいがあったのではないかと思った。また、非営利活動は資金面や労力面で一部の人の善意に依拠しがちになるという問題があるが、これらは応援したいという気持ちで番組を見ていた視聴者も関心のある事柄だったと思うので、カフェや食堂の活動に対する共感と応援という温かい視線をベースとしながら、資金や活動の持続性というシビアな話題にも話が及んでいたのは非常によかったと思う。

○　３月２７日(日)の時論公論スペシャル「ウクライナ侵攻１か月　世界はどう変わる」(総合 後 2:00～3:00)を見たが、難しいとは思うがＮＨＫとして、ロシアのウクライナ軍事侵攻に対してのスタンスをはっきりしたうえで議論してほしかった。プーチン大統領の人物像についての詳しい説明はあったが、日本政府がこの１か月でロシアに対して、経済制裁などどのような対応をしてきたかや、国連をはじめとした国際社会の動きを取り上げる必要があったのではないか。ロシアに対する分析に比して、ウクライナについて、その立場などの説明が非常に少なかったように感じられた。解説委員の「ウクライナのゼレンスキー大統領が『この戦争はウクライナの独立戦争だ』と述べたのは正しい」という発言にも非常に違和感を覚えた。全体としてロシア側の視点で作られた番組という印象を受けた。

○　４月１日(金)のドキュメンタリー　春「空知の声は聞こえなくても」(総合 後 7:30～7:57)では、以前放送した番組から成長している空知君の姿を見ることができた。音が聞こえる子どもを育てることについて、音が聞こえない親の立場に立って番組を視聴すると、親子間でコミュニケーション手段が違うというのは大変なことであり、

両親の思いや葛藤が伝わってきた。また、空知君の母親は自分が聞こえる人だと勘違いされたとしても、音のある世界に生きる空知君には声が必要だと、本当に苦しい判断を重ねながら子育てをしてきたことが感じられ、それが象徴的に伝わるような映像やコメントを使った演出にも改めて感心した。これから空知君自身が成長して、いろいろな葛藤を感じる場面もあると思う。何よりも、飾らない両親のもとで成長する空知君とこれから産まれてくる弟妹とのストーリーは、聞こえないことに対する理解の深化にもつながっていくと思うので続編を期待したい。

○　４月４日(月)のワイルドライフ　自然写真家　野生へのまなざし「小原玲　命を守る　かわいいは最強だ」を見た。小原さんが癒やしを求めて報道写真家から動物写真家になり、動物を守るためにまた形を変えて報道写真を撮ることになるという、その必然のような流れを理解することができる番組構成だった。“守るために撮る”という信念は、野生動物を相手に撮りたい写真をどうやって撮っているのかと尋ねた仲間に語った「撮れるまで撮るんだよ」ということばに尽きると感じた。また、小原さんの娘の「(父親の) 小原さんが教えてくれたことを生かして、考えを引き継げば、自分の技術や小原さんの考えは消えない」というコメントからも父親を人間として敬愛しており、その価値観や願いを世に伝えたい、残したいという思いがよく伝わり、小原さんの撮影姿勢や信念を他者が語ることで、その信念がより印象深くなった。“かわいい被写体に癒やされたい”という立場から、“かわいいを守る”立場へと変わっていく小原さんの数々のことばや表情、作品などから伝わる姿勢が、一人でも多くの“カメラ持ち”に共有されるとよいと思う。

○　４月１１日(月)から放送が始まった【連続テレビ小説】「ちむどんどん」は沖縄本土復帰５０年の機会を捉えた放送であり、この番組を通して沖縄の人たちの暮らしや文化に関心を寄せるきっかけとなってほしいと思う。

○　４月１８日(月)のファミリーヒストリー「安田顕～辛抱強く前向きに　困難を越えて～」(総合 後 7:57～8:41.30)を見た。安田顕さんが「戦後の時代の流れの中で翻弄された人々がたくさんいた中で、その一つの例として安田家のヒストリーがあるのではないか」と言っていたのはまさしくそのとおりだと思った。戦争についても改めて考えさせてくれる貴重な番組だった。あらゆる困難を乗り越えて、前向きに生き、後世のために足跡を残してきた祖先たちへの感謝と愛が安田さんから感じられ、ユーモラスでちょっと哀愁のある演技のルーツもかいま見えた気がした。室蘭の歴史を軸に時間的にも空間的にも広がりながら今を生きる私たちへとつながる、深くて広くて温かい、心にしみる番組だった。人は地域の歴史を作り、そしてまた地域の歴史が人の歴史を変えていくと考えさせられる番組だった。

○　４月９日(土)のＮＨＫスペシャル「やまと尼寺精進日記　ひとり生きる豊穣（ほうじょう)」を見た。「やまと尼寺　精進日記」で取材してきたものを取りまとめたものだったが、このほかにも「ＮＨＫスペシャル」はタイムリーで興味を引く題材を扱うため、視聴する機会が多い。

○　「夜ドラ」など、ＮＨＫのドラマはジェンダーなどのさまざまな題材を真正面から捉えながら、視聴者に分かりやすく伝えようとしており、幅広い視聴者に見てほしいと感じる。

ＮＨＫ札幌放送局
番組審議会事務局